
並行世界をつなぐまで

奈屋一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

並行世界をつなぐまで

【Nコード】

N4731I

【作者名】

奈屋一郎

【あらすじ】

視覚異常を持つ少年と並行世界から来た少女の物語

ブローグ

中学三年の夏休みを終えてからはとても退屈なもので、俺の経験上、近視で乱視のくせに眼鏡を忘れ、映画館で観た作品が『博士の異常な愛情』くらいに味気なかった。

クラブ活動を夏に引退し、その暇をゲームや漫画などに費やしても費やしきれず、得意の絵画に性を出そうかと思ったけれど気分的に乗らないので手つかず。特にハプニングのない学生生活は、たったの二週間でマンネリ化。

いつもと同じように七時五五分の普通電車の三両目に乗り、二駅先の大型駅で快速に乗り換え、一五分ほど揺られていれば五百回は見てきたであろう我が中学の校舎が見えてくる。

学校に着いても学習意欲がなく、交友も浅い俺にとって校内にいる時間は味のないガムを噛むようなものだ。ただなんとなく通っているだけで、ぐるぐるぐるぐる同じ日常を送っている。こちらもマンネリ化。

ちよつとした事件が起こったとしてもそれは食堂の食事で腹痛や、家庭科室のガス漏れ程度に過ぎない。その程度、特別驚くことではない。まれに起こる人為的ミスが原因なのだから。

というのがこれまでの俺の日常だった。

けれど今日は違った。いつもと同じ普通電車の三両目に乗ろうと思っていたのだが、視線の先に隣のクラス不良グループが車内にいたのでさりげなく四両目の列に足をすらし移動。妙にかまってこられると鬱陶しいことこの上ない。

いつもは昼前後から顔を出す奴らがなぜ真面目に登校時間を守っているのだろうかと一瞬考えたが、答えはすぐに出た。今日は運動会の全体練習なのだ。それも一日中。来週に迫った運動会のリハール。そのため生徒指導の先生が奴らにキツク言ってきかかせたのだろう。

車内は一両後ろになったからといって、いつも通りの人の多さと息苦しさは変わらず、うんざりしながらつり革に手を伸ばす。

変わらない、と思ったのは錯覚で、周囲を見渡すと若干空気が違うように思えた。

それは殺伐とした、ちよつと陰鬱な空間。

原因は俺の四人程左隣（五両目に近い方）にいた。

その人の顔は歪んでうねり、そしてばやけて見える。表情を見ることは無理だと判断し、視線を下に落とす。青が混ざった緑のブレザーに灰色と黒のチェックのスカート。

俺と同じ中学の制服だ。

足下に下ろした視線をあげようと思ったのだが、太もも付近でつい視線を止めてしまった。なにも彼女の細く、それでいて張りのある太ももに眼がいったから、ではない。

ただ、女生徒の太ももを撫でる太く毛深く薄汚い指が見えたのだ。なるほど、この子は痴漢されて感情が乱れているから、顔が酷く歪み、原形をとどめておらず、キャンパスに様々な色を混ぜた絵の具ように見えてしまうのか。

手錠をはめられることを決意してまで触れたいと思うからには彼女はそこその容姿の持ち主なのだろう。俺は彼女の顔のつくりが気になったので、つり革から手を離し、自分の太ももを強くつねった。それでもしないと彼女の顔のうねりがなくならないからだ。

昨日あまり寝なかった為かいつものつねりじゃきかず、もう一つギアをあげてみる。

「痛っ」

と、つい声を漏らしてしまったが、そのお陰で彼女の容姿が確認できた。

気の強そうな吊り上がった大きな瞳にそこそこ整った鼻や口の作り。評価としては中の上が妥当だろう。ということは、犯人は口リコンの類なのだろうか。いい年したおっさんが触れるのだからそれくらいしか理由が思いつかない。それとも気の強そうな人間の苦痛

に歪む表情を見て楽しんでいるのだろうか？ そちらのフェチなら俺も少し納得できる。

一瞬あつた彼女の視線を無視し、過ぎ行く町並みに目をやった。彼女を助ける理由など一片もないのだ。

本当に嫌がつているのなら泣いて叫ぶだろう。だから援助交際の一環かもしれない。そうじゃないとしても僕がわざわざ人をかき分け助けに行くなんて面倒だ。周辺の人達が助ければいい。彼女の周りには立派な大人が憂鬱な表情で蠢いているのだから。

乗り換えの駅に着き、隣の快速待ちのホームに列をなした。運良く先頭になり、つま先で黄色の線を踏みおよそ二分後の電車を待つ。「特急列車が通過しますので黄色い線の内側にお下がりください」アナウンスに従い、僕は半分踏みつけていた線から一步下がった。つもりだった。

脇腹に重さを感じ、気付けばホームから足は離れ、線路上を舞っていた。何かがぶつかってきたのだ。しかもそれは俺の体に抱きついて離れようとしないう。

横目で確認すると、それはさつき痴漢されていた少女だった。

どうせなら痴漢をした相手を殺せよ、と溜め息をつきたくなったが、そんな場合ではなく、大きなブレーキ音と共に特急列車が突っ込んでくる。それはどんな生物よりも威圧感があった。ただの鉄の塊なのに。命を落としてしまう。

死の直前になってこんな何もない繰り返しの日常を、俺は恋しく思ってしまった。

きっとそれなりに裕福な家庭で私立中学に入ったにもかかわらず自堕落な毎日を過ごしていたから罰があたったのだろう……と納得しようとしたができるわけがない。

ならばどうか来世はがんばります。

迫り来る特急列車から眼をそらし、俺は一心に当てのないことを願った。

そつえば朝、お母さんにいつてきますと言わなかったし、朝飯

も時間がないですましてしまった。最期だと知っていればもうちょっと愛想良くすれば良かった。

などと後悔を渦巻かせ、眼を瞑り、もう最期の最後というところで、巡るように先週公園で変な女に会ったことを思い出した。

そうだ、こいつに会ってから俺の日常は少しずつ歪んできたんだ。

気がつくと俺は六畳程の和室の隅をぷかぷかと浮いていた。まるで水中を泳ぐダイバーのように。

窓から夕陽が差し込む部屋には俺と同じ程の年齢の男子と、そのお母さんらしき女性が正座をして向き合い座っていた。けれど決して居心地のよい雰囲気ではなく、部屋全体にピアノ線が張り巡らされているような緊張感。

「お母さん、話して何？」

男子はいつもと違う母親の雰囲気を感じてか少し声が震えていた。母親らしき女性は返事も頷くこともしないで、ただずっと男子を見つめている。

なんだこれは？ まるで俺は幽霊にでもなつて他人の家のプライバシーを覗いているみたいじゃないか……そういや死んでしまったのか。というか死ぬと幽霊になるって作り話じゃなかったのか。

死んでしまったことなんてこんな状態だと些細なことのように思えてくる。どこか夢心地な感覚は幽霊になって浮いているからなのだろうか。

「大事な話しよ。この間、わたしの顔が歪んで見えるって言ったわよね？」

「そ……うだけど、そんなの寝不足だったらなるだろ。別に普通――」

「普通ね……。ということとはしょっちゅうその現象が起こっていたってことよね。いつから？」

「えっと、だいたい声変わりが始まったくらいだった気がするけど」
男子がそう言うなり、母親は彼の手を引いて和室から慌ただしく出て行った。

俺はその光景を見て言葉も、体すら動かすことも出来なかった。なぜなら、

「一週間前の俺だ」

俺はタクシーの助手席にいた。一週間前の俺は後ろでお母さんと並んで憂鬱そうな表情で座っている。

「どうしたんだよお母さん。顔色悪いしさ。何かあったの？ もしかして体調悪いの？ 今から病院いくのか？」

お母さんは何も答えず、ただ窓を見つめ景色に焦点すら合わさずボーッとしている。

タクシーの運転手は裏道を良く知っているらしく、混んでいる都道や国道やらを通らず、すいすい快調に目的地へと向かっていく。

一週間前の俺はお母さんを心配し、不安そうに見つめている。

が、もうその時間を経験した俺にとっては一週間前の俺が滑稽で仕方がない。お母さんを心配するなんてお門違いもいいところなのだから。

タクシーはゆっくりと丁寧に大病院の前で停車した。

俺の一週間前の記憶とどこにも差異のない光景が、今、目の前で起きている。

断片的な夢のように、俺は突然病室に瞬間移動していた。いや、俺の体ではなく、きつと俺の記憶が移動しているのだろう。これは走馬燈と呼ばれる類に違いない。

一週間前の俺は病院に入るなり五感の検査と健康診断が行われ、その後、眼科の待合室に案内された。名前が呼ばれ診察室に入ると初老の医者とその横に女性の看護師、後ろには白衣を着た人が数人ボードを片手に立っている。さながら実験でも始めるかのようだ。

初老の医者は一ツ咳払いをしてからカルテを一瞥すると口を開いた。

「有馬くんはお母さんと同じく視神経の異常を持っている。これは病気ではなく遺伝。今の医学じゃ残念ながら治療方法は見つからない」

「ちょ、ちょい待って。いきなり過ぎて意味が分からない。どうい

「異常だよ？」

医者はそれを聞くとお母さんに「まだ話してなかったのですね」と問いかけ、お母さんは小さく頷いた。すると医者は指先をすつと一週間前の俺に向けた。咄嗟に俺は指から眼をそらす。

「有馬くんは先端恐怖症。それに絵画も上手く夢もよく見るようだね。音無しフルカラー」

「だからどうしたんだよ。それだけで俺が異常だなんて決めつけるな」

「五感のテストを行ったが、これがその結果だ。自分の眼で確認するといい」

差し出された用紙には五角形のグラフが二つ、赤と青で描かれていた。それぞれの角の辺りに視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚と書かれている。赤のグラフが青のグラフよりも視覚以外が小さくなっていた。特に赤のグラフの視覚だけが異常に突き抜けている。

「赤が有馬くんの数値、青が同年代、一五才の平均値だ」

「ってことは視覚だけが異常に発達してるんですか？ でも俺は視力が良くないですよ」

「なにも視力だけが視覚とは呼ばない。君の視力の低下は中学生になつてからだと聞いている。何か心当たりはないかい？ 中学生になつてから変わったこと」

心当たりは幾つもあった。

一つは絵を描くことが簡単になったこと。思い通り脳内に被写体をインプットできるようになったからだ。二つ目は眼の疲れが酷くなって、テレビやゲームなどを二時間以上見ていられなくなること。三つ目はほとんど毎日夢を見るようになったこと。四つ目は先端がやけに恐ろしくなったこと。五つ目は……人の顔がたまに変に見えること。

それらを口にしようとしたが、一週間前の俺は口に出ることが出来なかった。言ってしまうと異常者というレッテルを更に二重に張られるようで心底恐ろしくて。

「通常なら五感のバランスはほぼ均等なはずなのだが、有馬くんの場合、というよりお母さんの血筋の場合、そのバランスを崩してしまっているのだよ。視神経を発達させ、他の神経は退化させてしまふ。視神経の発達した君は、他の人より眼に情報を与えずでしまふ。だから先端に恐怖したり、夢をよく見たり、絵が上手だったりするのだよ。けれど眼球は通常の間と同じだから負担を与えすぎた結果視力が低下する。まあ、この手の視神経異常の代表的な事例だからそれほど心配しなくていい。眼を休めることだけ考えていれば、社会に不都合はないだろう」

社会に不都合はない。本当にそうなのだろうか？

この医者は俺の痛みを知らない。振り向いた友人の顔が消えていたり、歪んでいたたり、ぶつ切れになっていたことがないから軽々しく言えるのだ。

それに原因が寝不足ではなく、自分の神経になるのだから一生付き合っていかなくてはならない。一週間前の俺は何も言わず、うつむきぐつと拳を握り震えていた。後ろからはお母さんの嗚咽が聞こえた。

帰りは父さんが迎えにきてくれて親子三人で帰路についた。父さんは何も訊かずただ一言「辛いことがあればいつでも言え」と無愛想に言ってくれた。

家に着いても一週間前の俺は晩ご飯も食わず、自分の部屋に閉じこもりボーツと天井を見つめていた。何の変化もない天井がその時の俺の精神状態にちょうど良かったのだろう。

陽はとうに暮れ、そろそろ入浴しようかと立ち上がった一週間前の俺は、学校のリュックに入れてあった携帯電話を開いた。家に着いてからの数時間の間に同じ相手から四件もの着信履歴が入っていた。そしてその相手に電話をかける。

「おい、やめろ！　そこから悪いことが立て続けに起きたんだ！　電話を切れ！」

と思わず俺は叫んでしまったが見ているのは走馬燈。記憶なのだ

からゲームのようにリスタートなんてできないし、過去に上書きは不可能だ。

電話の相手は一年下のクラブの後輩、和勝からだった。体が弱くあまり学校に来ていない彼はクラブの参加も少なかったが、氣遣いのでき、妙に気が合い昼食を共にする仲だ。

電話の内容はこうだった。最近学校で話題になっていたミステリースポットにいきませんか、折角の金曜日なのに夜更かししないともつたいないですよ、と。

彼はこういうオカルト的なことが好きで、弁当箱を開いてはよく未確認飛行物体から魔女のことまで幅広く話してくれた。で、話題のミステリースポットとは学校最寄り駅から歩いて一五分ほど進んだ中央公園内の草むらの中にある大きな平べったい石らしいが、そこがUFOの着陸場所だというのだ。そんな馬鹿馬鹿しいうわさ話なのだけど、オカルト好きの和勝が放っておくわけがない。

そのときの俺は家が居心地の悪いものとなっていた。自分の遺伝異常が見つかったせいで、お母さんは自分を責め、父さんはお母さんと俺をどう励まそうか悩み、とにかく空気が重い。だから俺は逃げ出す場所を探していた。そこに和勝からの電話。行かないはずがない。

待ち合わせ場所となった中央公園の大広場はランニングや犬の散歩をしている老若男女がポツポツといて、人通りは少なくはなかった。その広場の街灯付近で和勝が俺に手を振って待っていてくれた。「先に着いてたのか。待たせた？」

「まあ五分くらいですよ。気にしないで下さい。僕はこの近所で住んでいるので、早く来すぎたのです」

「ミステリースポットが気になってか？」

「はい！」

子犬のような人懐っこく純粋な笑顔を向ける和勝に一週間前の俺は同性ながら少し照れてしまっていた。いや今の俺も照れてしまっ

ている。普段は無表情なのだが、好きなことになる途端表情が柔らかなるのが彼の特徴の一つだ。

和勝は余程気になっていたのだろう。挨拶を終えたとすぐミスリリースポットに向かって歩き出した。早歩きをするものだから会話をする雰囲気すらならない。

しばらく進むと和勝が懐中電灯片手に草むらをかき分け「ありましたっ」と嬉しそうな顔を一週間前の俺に向けた。指差す方向には平たい楕円状で幼児ほどの大きさの石が置かれている。

「特になにも——っ！」

特に何もないと言おうとした俺は石の中央部分を見て凍り付いてしまった。

「どうしたんですか有馬さん。もしかして宇宙人！」

嬉しそうに問いかける和勝には悪いが一週間前の俺に返答する余裕などあるわけがなかった。だって石から手が生えているのだから走馬燈を見ている俺ですら絶句だ。当時の俺はよく気絶しなかったな、と讃えたい気持ちがわいてくる。

「見えないのかっ！ 石の上に」

「うちゅうじん？」

「ちっがつうつ。手、手が、腕が空に向かって垂直に伸びてんだよ！」

じゃあ、と言って和勝はポケットからデジタルカメラを取り出し、一週間前の俺が指差す方に向かって二、三回シャッターを切り、モニターを覗く。

「写んないんですけどね？」

通常の人間には見えないし、カメラにも写らない。当たり前だ。俺の眼が異常だからだ。

「もしかしたらそういう形の宇宙人かもしれませんよ？」

「そっ、そうなのか？」

「ええ、人型からタコみたいなのまでいるんですからそんなのでもいいおかしくないです」

そんなわけないだろ、いつもの俺なら突っ込みを入れるのだが、当時の俺は気が動転していたので、和勝のその言葉を鵜呑みにし、石に向かって一歩踏み出した。

石から生える手の指先は、草木が風でたなびくみたいに微動している。

「それじゃ、失礼します」

そう言って一週間前の俺は生える手の人差し指と自分の人差し指を合わせた。

おいおい、動転し過ぎだろ。洋画に影響され過ぎだし行動が馬鹿っぽい。

「おお、わかつてるじゃないですか有馬さん」

同士を見つけた喜びに声を上げる和勝。

何をわかつてるんだ、何を。お前はなにもわかっていない。だってその手は……。

「うわっ！」

指先と指先が触れた瞬間、その手は当時の俺の人差し指を握り、石に向かって引っ張ってきたのだ。

「ちよっ、吸い込まれる！」

叫んだ瞬間、重さがなくなり、目の前に女が現れた。いや、この時は気付かなかったが、正確に言えば石から伸びた手が女の手であり、石から女が出てきたのだ。

どうやらその女の姿は和勝にも見えるらしく、一週間前の俺と同じく硬直している。

状況が飲み込めず、季節外れな薄い生地の手袖ワンピースを着た女をジッと眺めること数十秒、女は苦笑いを浮かべた。

「あれ？ あっはは。君たち良く似てるね？ では……また今度」などと明るく言って女は一週間前の俺と和勝の間を抜いて駆けて行った。

「俺たち、全然似てないよな。顔も身長も」

「は、はい……全く」

ついでに言うと言型と服装すら似ていない。

呆然とした俺たちを置いて、石の精？ はたまた幽霊？ は駆けて行った。

この日から一週間を過ごした俺は、あの女は死神だったのではないのか予想する。

何故かという、この女と会ってから食堂で食中毒にあい、掃除中の家庭科室でガス漏れ騒動が起き、最後には自殺に巻き込まれたのだから。

俺は溜め息をつき瞳を閉じた。

「うわっ、なんですかこれっ！」

眼を開くと走馬燈が終わっていると思っていたが、今度は違う夢の扉を開いてしまったようだ。

眼前を電車が少しだけ浮き、線路に転がる俺をギリギリかわしていく。暗くて本当に電車なのかどうかわからないが、独特の鉄を擦る音がするので間違いないはずだ。

「はやくこつち！」

言つと同時に隣の線路方向から手が伸びてきて俺の手を掴み引きずり出そうとする。俺は咄嗟に隣にいた痴漢少女の手を取った。少女一人分の重さなど錘にもならなかったようで、勢いそのまま引きずられる。線路の石が体をすり、血だらけになるだろうと思ったのだが生憎夢なので痛みなど感じられない。というか擦っているかどうかすらわからない。

……夢？　ちよつと待てこれは本当に夢なのか。俺は異常体質になつてから夢で音を感じたことがなかった。けれど今はどうだ。電車の通過音が鼓膜に響いてくる。

「さすがに焦つた焦つたよっ。寸止やね」

ほらやつぱり音がする。俺の夢に音が無いはずだ。なのにこの声……聞こえるどころか聞き覚えすらある。もしかして！

「お前は死神！」

「酷っ！　命かながら助けたのにその言われよう！」

そう言いながら彼女は重力を無視したように軽々と線路の柵を俺と痴漢少女を引っ張って飛び越えて行く。コンクリートからビルの屋上まで、足にバネが付いたように跳ねる。この街全体がまるでトランポリンになったようだ。

「これどうなつてんだよ。おい降ろせ死神！」

「ほいや」

マンションから飛んだ瞬間、彼女は俺の手を離した。

四メートル程の高さから道路に急降下。

「うわっ。今度こそ死ぬー！」

恐怖を和らげようと俺は痴漢少女に抱きつく。この状態になってまで眼を覚まさないこいつを心底羨ましく思う。だって二度の死期を記憶に留めないでいられるのだから。

こんなのトラウマ物だ。明日から俺は電車と高所の恐怖症になるのだろう。

いやいや、明日なんてあるのか？

「ごめんなさい！」

俺は出せるだけの声を精一杯出した。何で謝ってるのか意味が分からない。マンションの裏路地に反響する悲鳴にも似た声。

あの女が死神なら助ける必要なんて無い、このまま死ねば投身自殺。だが女が死神でなければ助けてくれるはず。

眼を開くと手を伸ばせばコンクリートに届きそうなほどまで落下していた。これは確実に死んだな。目を閉じた瞬間、横からぐいつと手が伸び、俺の体を抱えた。寸での所で落下を免れた。本当ギリギリのギリだ。

「バカ、死ぬとこだったじゃないか」

「あんたが降ろせて言うたやろ。だから降ろしてあげたの、地上に」

「もつと丁寧な方法があるだろうが！それに俺は絶叫マシン系が嫌いなんだよ！」

「なに言ってるんかわからんけど、少し落ちついたら？飛んでる最中、この近くで公園あるの見つけたからそこでおねーさんと話しよう、な？この子も気絶してくるから起きるまで面倒見た方がええよね」

言われるままに俺は痴漢少女をおぶった彼女に着いて行くことにした。一瞬、得体の知れない彼女から逃げたい気持ちに駆られたが、さっきのエスパー的な力を思い出すととてもじゃないが逃げ切れる

気がしない。大人しく着いて行き、話を聞いて「はい、さようなら」で済ませれば手っ取り早い。

石から出てきた女なんて気味悪く、一分一秒も一緒にいたくないからな。

案内された場所はブランコとベンチに砂場しかない小さい公園だった。石女は痴漢少女をベンチに寝転がせると、俺をブランコに案内した。

「うお、これ不安定な椅子やね」

面白くない冗談を言い、ふらふらしている石女を俺は疑わしげな眼で見つめる。

「あれま。そんな顔で見ないでくれよ。照れる照れる」

薄ら笑いを浮かべ、見ないでと彼女は手をひよいひよいとはらう。「何か用ですか？　僕はあなたのような不気味な人と関わりたくないんです」

「不気味？」

「ええ、気色が悪い。見た感じ高校生ですよ？　そんな人が朝っぱらから中学生をナンパして……いや、それ以前にあんた石から出てきたでしょ？　一体何者？」

俺が早口で言うと彼女はブランコから降り、俺の正面に立ち瞳を潤わせた。

なんだこの雰囲気は。漫画ならきつと花びらが彼女の周りに舞い散っている。

「きみに一目惚れしちゃった。どうかあたしと付き合っては下さいませんか？」

「はあ？」

全く質問の答えになっていない。けれど俺は怒鳴ることもできず、ただ彼女の艶やかで色っぽい厚めの唇と大きな瞳に心臓を高鳴らすことしかできなかった。

「好きなのですよ。あなたが」

「ちよい待って。あのその、なんというか、えーっと」

告白された経験など一度も無く、さらに年上で、それに石から出てきた女。返答できず、ごまかすにもそんな奇異な経験を見たことも聞いたことのない俺は口ごもることしかできない。

約一分もじもじした結果、出た言葉がコレだった。

「つ、釣り合わない気がするの」

一昨日観たドラマのセリフを吐き、我ながらいい出来だと心の中でガッツポーズをとる。これほどまでにドラマを観てよかった思ったことは一度も無い。のだけど、彼女の様子は残念そうだとか、涙を溜めるだとかそういう方向ではなく、眉を上げ、目尻をピクピクと動かし怒りに満ちている。

「釣り合う？ それは世間体を考慮したから？ 恋愛感情を常識で縛るやなんてすっごい馬鹿っぽいし勿体無い気がするんよ。やからそんな物に縛られないで君自身の言葉で答えてえよ」

「そ、そうだね、そうです。ならあなたは何者なんですか？ それにさっきの中国雑技団真っ青の空中劇はどうやったんですか？

それを訊いてから返事します」

「それもそうね。いきなり一目惚れましたっ、言われても答えようないっか」

うんうんと頷く石女。いやいや、あんたが告白する前に質問したんだけどな。人の話を聞かないタイプの人間なのだろうか。

「あたしはリラ。こことは違うもう一つの世界から来ましたっ」

えっへんと腕を腰にあて胸を張る彼女。

「あの、もっと細かく説明してくれませんか？」

「あーそう？ じゃあ、あたしは一七才で一人っ子で、みんなからよく明るいけど鬱陶しいって言われるかな？ でもでも悪いことばっかじゃなくって一本芯が通っていて頑固とも言われるね。結構キレイ好きで、部屋の掃除は週二回。家事手伝いはあんましないけどできないこともないんよ。あとはえーっと——」

「そう言うことが聞きたいんじゃないんですけど」

「あつ、学校のこと？ 成績はあまりよ——」

「もういい、俺が質問します。しかも二つだけ」

「うつわ優しー。ますます惚れちゃう！」

人をぶん殴りたくなっただのは久しぶりだ。けど殴れない。女だし、それにさっきのエスパーを見るとその後どんな仕打ちを受けるか…

…身震いがする。

「異世界って何ですか？ それと何であんなすっごい力が使えるんですか？ はい、この二つです」

リラは立つことに疲れたのかブランコに座り、ふらふらふわふわしながら話し始めた。

「もう一つの世界。こことは違うけど一緒。うーん、枝分かれしたって言えばいいのかな。だからこの世界にもあたしはおるの」

「つまりパラレルワールドってことですね」

和勝からそのような話を聞いたことがある。確か並行世界とも言っらしい。

「で、その世界では二人に一人くらいの割合であたしみたいな力が使えるんよ」

「どうして石から出てきたんですか？」

「あそこがあつちとこつちをつなぐ扉だったから。そう、そうなんよ！」

話している最中にいきなり興奮してきたリラは頬を赤らめ、俺に上目遣いをしだした。

「ちよっとした手違いでドアに挟まってや、そこを君が助けてくれたんよね。ああ、思い出すだけで……イイ。あの指先にちょこんと触れる優しさ。もうそこから恋が始まっていたのよ」

それじゃ一目じゃなく一触れ惚れた。そんな変な奴初めて見たけど。さすが異世界人。にしても映画の真似なんてするんじゃないかな。影響力あり過ぎなんだよスピルバーグ。

「あつ、そうや。君に怪我は無い？」

「いや、大丈夫ですよ。勢い良く引っ張ってくれたから体が浮いてあまり地面に擦りませんでしたからって、あ！」

ビルから落下させられたせいで忘れてたけど、このリラさんは俺の命を救ってくれたんだ。なのに俺は無愛想に受け答えして、それが恩人に対する態度か。

「すみません忘れてました。俺はあなたに死に際を助けてもらっただけですよね。すみません失礼な真似を。いや、ありがとうございませう」

「ええんよそんなの。それをする為にあたしは来たんやから」

「俺を助ける為に来たんですか？」

「えっと、話しの続きはあとで」

そう言っただけでリラは俺の後ろを指差す。なぞるようにして視線を追うと、ベンチの上に寝転がっていたはずの痴漢少女が瞼をこすりながら座っていた。なるほど、リラが並行世界から来たことは他言無用ののか。

痴漢少女は座りながら大きな欠伸と伸びをして俺の方を向いた。

その瞬間、彼女の表情がみるうちに青白くなっていく。

「うっわ。生きてる」

そんな露骨に引かなくてもいいだろ。ムカつくから悪戯してやる。

「生きてるんじゃないかって二人とも死んだんだよ。ここは天国なのだ」

「ちよつと黙れ。うるさいから」

俺の言葉を見無視し、痴漢少女は携帯を取り出し、忙しなく指を動かした。

「あの子なにしてるん？ ピコピコって」

「さあ、俺に聞かれても。あなたの超能力を使って調べてみればいいじゃないですか？」

「なんでもかんでも力に頼るのはダメなのだよ」

「はあ、そうですか」

なんて指を横に振り俺を宥めるリラだが、好奇心旺盛な瞳で痴漢少女を見つめる。心の真ん中はガキなのだろう。しばらくその様子を見ていると、いきなり痴漢少女は携帯を見つめ声をあげた。

「どういうこと？ ね、あんた、その傍観者！」

「俺のことか？」

「そう。あんた確かにあたしに突き落とされたよね？」

「そうだよ、と返事をしようと思ったが、それだとどうやって助かったのか説明するのが面倒になる。しかしこいつが人を殺そうとした事実をうやむやにするのは嫌だ。なので結局本当のことを言ってしまった。」

「突き落とされたよ、見事なまでに」

「ってことはこの記事は本当なのね？」

痴漢少女はいきり立って携帯の画面を俺の目の前に向けてきた。眼前五センチにも満たない近さ。

「近い。そこまで俺は近視じゃない」

俺はチ力チ力する画面が目障りだから痴漢少女から携帯を取り上げ、表示されているページを適度な近さにして読む。そこにはさっき俺と痴漢少女がホームから落下した出来事が書かれていた。けれど事実とはかなり異なっている。

『中学生らしき男女が特急列車通過直前にホームに落下』

ここまでは間違いない。けれどその後が問題だ。

『その男女は奇跡的に電車と線路の隙間に入ったことで命を落とすことは無かった。だが、電車通過後、二人は行方不明。血の痕跡などが残っていないため、その後この場を離れたと思われる。そのため現在警察は事情を訊くため二人の行方を追っている』

「これって電車……止めてるよな」

「ええ。この前のページに載ってたけど、約三〇分の遅れらしいわ」
首都の中央線。しかも通勤ラッシュと被る時間。いったい幾らの損害が出たのだろうか。痴漢少女の声も震えているから考えは同じなのだろう。

「まあ人を殺さなくて済んだだけマシだろ」

「何言ってるのよ！ 殺人未遂に借金だなんて死んだ方がマシよ！」
痴漢少女はじつと俺を見つめたまま声も出さずに泣き始めた。

「何だよ、俺が悪いのかよ？ 突き落としたお前が悪いんじゃない」

か」

「だって、だって、うぐつ。結局死ななきゃダメじゃない」

「なにも死ぬことないだろ、痴漢少女」

「その呼び方、わたしが変態みたいじゃない！元はと言えばあんたが見て見ぬフリするから死にたくなつたのよ。そうよ、自殺スィッチを押したのはあんたよ！」

「そんな物騒なスィッチ押すか！」

何故かこれじゃ俺の方が悪いみたいじゃないか。意味不明だ。

痴漢少女は死んでやる、と何度も呟きながらベンチの上に三角座りをして縮こまった。その様子を見てリラが俺に耳打ちをする。

「ねね。あの子死んじゃうん？」

「さあ？でもこのまま放っておけば確率の高いんじゃないでしようか」

「それは放っておけんね」

リラは痴漢少女の前に行くと、目線の位置を同じにして優しく話しかけた。

「あんた名前はなんて言うん？」

「うっさいな」

「痴漢少女です」

「ちっがう！唯賀。ゆーいーか！」

この手のひねくれた奴は扱いやすい。ちょっと押してやるとすぐノってくるからな。

「あたしがゆいかを死なないようにする」

「どうやってよ」

「そ……それは」

思いつきで物を言ったのだろう。リラはチラリとこちらを見ると、素早く俺の元に寄り、また耳打ちをした。

「なあなあ。あたしこの世界のことわからんのよ。どうすればいい？この場合」

殺そうとした相手を助けるのはかなり癪だが、俺より年下の女子

が死を選んだのだから、そうとう頻繁に痴漢をされていたのだろう。いや、痴漢だけが理由とは限らないけど。

うーん、このまま自殺してしまうのもそれはそれで可哀想だ。

「えっと、警察に唯賀がホームに飛び込んだってバレなきゃいいんだから……監視カメラを破壊して……も意味ないよな。もう録画してるだろうから。じゃあ、そのテープかデータさえ消しちゃえばいいんじゃないでしょうか？」

「データ？ テープ？ うんわかった。ちょっと行ってくる」

リラはうんうんと頷くと駅の方へ駆けて行った。本当にわかったのか凄く不安だ。

「ねえ。あの関西っぽい話し方する人、どこに行ったの？」

そう言われてみればリラはそういう訛りで話す。向こうの世界じゃあの話し方が主流なのだろうか？

「実はあの中央線の警備会社の娘なんだ。だから親に会いに行つてさっきの時刻の部分を消してもらうように交渉してもらいにいった」

「えっ、そんなことできるの？」

「さあな。で、なんでお前は死のうと思ってたんだ？」

「教えない」

「じゃ、もしリラが交渉成立したら理由を教えてもらうからな」

「好きにすれば。そんなこと出来っこないんだし」

助けてやろうとしてるのに生意気な奴だ。しかもとぼつちりを与えた俺に対し、自殺の理由すら教えないとは人としてどうなのだろう。

ぶん殴りたい衝動を抑え、俺はリラが帰ってくるまで待つことにした。もちろん無言。唯賀を一瞥するとポケットから記念メダルのような物を取り出し、眺めていた。

待つこと三分。駅に行つて帰ってくる時間よりも早くリラは満面の笑みで帰ってきた。

「ほ、本当にやってきたのか？」

「もちろん。テープやのうてコンピュータやから手っ取り早かったんよ」

今度は俺がリラに耳打ちをする。

「あのですね、もうちょい常識をわきまえて下さい。ここから駅までたぶん歩いて三分くらいかかるんです。それを半分の時間で帰ってくるなんて……。ほら、唯賀も疑ってる」

唯賀は疑っているというか驚いた表情で、こちらをキョトンと眼を丸くして見ている。

「ここは俺がフォローするので」

「あつ、ありがとね」

俺は口をリラの耳元から離し、呆然としている唯賀に一步近づく。「お父さんに電話したんだってさ。だから早かったんだよ」

「あ、そうなの？ で、証拠は？」

どこまでも自分の都合しか頭のない唯賀に、俺は堪忍袋の緒が切れかかっていた。

「そんなのあるかよ。また電話してリラのお父さんに確認取るのかよ？ どれだけ面倒かけるんだ。いい加減にしろ、バカ」

俺がつい拳を握ると、唯賀の顔がみるみる溶けていき、次第に渦潮のように変わっていった。一瞬ドキリとしたが、気持ちを持ち直し、もう一度唯賀の顔を見る。だけど変わらず渦潮。きつと今の彼女の感情はぐちゃぐちゃで整理ができないのだろう。

「だって怖いんだもん。あんたもその女も警察も学校も親も、だから逃げるしかないじゃない！」

もうこんなヒステリックな奴はどうでもよくなり、俺は背を向け、リラを放って公園を後にしようとした。リラのことは気になるが、俺のことを好きと言ってストーカーをする程の奴なのだから、しばらくすれば目の前に現れるだろう。摩訶不思議な能力を使って。

そのリラはというと唯賀の隣に座り何やら話しかけている。異世界人が一体何をするのか気になり、つい足を止めて耳をすましてし

まった。

「監視カメラやったら大丈夫。もうあたしが解決したから。信用できひんかな？」

首を傾げ、人懐っこい表情をして問いかけるリラ。

こんな純粹無垢な顔を向けられて信用できないと言う奴の方が信用できない。彼女はきつと心底心配しているのだろう。はつきり言っ
て脅しよりもたちが悪い。

意地っ張りでヒステリックな唯賀が最も苦手とするタイプだろう。ちらつと唯賀はリラの顔を見て、少し間を置き小さく頷いた。

「その傍観者は信用できないけど、あなた……なら嘘付いてなさそうだから信用する」

「そう？ それは良かった。万事解決やね」

なんだか解決ムードが漂っているけど、そんな終わり方じゃ納得できない。

「ちよい待て。どうしてお前は俺とホームに落ちたんだ？ 痴漢を無視したからか？」

唯賀は鬱陶しそうに俺を見て、吐くように言葉を口にした。

「そうよ。しつこい奴」

「あのな、それだけで死ぬ奴がいるか。もっと他に理由があつたんだろ？ 日々の積み重ね的なことが。それが爆発してこんなことしたんだろ？」

「わかった口聞くな！」

そう言う顔と顔を真つ赤にした唯賀は俺に大降りのビンタを喰らわし、ダッシュで公園から出て行った。

「痛いんだよバカ野郎！」

「あーあ。行っちゃった」

「放つときましよう、あんな奴」

「で、でも……」

「それよりも俺はあなたの方が気になります。説明して下さい。俺を助けるために来たってどういうことですか？ それとどうやって

監視カメラのデータをあの短時間で削除したんですか？」

リラは余程唯賀のことが気になるのか、彼女が駆けて行く方を目で追っている。

「聞いてます？」

「き、聞いてるよ。えつと君はあつちの世界やったら死んでしまってるねん。だからこつちの世界じゃ色々な事故やらで死なんようにする為にきたんよ」

.....。

「聞いてる？」

「すみません、唐突過ぎて」

もう一つの世界。パラレルワールドでは俺が死んでいる？ 色々な事故？ 確かに心当たりならある。先週から食中毒やガス漏れ。大したことのない人為的ミスだと思っていたそれらは、もう一つの世界の俺が消えた原因だというのか？

「もしかしてそつちの世界の俺が死んだのって先週だったりします？」

「そうやで、やから急いでこつちの世界にきたんよ。殺されてまうからね。ほな、なんちゅう偶然。助けなあかん人に助けられるなんてお笑いやな」

くくくつ、と笑うリラ。できれば俺も一緒に笑いたかったけれど、彼女の発言に妙なところがあつたので顔面蒼白だ。

「今、殺されるって言いました？」

「えっ？ 言うたよ。そうやね、説明してなかったわ。実はあたしら異世界人はこの世界の至る所におるのよ。こつちの人のフリをしたりして姿を見せてないだけで」

「何をしに来てるんですか？」

「人の数合わせ。説明するとな、あつちの世界の能力者がここの世界との扉を開けたねん。で、その人が言うにはこと向こうの人の数を合わせな扉がだんだん空け辛くなるらしいんよ。で、あたしの世界の人、もしくはここの世界の人が同時に死ぬ以外は四九日以内

に殺しましょうという法ができたねん」

「殺す以外には何もしないんですか？」

「観察と観光かな？」

「なんて自分勝手な」

それじゃこの世界は見世物小屋じゃないか。

「でも四九日まで死なへんかったら、それは神様のお導きつてこ
とで助かるんよ。まあ今までそんなこと一回もないけど」

「じゃあ俺は死んじやうんですね」

「いやいや、だからあたしが助けにきたんよ。あっちの世界とこっ
ちの世界を切り取る為に。人を殺してまで並行世界はつなぐもんや
ない。」

あの食堂のご飯も死ぬかもせえへん食中毒をあたしが軽い食中毒
に変えたし、ガスも爆発せえへんようした。つまりあたしはなんでも
できんねん」

なんでもだなんて大雑把すぎる。

「なんでもってなんでもですか？」

「そう。人が想像できるほとんどのことをあたしはできるんよ。あ
たしがこの国の言葉を話せてるのはこっちの世界の人の記憶を読み
取って、翻訳してるからやねん。だからさっきの監視カメラの件は
その応用。駅員の記憶を読み取って、ハイ消去。でも結構疲れるか
らあんまりしたくないんよ」

えらくカットされた説明で理解なんて出来ないけれど、彼女は住
む世界が違うのだ。理解できないで当たり前だろう。だが彼女の能
力の強大さは信じられる。俺はこの一週間で二度あちらの世界の人
間に殺されかけたが助けられている。唯賀の件を含めれば三度もだ。
「俺を殺そうとしている奴らはどこにいるかわかるんですか？」

「わからんねんよそれが。それわかったら苦労せんねんけど。それ
よりゆいかどこ行ったんやろね？」

「さあ、でも学校には向かってるんじゃ……」

「じゃ？」

やばい……学校のことを忘れていた。そういえば今日は体育祭の全体練習だ。不良ですら真面目に登校するということは、遅刻すればタダじゃすまないのだろう。

携帯で時刻を確認すると八時二〇分。確か体操着に着替えて運動場に八時半に集合だったはずだ。なら、今から電車に乗っても間に合わない。電車で一〇分、徒歩五分。

「どうした？」

「いや、学校に間に合わないと思って。今日は遅刻すると痛い目に遭いそうなので……」

いつくるかわからない不幸よりも、確実に迫っている不幸の方が重要だ。

「あのワガママ言っていていいですか？」

「もしかして能力使って、学校まで送って言うんちゃうやるね？」

「その通りです」

俺が申し訳なさそうに言うとな彼女は満面の笑みで言った。

「なんでもかんでも力に頼るのはダメなのだよ」

融通の利かない異世界人のお陰で登校時間に間に合わず見事に遅刻し、担任に叱られたが、日頃の行いが良いせいか説教をされるまでは至らなかった。それよりとにかく、全体練習が怠かった。

九月も終わりだと言うのに気温は二八度近くまで上がり、そんな中、ずっと前にならえや右にならえ、横列縦隊やら足並みを揃えたりの繰り返しを、メガフォンを持った体育教師の気まぐれのOKとやり直しが午前中ずっと続けられた。午後からはやっと思進の練習を行うらしい。少し目眩がする。

昼休みになり喉を潤わそうと運動場から一番近い自販機がある二年棟に行くと、今朝ビントを喰らわした唯賀が自販機の横の壁にもたれ、足をクロスして立っていた。小銭を大切そうに持って何故か眺めている。

眼が合うと小銭をポケットに入れ、どういふことが溜め息をつかれた。

「おい失礼だろ」

「あんた三年でしょ？ 何でこんなとこいるのよ」

「人のこと言えないだろ。お前も一年のくせにさ」

当校は体操服の衿と袖口の色で学年を分けている。唯賀の着る一年の体操服はえんじ、二年は緑で、三年は青。

「さっさと飲み物買ってどっか行ってよね、鬱陶しい」

「言われなくてもそうしますよ」

それにしてもうちの学校の自販機にはろくな飲み物が売っていない。炭酸系が一つもないなんて……同じ種類のジュースを三つも四つも並べる意味があるのだろうか？ ただの穴埋めにしか思えない。恐らく唯賀も飲み物を買おうと思ったけれど飲みたい物がなく、買おうかどうか悩んでいたに違いない。

「ほんと買う気失せるよな、この自販機。なあ唯賀」

「イチイチ話しかけないでよ」

第一印象と変わらず憎まれ口を叩く唯賀だけど、どこか今朝よりも言葉に重さを感じられる。本当に拒絶しているだろう。

痴漢を見て見ぬ振りすることがここまで重罪だと思ってもいなかった。

「はいはい、わかりましたよ」

俺はスポーツドリンクを選び、唯賀とすれ違う時そっぱを向かれたのでムカついて、つい冷えた缶をほっぺに引っ付けてしまった。

「つつべた。なにしてんのよっ」

すかさず蹴りが飛んできて、俺の尻にヒットしたが、それほど痛みを感じない。さすが中一女子。

唯賀が俺を蹴った足を地面に降ろした瞬間、嫌味ったらしい声が聞こえてきた。

「あ、唯賀じゃん。本当年上が好きなんだねー」

振り返ると緑の衿のジャージを着た、二年の女子が三人唯賀の後ろに立っていた。気味の悪い笑みを浮かべて。

「べ、別にそんなことないです」

おいおい、俺にはため口なのに、と突っ込もうと唯賀の顔を見ると、そこに憎たらしいつり目はなく、渦が巻いていた。今朝喚き散らしたときと同じ変化をしている。

「ちよつとこつち来て話しない？ 昼休みなんだしたっぷり話そうよ」

「えつと、その……」

さっきまで犬のように吠えていた奴がいきなり縮こまってネズミのように小さく鳴いている。それにいきなり変化した唯賀の精神。

「ちよつと俺、こいつに用があるから、じゃあ」

俺は無理矢理唯賀の手を引いて二年棟を後にした。後ろから俺と唯賀をおちよくる声がしたけれど、馬鹿にかまう程俺も馬鹿じゃない。

何度も手を振り払おうと唯賀はしたが、この年齢の二年差と性別

の違いは大きく、全くの無駄な抵抗となっている。

三年棟の裏に着くと俺は単刀直入に話を切り出した。

「お前が死のうとしていた原因はあいつらなんじゃないのか？」

「……………」

唯賀は下を向き、全く答える気がないのかうんともすんとも言わない。こいつは扱いやすい性格なのだろうけど変に噛み付いてくるから面倒くさい。

なのでわざとらしく三回咳をする。

「やっと呼んでくれた。待ちぼうけ開放ー」

三年棟の角からリラはひょこつと顔を出し、スタスタと俺の横まで素早く歩いてきた。どこで調達してきたのかちゃっかり当校の高等部の制服を着ている。

三回咳をすれば俺のそばにきてくれ。これがリラにした頼み事。

こちらは訳のわからない奴らから命を狙われる身。ちよつとした異変がいつ俺の命を奪うのかわからない。その早期処理を行うため、この約束事を取りつけたのだ。

というのは建前であり、本当はリラを猫型ロボットの様な便利屋さんとして扱う為だ。これがその初回。唯賀の相手はハッキリ言うて面倒だ。

まあ、便利屋を自分の好き勝手に使うヘタレメガネよりマシだろ。人の為なんだから……って俺もメガネか。ヘタレ……じゃないよな？

「あれま。泣いてるん、ゆいか？」

「えっ？」

痴漢を見ぬフリした俺は果たしてヘタレなのかどうか考察していたのだが、リラの言葉で唯賀の方を振り返ると、拳を握る渦潮、いや、唯賀がいた。また感情が乱れている。

「どうしたん？ あたしに言ってみて。悩みは話すことで半分は解消するって聞いたことあるで」

こいつのことだから半分じゃ意味がないとでも言うのだろう。鼻をすすりながらも唯賀はゆっくりと口を開いた。

「リラさん……ここの、高等部の人、だったんですね。長くなるけど聞いて頂けますか？」

「ええよ、何時間でも。あたし暇やし」

「えっと、わたし、好きなひとがいてね。それをクラブの、合宿のときに同じ部屋の子に言ったのね。そしたらそこにいた先輩も好きだったみたいで。しかもその先輩、わたしのこと嫌ってたから嫌がらせとかやられて。わたしだけなら、よかったけど、クラブの友達まで嫌がらせされて……だからクラブも辞めて、もう大丈夫と思っただけ、だめだったの。今度はクラスの子にまで嫌がらせして、だからだんだんわたし、クラスでも除け者にされて。どうすればいいかわたし、わかんなくて」

全てを言い切ると唯賀はこらえていた涙を流し、その場に崩れ落ちた。渦潮は消えているので少し安心した。

これだけ強気な唯賀ことだ。きつと何度もその先輩に抗ったのだろう。そして先輩もそれを嫌だと思い、唯賀の反抗を抑えるために周りを巻き込んだのだが、その結果引くに引けない結果となったのかもしれない。

男なら殴り合って終わりなのだろうけど、女はこれだから面倒だ。終わりが無い。

俺は一つ妥協案を提示することにした。

「その先輩にさ、別に好きな人ができたーとか、適当な奴捕まえて彼氏役してもらって、先輩の前で嘘付けばいいんじゃない？」

言った瞬間、涙を流しながら唯賀は立ち上がり、俺の前までくると大降りのビンタをお見舞いしてくれた。それも二発。

「痛っ。ちょい、別にいいじゃないか、ただのフリだろ？ 本当に好きなのはそいつなんだから別に支障はないだろ。なんだったら俺がその役……」

と続けようとしたが唯賀のビンタが飛んできたので歯を食いしはる。

パンパンパン、と張りのいい音が響く。今度は三発。

横にいたリラも怪訝な表情をしている。俺の発言はどうやら余程的外れだったようだ。こちらとあちらの世界でも評価されないのだから。

「あんた本当にバカ！ わたしは和勝さんが好きっていう気持ちに嘘をつきたくないから先輩と争ってきたんじゃない。こんなに好きになったのは初めてなの、だから嘘をつきたくないの、わかる！」

ハッキリ言うとうわからない。そこまで他人を思ったことはないかな。これが家族となれば別だけど。……って今、和勝って言った？

「お前が好きな奴って和勝なのか？」

「ちよつとキヤー」

今度は四発。

「あつ、ごめん……つい」

咄嗟に人を殴るような人間を誰が好いてくれるのだろうか。こいつの恋路は前途多難だ。

「なんだ、それならクラブの後輩だったから、今度あいつを誘って遊びにでも行くか？」

「おつ、いい発想やね」

リラもこれには賛同してくれた。

「あたしも行つていい？」

「それはダメだ」

なんよ、ケチ。と唇を尖らせるリラ。

というか和勝の前に姿を現さないでほしい。あいつは石からリラが出てきたことを知っている俺を除いて唯一の存在だ。大混乱して引きこもり、もしくは蒸発されては困る。

唯賀は涙を拭いて俺に視線を合わせると口にした。

「あの……それはちよつと遠慮しとく」

「えっ？ 俺が邪魔ならドタキャンするけど？」

「そうじゃない、というかあんたも邪魔だけど、わたしはもし失恋したとしても人のせいにしたくないの。だから……他人に頼るのちよつと」

うんうんと隣にいるリラは頷く。

「その気持ちわかるよー。恋愛はそれくらい重要なものなんよ。命と等しい、いやそれ以上かも」

「あ、ありがとうございます。賛同してくれて」

乙女心がわからない俺にとっては全く理解できない、けどこのまま除け者にされるのも嫌だ。

「そうだ、和勝って病弱だけど運動神経いいよな。そう言うところがモテる理由だろ？」

「あと背が小さいのに、っていうギャップもあるわ。それに……顔もかっこいいし」

さっきまで幼児のようにえんえん泣いていたくせに、和勝の話になると花が咲いたように顔を明るくさせる唯賀はちょっと可愛く思う。

直接的には唯賀の為にはなれないなら、間接的になら大丈夫だろ。それなら一つ案がある。

「あのさ、もう一つ案があるんだけど……」

「またさっきみたいなのだったら蹴るわよ」

正直、蹴りよりビンタの方がきくんだけどな。

「落ち着いて聞け。来週運動会があるよな、そこで俺がこの学校始まって以来の大活躍をする」

「そんなことできるの？ わたし去年この運動会観に行ったけど、和勝先輩はすごかったよ。でもあんたの名前なんて一度も聞いてない」

そりゃそうだ、全員参加の五〇メートル走とどうでもいい障害物競走にしか出ていないからな。しかも両方一〇人中六位というどうでもいい結果。

けれど今年の俺には猫型ロボット並の便利屋がいる。きっといい結果を残せるはずだ。

「大丈夫だ。それでも卓球部の副主将だった男だ。期待しろ」

三年が二人しかない部活だけだ。

「まあ、あんたが大活躍したとしてどうなるわけ？」

「それにより和勝よりも俺がすごいとなる。で、お前の先輩が俺を好きになる。だって運動神経が良さそうじゃないのに良い奴が好みなんだろ？ だったら眼鏡で動ける奴もそれに該当するだろ。なんならお前も好きになるかもな」

唯賀は答えることなく何故か俺を睨みつけ、今度は蹴ると言っていたのにビンタを五発喰らわせ、「そこまでバカだと思ってなかったわ！」と叫んで三年棟裏を後にした。

頬の痛みを手で押さえ視線をあげるとリラが可哀想なものを見る目で俺を見ていた。

「こっちの世界の君って、本当にアホなんやね」

ありがたいじゃありません

東我謝有馬が一日にビンタを十四発も受けたあの日から一週間と一日が経ち、本日は運動会。この一週間色々なことがあった。先週も色々あったが、それは自然に起きたことなので、ただ有馬が驚くだけですんだから楽といえは楽だっただろう。けれど今週は有馬から動いたことにより彼の神経と体力は中々に擦り減っている。

しかし、今日ほど有馬が自信に満ちている日は生まれて一五年、一度もない。

例えばような無敵感。それほど有馬はリラと共に努力をしてきた。運動会に向けて。

選手宣誓とラジ体操と誰も聞いてはいない校長の挨拶を終え、さらに高い授業料を払った意味を示す為の軍隊のように揃った入場行進を行い、誰も注目などしない五〇メートル走が始まる。

学校全員が学年ごとに、クラスに分かれ出席番号順に走るのので、得点も少ないし作業のように淡々と進められるので運動会は全員が参加する、というポリシーを保つだけの為にある競技だ。だから出場する生徒に緊張感はなく、雑談をしながら自分の番を待っている。だが、有馬は違った。緊張の面持ちで、五〇メートル先を見つめている。

それは出席番号が一番で一番注目を浴びる第一走者だから、という理由では決してない。

それぞれのクラスの出席番号一番がスタートラインに立ち、クラウチングスタートの体勢を取る中、有馬はそつと手を前に出し、下半身は小学生のかけっこの要領で構えた。

「なんだよ、あいつのスタート。バカ丸出しだぞ」

「何回見ても笑けるぜ、有馬」

有馬のクラスメイトや他の生徒から笑いと罵声を浴びせられるが、そんなもの有馬には聞こえていない。

「行くぞ、リラさん」

その瞬間、鉄砲の音が運動場を響かせた。

有馬が学校の全体練習を終えてリラに自己紹介しつつ下校を共にし、夕食をまだ少し気まずい雰囲気が残る家族と共にし、少しの間テレビを観て、満腹感を失わせてから有馬は学校指定のジャージではなく、スポーツブランドのジャージを羽織って家を出た。その直前、お母さんがどこに行くのか訊ねてきた。

有馬は少し照れくさくなっただけで答えることにした。これ以上心配かけるわけにはいかない。

「運動会の練習」

そして家を出て、一つ目の角を曲がると制服姿のリラが現れた。

「待ちぼうけ開放ー」

「ボキャブラリーのない奴。今までどこにいたんですか？」

二人が別れてから三時間は経過している。有馬はその時間を異世界人ならどう使うか少し気になり訊ねてみた。

「ずっと見てたで」

「ふーん、なにをです？」

動物か建造物だろうか？　こちらとあちらでは違う可能性がある。

「有馬を」

「コワっ！」

知らなくていいことがあるなんて、大人の勝手な言分だと思っていたけれど実際にあるんだな、と有馬は胸に刻んだ。自分のためとは言え常に監視されていると知ってしまったえば何をするときも心が休まらない。観賞魚たちもこんな心境なのかもしれない。

「そういえばこつちの世界の人ってモノに向かって話すんやね」

「うるさい！　すっげー恥ずかしいよ」

テレビに突っ込みを入れる恥ずかしい場面を見られた有馬は赤面

する。

「しかもいつもと話し方ちゃうよね？　なんでやねん、とかちゃうやろ！　とか」

「あー、もうやめてくれ。テレビ見てるとつい関西弁のツツコミしてしまっただよ！」

こんなことクラスの連中に知れたら終わりだ。明日から有馬はエセ関西人として関西弁で突っ込みをしなければならぬ仕打ちを受けてしまう。

「もう話しはいいから後ろに乗って下さい」

そう言つて有馬は自転車の荷台を指差す。素直にまたがるリラ。

「スカートめくれないようにして下さいよ。淫乱女と二人乗りなんて近所から変な目で見られるので」

「はいよ。ずっと持つてたらええんやろ」

太ももの間に手を置くリラ。それを確認すると有馬は自転車を漕ぎ始めた。

自宅から自転車で一〇分の河川敷にある運動公園付近まで自転車をこぎ、到着すると有馬は軽く準備運動を行う。

「キレイな場所やね。町中よりも涼しいし、緑多いし」

その横でリラは辺りを見渡し伸びをしながら言った。確かにここはいい場所だ。川はお世辞にもキレイとは言えないけれど、河川敷は区がちゃんと管理しているから芝も切りそろえられ、ゴミもほとんどない。それに夜なので河川敷の横を走る人はいても、河川敷のグラウンドを使う人は少ない。

「リラさん。早速だけどお願いがあるんだ」

「うーん、できることなら何でもきくでー」

街灯のもと、芝の上に寝転び、気持ち良さそうにゴロゴロ転がるリラ。こんな奴本当に信用していいのかという疑問が浮かぶも、今朝のあのエスパー的な能力を思い出し有馬は疑念を消し去る。

「昼にさ、唯賀に言つたとありましたよね？」

「あーあのアホアホな」

「アホアホとか言っな」

体中草まみれの異世界人兼女子高生に言えたことではない。

「だって相手の気持ちを考えてなさすぎるんやもん。彼氏役の話しなんか受けてくれるわけないって」

有馬は首を横に振り、お前の方がバカだと小さく漏らす。それを聞き逃すことなくリラは少しふくれながら言い返す。

「なんでバカなん？」

「この服装を見て下さい。俺は今から運動するんだよ。周りを見ればわかります。おっさんやら老人が走ってるでしょ」

中には同じ年齢くらいの人もいて、有馬は知り合いではないのかと内心ビクビクしてしまう。

「あー、ごめん。もつと考えなあかね。そつかそつか。じゃあ運動会で大活躍して、恋の宿敵か、ゆいかの心を奪っちゃおう作戦やね…… って、ちょっとあたし今、凄いことに気付いた！」

「ど、どうした！」

リラはいきなり素早く起き上がり、必死の形相で有馬を見つめる。作戦に不備でもあったのだろうか？ いや、この顔はもつと重要な何かに気付いたという感じがする。

もしかしてこの近辺に異世界人がいたとか、そういう類の緊張感。もしかして有馬、ゆいかのこと好きなん？」

「……………」

リラの意味不明な見解に有馬はただぼうつとリラを見つめる。

「だってだってだって。この二つの作戦、どっちも有馬がゆいかとくつつく作戦や。ホンマはゆいかのこと好きなんやろ。あたしのくと好きやったんちゃうの？ あれ、そういえばまだ返事もらってなかったよね？」

そんな重要なことを今思い出すなんて、リラは本当に俺のことが好きなのだろうか？ 余りの馬鹿さ具合に有馬は溜息を漏らす。

「あのさ、俺は唯賀が好きじゃないです。どっちかって言うと嫌い。と言っかついでに俺はリラさんのことも好きじゃない」

「えーっ、あたしずっと見ててただのアホやん」

「それは付き合ってたとしてもアホ、というより変態だ」

有馬にそう言われるとリラは膝から崩れ落ち、四つん這いになって影を落とす。

「あの、リラさん。でも嫌いじゃないですよ。それに会って初日で両思い、なんて嘘っぽいでしょ？」

有馬の慰めの言葉に、それもそうやね、と自分に言い聞かせるように呟くリラ。

「それに俺はあなたのことを、能力のことをしつかりと知らない。だから一度、二人で協力して何かを成し遂げ、本当に二人は相性がいいのか試してみませんか？ こちらの世界の文化でも結婚を前提としたカップルが一緒に住む、なんてこともしますし」

リラは飛び上がると有馬の両手を両手で包み、それええな、と何度も頷く。

「結婚を前提？　そこまで考えてるなんて。ってことはこれから一緒にのおれへんとき見てていいってことやんな」

「えっ？」

結婚を前提にすることがどうして監視に繋がるのかわからず、思わず表情が強張る有馬。

「だってな、好きな人がどんな行動をとるか知っという方が彼女候補としても知っという方がいいやろ？」

「でもわざわざ見なくても、二人で共同作業だけでも——」

「見たいっ！」

リラは真剣な顔をして有馬の手をぎゅっと押しつぶすように握る。ここで命を三度も救ってもらった恩を思い出し、気が引けた有馬は泣く泣く首を縦に振ることにした。残り四二日を我慢すればいいことだ。

「やった、ありがとう！」

両手を上げて喜ぶリラ。有馬の手も握ったままだから変な万歳になっってしまう。

「ところで、その共同作業なんですが、さつき唯賀の為に運動会で大活躍作戦の話をしましたよね。けど俺の力じゃ一週間どころか一年練習しても大活躍なんて無理です。だから、そこでリラさんの超能力です。それを僕に向かって使ってくれれば何とかなれると思うんですよ」

「なるほどー。例えばどんなことをすればええの？」

その答えに有馬は戸惑った。人が想像しうるほとんどのことを実現できる、と言われても想像しにくい。それにある程度具体的な説明でないとリラだって能力を使い辛いはずだ。

「リラさん、他の異世界人ってどんな力を使えるんですか？」

「えーっと、基本みんな姿を消す力を持ってて、それプラス物を動かしたり、水とか火を使えたり、あと風も起こせるね。あと自分の身体能力を上げたり」

リラの能力を使って有馬の身体能力が上がったように見せかける方法かつ、見ている人全員にそれを気付かせない方法。それでいて自分の身が最も安全な方法。

いきなり吹く河川敷独特の風に目を瞑る有馬だが、その後、なるほど、と顎元に手を当て思いついた考えをリラに伝えた。

「では一度、俺が走りますんで風を俺の背中当てて下さい」

「それでええの？ わかった」

どの屋外競技でも風の影響は絶大だ。それは陸上競技も例外ではない。短距離走でも強い風と向かい風で記録が変わってくる。先ほど吹いた風といつかの世界陸上を観ていた有馬はそれを思い出したのだ。

有馬は腕を振り駆け出した。だが本気ではなく六割程度だ。思い切り走ってしまうと走る方に集中してしまう。それではダメで、どのくらいの風力をリラが出せるか有馬は知りたい。

「うお、いいかんじーっておい！」

始めは風力五メートルくらいで足の回転が追いつくほどだったのだが、一秒ごとに段違いに風力が上がっていき、しまいには辺りの

ランニングする人々が足を止めるまでになっていた。

当然その中心にいた有馬はこけてしまい、風のお陰で芝の上を転がり続ける。

「ちょーい。ストップ！ ストップストップ！」

風を止めようと叫ぶ有馬だが風の音が強過ぎて数十メートル先にいるリラには届かない。

リラが風を止めたのは草むらに引っかかる有馬の姿に気付いてからだった。有馬は芝の上をおよそ五〇メートルも転がっていた。記録およそ四秒。

「ごめんな有馬。あたし調整がへたっぴやねん」

そう言っただけ草むらに引っかかる有馬をリラは引っ張る。

「初めからそう言っただけだよ」

体中に付いた草木を払いながら有馬は再び考える。調整が下手なら上手くすればいいのだけど、一週間という短期間でそれができているのならリラだってもうちょっとマシなはずだ。ならばリラはそちらのセンスは皆無だと思っただけ。だから見出さなければいけない。出来るだけリラが力の調整をしなくてすみ、有馬の足が絡まらず最低でも一〇〇メートルを走りきる方法を。

その後二人は幾つかのやり方で走ってみた。

単純に履いている靴の重さを軽くしてみたり、有馬の足下を跳ねる素材に変えたりしてみたのが、どれも失敗に終わった。

靴の重さは、軽くすることには成功したがいかんせん有馬の足は元が元なのであまり意味がなく没。跳ねる素材は跳ねすぎて約三メートル飛んでしまい、落下するところをリラにキャッチしてもらい、事なきを得たが、有馬はまた高所恐怖症の階段を一つ登ってしまっただけでこれも没。

最後にもう一度、最初に行った風を吹かす方法を試してみたが、結果は同じだった。

頭と筋力の両方を使っても成果が上がらないことに疲れを感じ、二人は土手に寝転び少し休憩する事にした。

もうどうしていいのかわからず、有馬はため息をつき空を見つめた。月は半分だけ輝きを見せ、それを周りの星々が大小様々な光で彩る。

「あのさ、俺の周りの重力だけを変えるってのはどうですか？」

「出来る事は出来るけど、力を使いすぎてへとへとになるなあ。重力は地球を変えんといけんから。石や靴を変えるのとは別だよ」

そりゃそうか、と有馬は再び夜空を眺める。

「月も川もキレイやね。まあ、余分な光がない分、あっちの世界の方がキレイやけど」

有馬は空を見つめながら質問する。

「向こうじゃ、こんな電灯とかビルはあまりないんですか？」

「ないない。だってあたしらの日常に道具を使うことってあんまりないからな」

リラは少し懐かしそうな目をして有馬を見つめた。

「じゃあ野菜とかも切れないし、電気も点かないし、火も起こすないんですか？」

「それは道具を使わんと自分でするんよ。火も電気も水も能力者が作るねん」

「それはすごいですね」

「というより、それが向こうじゃ当たり前なんよね。あたしが思うのにこの世界の人達は他のものに頼りすぎてると思う」

「他のもの？ 頼りすぎてる？」

その言葉が気になり、有馬は訝しげな表情をして訊ねた。

「そうやで。生物や或いは物とか木や草もそうやし、もつとやってまえば地球にも頼りっぱなしや。だからこの世界はちよつと空気も悪いし、空も海の色も変。風の流れも。でもそれが全部悪いとは言えんけどね。もうちよつと人間にも役割分担した方がいいんじゃないかって」

「この世界の人が言ってもなんの重みも感じない言葉なんです、あっちの世界の人が言つと重過ぎます」

有馬にはリラの話が、この作戦には両者のリスクが必要であると遠回しに言っている気がした。なので決意を固め、初めから考えていた有馬にもリスクが伴う作戦をリラに告げた。

「リラさん。今度は俺の手を引つ張って走ってください。自分の体を消すことは出来ますか？」

「できるで、この世は波やからね。あたしの体を人の目に見えへんようになる振動で揺らせばええからそない難しくないよ。でもそれやったら有馬を引つ張らなアカンから変な走り方になるで」

「それは仕方ないです。スマートで楽して、しかもノーリスクで早く走ろうとすることがおこがましいんです。さあ、やってみましょう。もうそろそろ帰る時間ですので。あつ、リラさんの体は消さなくていいですよ」

運動公園の真ん中で有馬は両手を前に出し、足は駆け足の体勢を取るといふわけのわからぬ格好で構え、リラは前を向きながら手を後ろにして有馬の手を引くという、こちらもよくわからぬ体勢で構えた。

「しっかりと口閉めてな、舌噛むで」

「了解。そうしたら、ようい……ドン！　ぐっ」

思っていたよりもリラの手を引く力が強く、有馬はリラの手を離さないよう更に強く握る。まるで雪車に乗って引つ張られているような形で有馬は駆けていく。有馬は一体いつリラがコントロールを失い暴走するのか気になったが、その様子はなく、順調に程よい速度で走れている。一〇〇メートル一秒半辺り。中学の全国大会レベルだ。これなら負ける事はない。だが、有馬の足はもう限界にきていた。

太ももを上げるたびに弦を切るような痛みが伝い、腕もパンパンに張り痛みはないが重さを感じる。二〇〇メートルを越えた辺りで体力も限界に来た有馬は、ついに足が動かなくなり、足を止めるがリラはそのことに気付かず、有馬はそのままうつむけの形で倒れ、五〇メートルほど引きずられてしまった。

「ごめんなー。ちょっと走る事に集中しすぎたわ」

手を引き、有馬を起き上がらせようとリラはする。

「いえいえ、大丈夫ですよ。芝生だったのですべり台の気分を味わえました」

心にもないことを言う有馬だが、今はリラに文句を言うより、成功した喜びを感じていたかった。これで、運動会で活躍し、クラスから、いや学校中から尊敬の目を向けられる。今まで運動に関しては中の下だった有馬はその光景を想像するだけで眉唾ものだ。今の有馬にとって唯賀など二の次なのだ。

活躍の目処が立っただけでなく、リラは物に対して能力を発揮する場合はハチャメチャにコントロールしてしまうが、自分に対して発揮する場合はある程度コントロールできる事が知れ、リラの取り扱い方法を知るいい機会にもなった。

のだが、有馬はリラに手を引かれても立ち上がる事が出来なかった。足がけいれんしている。

「すみません、ちょっと力が入りなくて」

せいぜい一〇〇メートルを一五秒後半で走る脚力しかない人間が、一一秒半ばで走り、しかも体勢も悪かったのだから当然の結果だ。

明日も筋肉痛が残りまともに走れないだろう。

「うわー、ホンマやピクピクしてる」

寝転んだ状態の有馬の太もも辺りを指でつつきリラはへらへら笑う。

「あの治癒とかできます？」

「そんなん出来へんよ」

「えっ？」

有馬は『人が想像しうるほとんどのことができる』と昼間にリラが言った言葉を脳内で反芻した。

「嘘だ。冗談言っつて。火や水は出せてハンドヒーリング出来ないなんて嘘ですよ」

ふるふると首を振り残念そうにリラは言った。

「ホンマに無理やねん。だから帰りはあたしが自転車漕ぐな」

自転車に乗りたかったのだろうか、そう言ってリラは爛々とした目をする。

「マジですか……。まあ明日は土曜だし疲れを残しても支障はないけれど。じゃ、お願いします」

その後、有馬はリラと二人乗りをした事に心底後悔した。

チェーンが切れるんじゃないかというスピードで狭い住宅地を暴走されたからだ。それは遊園地の絶叫マシーンを越える恐怖だと、有馬は荷台に乗りつつ絶叫した。

それから二日が過ぎ、ブルーブルーマンデー。

有馬の命に関わるような事故や事件は起きず、命と金曜からの筋肉痛を維持したままの連休を過ごした。

月曜日になっても手足に怠さを抱えてしまった有馬は、少しでも和らげようと午前中を睡眠学習に費やしたが、布団が机と椅子なので体中に変な痛みを残してしまった。筋肉の疲れは取れた気がした程度だ。

「おいおい、今日はずっと寝たきりじゃないか。一日は二四時間。それをフルに有効活用すれば、このようなことが起きる事はないはずだぞ、有馬。それとも体調が優れないのか？」

昼休みのチャイムが鳴っても机に突っ伏したままの有馬に、教師のような注意をするのは同じクラスの友人でありクラス委員でもある統だ。ついでに三年が二人しかいなかった卓球部の元部長である月曜日を感じさせない元気のある呼びかけに、有馬は机に顔を向けたまま口を開く。

「出た、自己啓発男。鬱陶しい」

統は自己啓発本に載っているような言葉をよく使い、クラスメイトに注意をしているため、それを揶揄したあだ名が出来てしまった。しかし彼は特に気に留めていない。注意さえできれば心が落ち着くからだ。

有馬の言葉を聞き、統は肩を持ちぐいぐい揺らす。

「起きろと言っているだろ。同じ生活のリズムで食事をとらないと体にも精神にも良くないのだぞ。ささ、一分一秒が惜しいのだ」

「ほんと鬱陶しい。俺は眠いから放っておけての」

「一人で食事を取ると周りから友達いないと思われるだろ。察してくれ、そのくらい。クラス委員のくせにおかしいではないか」

おかしいものにも人望がないからこそクラス委員になったのでは

ないかと有馬は思う。先生のパシリ、決め事のまとめ役、登校拒否の生徒の声かけ。そんなもの面倒なので誰もやりたがらない。

有馬の断りを聞かず、肩を揺らし続ける統の後ろから有馬を呼ぶ声がした。

「有馬さん、昼ご飯、ご一緒にどうですか」

教室の出入り口から声を上げたのは、一年後輩で、唯賀の思い人でもある和勝だ。

病弱な彼が学校に来れている日は、昼食時、有馬を三年棟まで呼びに来てくれる。

「わかった、先に行つといてくれ。今日は弁当ある？　なら中庭な？」

「はい、では待ってます」

快い返事をして駆けていく和勝を統は目で追って、不思議そうに訊ねた。

「どうして和勝は僕を呼ばなかったのだろうか？　部長だったと言うのに。それにお前もどうして僕からの誘いは断るのに、和勝からは断らないのだ？　いつも僕はみんなを気にかけているのに」

椅子から立ち上がり、カバンから弁当箱を取り出しながら有馬は言った。

「そんなの決まってるだろ？」

和勝が統を誘わなかったのは、有馬を呼べば着いてくると思ったから、という正解を有馬はわかっていたがあえて言わない。

「お前がみんなの為と思って言ってる言葉は、自分に言い聞かせてるだけだからだ」

二人が中庭に着くと、和勝はいつもの場所である中庭で最も大きな桜の木の木陰で弁当を広げ、三角座りをして待っていた。

「待たして悪かったな。ちょっと今日は体が怠くて」

和勝にそう言いながら有馬は辺りを見渡す。近くにリラがいないか確認しているのだ。

有馬は今朝、和勝が学校にきていることを和勝とのメールで知っ

ていたので、和勝にリラの存在を隠したい有馬は、あらかじめリラに昼食時は一人になるだろう唯賀と共に過ごしてくれと伝えていたけれど天真爛漫で自由気質の強いリラのことだ。出会って何も考えず話しかけてくるかもしれない。

「どうしたんです、有馬さん？ 辺りを見渡して。UMAでもいました？」

「そこは可愛い人がいましたか？ とかだろ普通。いや、何もない。ただいい天気だと思ってさ」

弁当を開け、半分くらい中身を減らした辺りで有馬は和勝に質問をした。

昼間、リラを監視から離れた理由は唯賀を気遣って、というのはおまけであり、本当は訊きたいことがあったからだ。オカルトに詳しい彼に。

「和勝、お前はパラレルワールドって本当にあると思う？」

普段は和勝からこういう話を振るので珍しいことだと思い、一瞬間を置いて和勝は答えた。

「この一年半有馬さんにオカルト話をしてきましたけど、やっと自分から興味を持ってくれましたか。凄く嬉しいです。で、パラレルワールドですか？ 実際パラレルワールドがあるから宇宙は広がっているという方もいますし……僕はあると思いますよ」

そう言うのと和勝は卵焼きを箸で掴み、半分だけ食べ、もう半分以上弁当箱に戻した。

「もうこの時点でパラレルワールドは生まれています」
「はあ？」

有馬は意味が分からず卵焼きを睨みつける。横で聞いていた統も何を言っているんだ、と困惑気味に漏らす。

「ちょっと屁理屈ですけど。卵焼きを一口で食べた世界、半分残した世界、全く食べなかった世界。簡単に分けられますが、今このように世界が三つ別れたということになります」

「それは屁理屈すぎる。だいたい他の世界を検証できていない。だ

から、その卵焼きは元々半分しか食べられなかった世界だけだったかもしれない」

統の反論に和勝は、ふふつと優しく微笑んだ。

「そうですね。統さんがおっしゃることに間違いはありません。他のパラルールワールドを覗ければ別ですが」

深い知識を持つ者は、自分の考えを否定されるとなんでもかんでも否定する、という偏見を有馬は持っていた。そしてそういうヤツが大嫌いだ。けれど和勝はそうでなく、どんな素人考えでも穏やかに聞き、頷いてくれるから好感が持てる。

有馬はもう一度リラが周りにいないか確認する為、辺りを見渡した。けれども中庭の光景に変化はなく、ゆっくりと時間が流れている。そんな中、三年棟から運動着を着た男女が六人勢いよく出て来た。運動会の男女混合リレーの練習だろう。一分一秒も惜しいのか、有馬達の前を素早く駆けていく。

好物を最後に残す癖がある有馬は、からあげを掴み口に入れた。が、噛んだ瞬間、ジャリッと、衣ではない別の嫌な食感が歯を伝った。先ほど前を走っていた男女がまき散らした砂ぼこりが弁当箱に入ったのだ。

「うわ、最悪だ。砂が入ってやがる。あいつらめ。こんなことなら最初に食えば良かった」

と言いつつも吐き出さずちゃんと食べる有馬はよほどから揚げが好きなのだろう。

「それですよ、有馬さん」

「ほえ？」

突然瞳を燦々と輝かせて和勝は有馬を見つめた。雲に隠れた太陽の変わりになれそうなほど良い光を放っている。

「そのような経験から、パラルールワールドという考え方が生まれたのでしょうか。土にまみれていないから揚げを食べている世界の自分がいれば幸せだろうな、と」

「なるほど、後悔が生んだってわけだ」

「はい、僕はそう思います。まあ今思いついただけですけどね」

「あのさ、もしかすれば人が道具を持たず進化したパラレルワールドってのもあるかな？」

随分遠回りしてしまったが有馬はこのことを聞きたかったのだ。

リラの住む世界の話はこの世界で知られているのかどうか。オカルトに詳しい和勝なら少くくらは耳にしたことがあるかもしれないと思ったのだ。この世界には多くの異世界人がいて、さらに自分の近くにもいるのだから、他の例もないわけがないだろう。

「そのような話は初耳ですね」

しかし、予想に反し和勝は知らないと言った。けれど考察を続ける。

「道具がない……。ということは人が火打石やらを使うことなく火を使い、弓や槍などを使わず、動物を猟っていたってことになりますよね。面白い、超能力を使い生き延びた人類がいるパラレルワールド。そんな説、誰に聞いたのですか？ よければ論文など読ませて欲しいのですが」

オタクという人種は知識欲が異常に強い。食べることも忘れ、今は新たな謎に集中しきっている。いきなり食いついてくる和勝に少々驚きながら有馬は適当な嘘をつく。

「ああ、小説だよ。内容がからつきしだったから読んでも得はないぞ」

「それでもいいですつ、貸して下さい」

「ああ残念、ネット小説で、しかももう消されてたんだよな」

落胆の表情を見せ、それじゃいいです、と不貞腐れ気味に言い、食べ忘れていた弁当をつつく和勝。

「なあなあ、有馬。僕は何故この場にいるのだろう。会話の内容も全くわからない。ただ箸を動かしているだけではないか」

「お前に友人がいないからだ」

有馬は統に毒づいたが、後で自分も人のことを言えないなと苦笑いを浮かべた。

「とまあ、こんな話があったんですよ。すごくないですか和勝。道具を必要としない世界、ってヒントだけで、その世界に超能力があるって勘づいたんですよ」

まるで自分の手柄のように意気揚々とリラに話す有馬。リラは何がそんなに嬉しいのかよくわからないといった表情で見つめる。

「そんな子もおるんやね。会ってみたいな」

「それはダメですよ。一回姿を見られてるんですから」

「ちえっ、有馬のケチ。そう言えば、あの子の顔は覚えてないけど、器だけはよう覚えてるわ」

「器？」

人の特徴におよそ使わない言葉に有馬は聞き返す。

「そう器。こつちの世界とあつちの世界の人が同じかわかる方法は、器を見ればわかるねん。顔も性別もあつちとこつちで違うんよ」

「それってどの部分ですか？」

「どの部分言われても……体の真ん中らへんに小さいつみきみたいなんが見えるねんけど、有馬は見える？」

視覚異常のある有馬だ。もしかすると見えるかもしれないと思い、自分の体を見るが、そんな物見える気配すらなかった。有馬は首を横に振る。

「そっか。超能力使える人でも見えへん人おるもんな。こつちに異世界人が来れる条件の一つやねん、器が見えるか見えへんか」

「で、どうして和勝の器を忘れられないんですか？ 綺麗な色や力タチだったとか」

「うーん、そうでもないねんけどな。有馬と形が似てたんよ、見間違えるほどに。でも半分くらいの大きさやから多分似てるだけなんやろね」

あんなん始めてや、と一人頷くりら。その話を聞き、有馬は思ったことを口にした。

「俺って人と関わるのあまり好きじゃないんですけど、和勝なら苦

にならないんですよ。もしかするとそれって器が似ているからじゃないんですか？」

「そないな話し聞いたことないけどな。だって器自体にそんな機能ないもん。言ってみればただの名札みたいなものかな？ うーん、でも完全に否定するんわ無理や」

「じゃあ、もしですよ？ 俺の仮説が正しいとして、和勝は俺と器が似ているだけで気が合うじゃないですか。じゃ、向こうの世界の同じ器を持つ人と会えばすごい気が合うんじゃないですか？ 俺の場合もついでにけど」

その言葉を発した瞬間、リラを包む空気が変わった。有馬の眼を通さなくてもわかるほどの変化だ。月が太陽を隠したときのようなガラリとした変化。

「恐ろしいことを言うね、有馬。そんなことしたらどうなるかわからんよ。こつちもあつちも」

「それはどういうことですか？」

「宇宙が何かしらおかしくなるよ、きっと。器は他の器を、その体を通じて認識するねん。本来一つしかない物が二つある、そうなったら器はその器を消そうとするねん。で、どつちも同じやから両方消滅。そこで問題発生。本来器は消滅せえへんもんやねん、人が死んでも器はまた繰り返し次の人に受け継がれる」

なんだか空き缶のリサイクルみたいだな、と有馬は思う。

「その器がなくなるってことは器の過去もなくなるってことになるらしいねん。そうなったら過去にその器が作った歴史は消えて、世界は溝を作ってまうことになる。そうなったら人一人分の世界が変わってしまう。人一人言うても何千万も生死を繰り返してきたわけやから、その歴史を一瞬で変えることが出来へんから地球を抱える宇宙が……変になる」

勢い良く話していたリラだったが最後の最後にきて失速してしまった。有馬は疑いの眼でリラを見つめると、途端頬を赤らめ慌てた。

「だってだってな、そんな今までなかったことないし、怖いから誰も出来へんし、うち勉強できへんし！」

「要は一緒の器と会えば世界は変わってしまうってことですよね」

「そのとおり」

「そのような話しを和勝から聞いたことがあるな、そういや」

有馬は独り言のように呟き始めた。

以前の昼休みのオカルトタイム、和勝はポルターガイストについて話していた。世界にいるもう一人の自分に会ってしまうと死んでしまうという話。一緒に聞いていた統も聞いたことがある、と言っていたから有名な都市伝説なのだろう。

「へー、そないな話こっちの世界にもあるんやね」

「もしかすると、そっちの世界の人が、こっちの世界の人に伝えたのかもしれないね」

「ありえるなー」

その後、昼休みでの唯賀の様子を話すなどをして会話も弾み、雰囲気もいつも以上に和やかになったところで、このタイミングだと有馬は話を切り出した。

「ところでリラさん。明日なんですが、昨日のアレを学校で使って欲しいんですよ」

「えっ、運動会って明日ちゃうやろ？　もしかして学校で練習するん？」

「まあ、練習と言えば練習ですし、本番以上に大事だとも言えます」
有馬の真剣な表情を見て、リラは二つ返事でその願いを引き受けた。

そして次の日。朝のホームルームで有馬は、教卓に立ってチョークを握る統に熱弁を振るっていた。

「だーかーらっ、俺を花形種目に出場させる！ そうすればこのクラスを優勝候補にしてやるから」

「そんなことはできん。他のクラスでは運動が得意な者を規定種目の五種目まで出している場合もある。けれどそれでは当校の運動会のポリシーである、『みんなで行く運動会』からはみ出ることになる。だから僕がクラス委員の場合、全員同じ数の種目を出てもらうことにしている。そうすれば疲れすぎる者もいなければ楽すぎる者もない、平等だ。……まあ、優勝できるのなら話は別だが」

頭の固い統だが、言っていることに間違いがないため、クラスの連中は有馬の味方などしない。というよりまずこの話を聞いていない。各々口々好き放題雑談している。よくあるダレたクラスの光景だ。

今日は朝のホームルームで運動会の出場種目を決めることになっていた。普通なら各々の得意な種目にクラス委員が生徒を当てはめていき、反論がなければ決定という形になるのでそれほど時間はかからない。一〇分もあれば終わられる作業である。

しかしホームルームが始まった途端、有馬があんなことを言ったので出場者は全く決まっていけない。クラスメイトの雑談と有馬のやらせると統のなんの声だけが教室を響かせる。

出席を取り、あとはまかせたぞ、と統に出場者決めを任せていた担任は、全く進まない展開に痺れを切らし、有馬と統の話しに割って入った。

「おいおい有馬、どうしてそんなに統の言うことが不満なんだ？」

お前は体育の成績はそれほどよくない。それ以外は優秀だけど」

「いいえ、俺は実は運動もできるんです。能ある鷹は爪を隠すと言

うでしょう？　あまりにも何でもできすぎる人は出る杭を打たれま
すからね。だからずっと爪を隠していたのですよ」

「ならどうして今になって爪を出すんだ？」

「中学最後の運動会だからです。ここで花火を一発上げたいと思い
まして」

演技っぽいセリフ口調に妙にぎらついた瞳。こいつは何かおかし
いと勘ぐる担任。

元よりこのクラスは運動部に所属していた人数が少ないので優勝
する確率はかなり低い。それは担任だけでなくクラス委員の統もそ
うだし、クラスメイト全員が思っている。やる気や勝つ気があるの
なら本番五日前に出場者決めなど行わない。だが、そんなクラスを
優勝に導くだけの力を有馬は持っているという。担任はどのみち敗
者となるのなら勝負をしないよりはマシだろうと有馬のわがままを
受け入れた。

「いいだろう、お前の好きにしろ」

「しかし先生。そこをまとめなければこのホームルームの意味がな
いんです。そういう小さな部分からクラスのまとまりが無くなってい
くのですよ」

毅然とした態度で担任にも自分の信念を押し付ける統。担任は教
室を見渡し、好き勝手話し、ホームルームに参加しない生徒達を見
て、今さらまとまりもクソもないだろうと言いたくなったが、自分
が言っではおしまいだと言葉に出さず、統を納得させる方法を口に
した。

「四時間目が体育だよな。そこで有馬が納得の行く運動能力を見せ
なければいいんじゃないか？　統もさっき言っただろ、優勝さえで
ければ文句はないって」

優勝すれば賞品として学食の食券が一人千円分配られることにな
っている。たいていの生徒はそれを目当てで頑張るわけだが、統の
場合、運動会で優勝したクラスの委員長としての名誉が欲しいのだ。
そうすれば己のリーダーシップの自信に繋がると彼は信じている。

「ええ、いいでしょう。クラスの皆が、有馬にこのクラスを優勝で
きるだけの力があると納得させられれば、五種目の出場を快く認め
ます」

そして四時間目、一本勝負ならいいと体育教師から了承を得た有
馬は、このクラスで一番走力のある元陸上部短距離補欠の持木を指
名し、トラックのスタート地点に位置した。

ルールは百メートル一本勝負。しかし例え有馬が勝ったとしても
ギリギリでは意味がない。一〇メートルは最低でも離さないと皆は
納得しないだろう。

「おい、だれか足頼む」

持木はクラウチングスタートをするため、足を支えてもらうよう
クラスメイトに呼びかける。

「おいおい、元陸上部が本気かよ？ 相手は有馬だぜ。下から数え
た方が早いんじゃないか？」

笑い声を上げマジになるなよと茶化すクラスメイト。こんな奴ら
に頼った俺が馬鹿だったと持木はクラウチングスタートの体勢を解
き、立ち上がるうとしたが、ちゃんと誰かの足のつま先が足の裏に
当たったので振り返る。

「僕がやる。そのかわり全力で走ってくれ」

統は準備万端と足を置いて持木に指示する。

「おっ、ありがとうな。誰か有馬にもやってやれよ」

「いや、俺はいい。クラウチングスタートしないから」

こいつは正気か、と持木は有馬を見つめるが、有馬はふざけた様
子を微塵と感じさせない緊張を含む本気の表情をしていた。

「それがお前の走り方ならな何も言わないけど、お互いベストを尽
くそう」

そう言つて持木は体勢を整え、いつでもスタートできる状態にな
り集中を高める。一方有馬は両手を前に出し、両足を前後に広げ少
し屈んだ体勢を取る。

「おい、有馬、早く準備しろ」

そう体育教師は注意するが、

「いえ、もういつでも大丈夫です」

と、前方を見つめる。

「変なヤツだな。まあ、いい。これが授業ならしっかりしろというがな。じゃあいくぞ。位置について、よい」

「リラさん、いくよ！」

有馬は小さく呟く。

「スタート！」

教師の声で決して良くも悪くもない安定感のあるスタートを切った持木。有馬はというと、雪車に乗りひっぱられるのを待つ子供のようにしてまだ立っていた。

有馬は慌ててリラに声をかける。周りの生徒から変に思われるだろうが今はそれどころじゃない。

「リラさんはやく！」

「えっ、ドン！　であたしが走ると違うの？」

金曜日の練習では確かに有馬は「よいドン」と言っていた。しかしそんなことを思い出している余裕も時間も全くない。

スタートをしない有馬に皆は怪訝な表情で見つめる。

「じゃあドン！」

そう有馬が叫ぶと同時にミニ四駆やラジコンのようにいきなりエンジン全開で走り出す。加速というものがないのか、と一同は驚き眼を丸くして有馬を見る。

「リラさん、とにかくトラックに沿って走って下さい」

「よっしゃ、まかしとき！」

一〇メートル以上あった持木との差が瞬く間にもぐいぐい狭まっていく。その有馬の走りに（正確にはリラの走り）クラスメイト、体育教師までが嘆声をもらす。

持木にもうそこまでと詰め寄っていく有馬だが、リラが遅れを取り戻そうとしているのか力の制御を緩めているため河川敷のときより速度が速く、有馬の足は絡まり、今にも転けそうになる。

有馬は転げまいと何とか視線を上げ、体勢を整えようとしながらゴール地点を見据える。あと五歩ほど持ちこたえればゴールだ。横には持木、このペースならなんとか勝てる。そう油断した瞬間、有馬はヘッドスライディングをするようにして前から転けた。自分の足につまずいてしまったのだ。

しかし転けたにもかかわらず、有馬のスピードは変わらず、ゴール地点を過ぎていった。それから五メートルほど進み、やっと停止。金曜の河川敷をデジャブした有馬だが、あのときよりも引きずられる距離は減っているの、リラも少しは学習したか、と安堵の表情を浮かべる。

立ち上がろうと手を地に着けた有馬だったが、声をかけられたので視線を上げる。

「有馬、すごいじゃないか。スタートさえしっかりしてれば完全に負けだったよ」

持木は清々しい表情をして有馬に手を伸ばす。さすがは元スポーツマン。

「そうか？　ありがとう。ちょっとスタートのタイミングがわからなくて」

引き上げられる有馬をクラスメイトが褒め讃える。

「有馬凄いいじゃないか、ただのハツタリだと思ってたけど」

「そうだよ、スタートミスったときはあとで殴ってやろうかと思っただぜ」

「転けても早過ぎて止まらなかったもんな」

「あんな早く走る奴を初めて見たぜ」

そりやそうだ、記録さえとっていれば有馬が一〇〇メートルを駆け抜けた時間は九秒を切っていたのだから。

ヒーローインタビュー状態でクラスメイトに囲まれる有馬のもとに、体育教師が割って入ってきた。

「ほんとすごかったぞ、有馬。だが、膝は大丈夫か？」

「へっ？」

有馬は視線を下げ、膝元を見ると何やらオレンジの汁が傷口から溢れ、中々身が削られている状態になっている。それを見てしまった有馬は膝の辺りの麻痺状態が解け、その場にうずくまり痛いと声を漏らし、小さく「保健室」と情けなく訴えた。

有馬は一列に並んだ各クラスの出席番号一番の顔を見渡す。五〇メートルを共に走る彼らの中で一番の走力を持つのは有馬の三つ隣にいる池乃であることを有馬は事前に調べていた。

「リラさん、俺の左から三人目、短髪のチビで池乃って奴わかります?」

できるだけ小さな声で、呟くようにリラに問い掛ける有馬。周りはリラの姿が見えないので、ただ有馬がぶつぶつ独り言を言っているようにしか思わない。

有馬の右手がくいつと少しだけ引つ張られる。これは独りでリラの声がすると周りが驚くので、リラの声を出さずに意思の疎通を図れるようにと有馬が考案した方法だ。

右手を引かれればイエス、左手ならばノー。

「あいつより五メートルほど速くゴールして下さい。まあ、あいつより早い奴がいればそいつに合わせて下さい。それじゃいきますよ」

五種目を出場するにあたり、体力温存は大切だ。それに有馬は自分の体力の限界を超えて走るのだから、余計に重要度は増す。

緊張の面持ちで有馬は五〇メートル先のゴールテープを見つめる。あそこまで一位でゴールしないとクラスメイトからの信頼を失い、五種目出られるはずが減らされる可能性がある。最初が一番大事。ここで成功すれば、もし次をミスしても前回の成功があるのだからなんとか次の機会を与えられることは可能はず。その為にもここは失敗できないのだ。

最初の一段。これを踏み外せば、階段は目前から崩れていく。

『パーン』と、甲高い銃声とともに一斉に皆駆け出す。有馬も両手を一瞬後ろに引き、リラに行けと伝える。

スタートはほぼ横ならび、背の小さい分加速がいいのか池乃だけが頭二つ分ほど抜き出ている状態だ。

有馬を除けば。

スタート直後から最高速の有馬・リラペアは速攻で他を引き離し、池乃との差を五メートルほど空ける。これは少し速すぎるなど、有馬は横目で池乃の位置を確認し、リラの左手を少し引っ張る。

この走っている最中に左手を引く合図は、運動会までの練習の中で有馬とリラが考えた、最も自然でわかりやすく、リラのスピードを調整する方法だ。右手なら速度アップ、左手なら速度ダウン。

けれども速度は一向に下がらない。それどころか上がる一方だ。「やばい、速すぎる！」

と有馬が思った時には既に遅く、ゴールテープは有馬の体に当たることなく切られた。その瞬間、両手から重みは消える。

二番手の池乃は約二秒後にゴール。おおよそ有馬との差は一五メートル。速過ぎる有馬に池乃は驚きのあまりゴール後に声すらかけられなかった。

有馬の走りを見ていた者は目を点にしているが、有馬のクラスメイトだけは別で、大盛り上がりだ。俺たちの秘密兵器だとか口々言いたい放題に騒いでいる。

注目の的の有馬だが、冷や汗をかきながら『1』と書かれた旗の後ろに並び、速すぎたという結果にビクビクしながら五〇メートル走の終わりを待った。勝ったという喜びは今の彼にひとひらもない。しかし周囲は有馬の予想に反し、取り立てて速すぎる有馬の走りについて言及する者はいなかった。これがもし計測者がいて秒数を計られていれば別だが、有馬の速度を感覚として見ているだけなので、凄く速いでほとんどの者は完結してしまっていた。

その後有馬は一五〇メートルに出場し、疲れればリラの背中におぶられながら走ったフリをするという、バカバカしい方法で一着をとり、午前中最後となる全員参加の騎馬戦では、相手の帽子を取れば取るほど点数が上がるので、有馬は透明になっているリラを使い、手当たり次第帽子を奪いまくった。相手の帽子に手を伸ばせば、リラが勝手にその相手の帽子を引き寄せ、またあるときは突風を吹

かせ、相手の帽子を奪う。もうやりたい放題だ。その結果学年トップの数の帽子を取ることに成功し、有馬のクラスは総合点トップに躍り出たのだった。

昼休みになると有馬の名は学校中に飛び交っていた。いきなり活躍しまくる三年が現れたと、学校中の教師、生徒、保護者、皆が有馬の活躍を口にした。中には高等部の連中もいて、スカウトまでしてくる者が現れる程の人気ぶり。

有馬を知らない者でその状態だ、自分のクラスでは凄い状態になっていた。

「有馬くん、おつかれー。卵焼き食べる？」

「あつ、わたしのウインナーも食べてよ」

「お前のがんばりを評し、特性のうなぎの蒲焼きをやるよ」

男女関係無しに大モテだった。

食べても食べても次々とおかずが有馬の弁当箱に放り込まれ、減るところかどんどん増えて山盛り状態。あまり食べ過ぎると午後の競技に支障が出るのではないのか、という不安を誰も抱かなかった。それほど今日の有馬は完璧なのだ。

「小さなことをコツコツ行えばやがて大を得られると思っていたが、僕の見当違いだったのか？」

その活躍ぶりは、強すぎるほど自分を持っている統でさえ、己を疑う有様だ。

全てが順調。有馬の思惑通り、彼は運動会の超新星となったのだ。その立役者となったリラはというと、現在有馬を監視しつつ、唯賀と昼を共にしている。有馬がまた指示したのだ、唯賀の近くにいてくれと。もし近くにいて和勝とリラが八合わせてしまうと面倒だからだ。というのは建前で、実際はハーレム状態を崩されなくなかったからだ。リラが輪に入ってしまうと、一斉に有馬に「この人は誰？」の方向に話が変わってしまう。

「有馬さん、ちょっと来て下さい！」

へらへらしていた有馬を囲う人の壁をかき分け、いきなり和勝が

現れた。リラを唯賀の元にやってよかったと有馬は胸を撫で下ろす。
「なんだよ、和勝。俺はそれどころじゃ——」

「こつちもそれどころではないんですよ。ずっとうずうずしてたんですから！」

子供がガラスケースに入ったおもちゃを見つめるような期待感を含ませる瞳で和勝は有馬をみつめる。見ようによつては尊敬の眼差しに近いのかもしれない。

もしかして運動会の活躍を見て感動を伝えにきたのではないかと有馬は思った。

「とりあえずここじゃ人が多すぎます、中庭にいきましょう」

「ちよ、ちよい。俺はまだ」

一生に一度あるかないかのハーレムタイムを満喫したかった有馬だが、強引に輪の外へ和勝に引きずられ、泣く泣く中庭に向かうことになってしまった。

「そついえばお前、今日ひとつも競技に出てないじゃないか」

「ええ、また体調を崩してしまつて……そついえば、有馬さんの両親も来ていないですね」

「ああ、仕事だよ。もう一ヶ月前から出張つて決まつてたんだよ二人とも」

両親がもし来ていれば運動会でこんな無茶はしていない。

「で、そんなことよりなんだよ話つて。くだらなかつたら怒るからな」

中庭のベンチに座り、有馬は不満を体中から噴出させて話を切り出した。和勝はというと有馬の様子に気付いているのかいないのかいつも通りの和やかな表情だ。

「調べましたよ、あの異世界のこと」

「ああ？ 異世界？」

俺を褒め讃えてくれるんじゃないのか、と一瞬不機嫌になるが、和勝の言つた言葉を反芻し有馬は態度を改める。

「マジで？ で、どんなことがわかつたんだ」

ちよつと待つて下さいね、と言つて携帯をさわる和勝。

しばらくすると「あれ、おかしいな？」と指を動かしながら戸惑い始めた。

「どうした、わかつたんじゃないのかよ？」

「あれー、すみません。メモ帳に登録していたんです。この間図書館で有馬さんが言つていた内容の書物を見つけたのですが、貸出し禁止でしたのでノートにメモしたんです」

「じゃあそのノートは？」

「持つてきてなくすのが嫌なので、昨日の夜携帯のメモ登録に打ち込んだのですが……消えちゃったみたいです。お陰で体調不良で運動会にも出られないし」

心底残念そうに項垂れる和勝を責める気になれず、肩を二回ほど叩いた。

「すまないな、俺のせいでこんなことになつて。また今度、そのノートを見せてくれよ」

するとパツと花が開いたような明るい表情に和勝は変わった。

「はい、わかりました。ところでずっと気になっていたんですが、校舎の角からずっと手招きしている方つて有馬さんの知り合いですか？」

「えっ、誰？」

和勝の視線の先には校舎の角から顔と右手を出す唯賀の姿があった。それを確認した有馬は首を横に振る。

「さあね、どうせお前の相手だろ。モテる男は辛いねー」

おちよくつた調子で言い、早く行けと有馬は和勝を唯賀の元に向かわせる。和勝は有馬の言葉を疑いつつも立ち上がり、頭をかきながらゆつくりと唯賀の方へ向かつた。

一歩ずつ近づくにつれ、唯賀の顔は火照つていく。それは憧れの人を前にした照れなのか、それとも有馬に対する怒りなのか……。

「すみません、和勝先輩に用はないんです……、あ、あり、有馬！」
両方だつたようだ。

大声で怒りをぶちまけられた有馬は、やれやれと自分の蒔いた種を回収するため唯賀の元に向かった。向かう途中に和勝とすれ違ふ。
「やっぱり有馬さんだったじゃないですか」

「いや、わかってただけだな。ちよつとした冗談」

「そうですか。楽しそうな方ですね、あの子。有馬さん、僕ちよつと先に行つてますね。ちよつと頭痛がしてきたので保健室に行つてきます」

「そりゃ甲高い声で近くから叫ばれると頭も痛くなるよな」

そうじゃないですよ、とやんわり否定して和勝はゆつくりとベンチに戻り弁当箱を片付け始めた。有馬はそれを背中で見送り、少し駆け足で唯賀の元に向かう。

「で、なんでこんなところなんだ？ いきなり――」

目の前までくるといきなりのビンタ。有馬の眼鏡が半分ズレ落ちる。

「これで許す。あんたの居場所はリラさんが教えてくれたのよ、一緒に来てくれなかったけど……で、次あんな下らないことしたら蹴るわよ」

蹴ると言いながらどうせビンタだろ、と有馬は心の中でツツコミを入れる。

「チツ。折角和勝と仲良くなれるチャンスをやったのによ。いいから用件を言えよ」

二人ともムスツとした表情でにらみ合う。

「さっきの和勝先輩のことだけど、あんたって顔に似合わずおせっかいよね」

「お前は顔に似合わず照れ屋だな」

「褒めてやってるんだから大人しく聞け」

再びビンタが有馬の頬に飛んでくるが、それを予測していた有馬はギリギリかわす。それで褒めているなら、唯賀には人を愛するベクトルが常人と違う方向に向いているはずだ。

唯賀は小さく舌打ちし、話を続ける。

「あんた運動会で本当に活躍してるけど、そんなことわたしには関係ないから。あんたががんばってもわたしがいじめと立ち向かうなんて思わないでよ」

「そういうことは思っけていても言うな」

「正義のヒーロー気取りなんてやめてよね。気色悪い」

全てを言い終えたのか、唯賀は有馬に背を向け運動場の方へ足を向けた。

「それがお前の為になつて頑張つてゐる奴に言う態度かよ」

「わかつてないのよ、あんたは」

唯賀はゆつくりと振り返り有馬を睨みつけた。しかし有馬には唯賀の表情を読み取れなかつた。

また渦巻いてゐたのだ。彼女の顔が。

「わたしは忠告してるのよ。普段目立たない奴がいきなり目立つたりすると、それを良く思わない奴が必ずいるわ。そして杭を打ちにくる。わたしもそうだったのよ。クラブで特に目立たない奴だったけど、先輩と同じ人を好きになつただけでちょっとした話題になつて嫌がらせされて……今でも続いてる……わたし、もう学校にこないから」

いきなり話しを飛躍させられて有馬は戸惑う。

「どうして登校拒否の話になるんだよ？」

「わたしをいじめる人達と契約したのよ。運動会は親も見に来るからいじめないで下さい。そのかわり明日からどのようなひどい仕打ちも受けますってね」

「どうして！ 誰だ。そいつら教えろ」

有馬は見えない相手に向かって吠えた。そうでもしないとイライラを抑えきれない。

「教えない。そしたらあんたまで被害受けるもん。いいよ、女のイジメってサイクルなの。だから学年が変われば、また登校できるよになるよ」

「唯賀……」

「いいのよ、わたしのことは。それよりあんたよ。無理してんじやない？ 競技の時の顔、疲れてるの見え見えだった。自分のできることをやればいいんだから、って、わたし人のこと言えないか」

唯賀は小さく自虐的に笑った。

「じゃあ、ほどほどにね」

そう言つと唯賀は運動場に駆けて行つた。その後ろ姿を見送つて、有馬は今日の自分を振り返り、自問自答した。いったい何がしたかつたのだろうか。

中庭ではバトンタッチの練習をする男女の声が響いていた。

「おつ、有馬。次も頼むぜ。なんだって男子リレーだかな」

有馬がクラスに戻ると、クラスメイト達は呑気に駄菓子を食べながら気軽に話しかけてきた。さっきまではそれで良いように感じたのに、今ではその逆。なぜ何も努力しない奴らに頼られ、その期待に答えないといけないのだろう。そう思った途端、突然中庭で練習をしていたクラスの連中を有馬は羨ましく思った。

この場にはやる気が失せてしまふと感じた有馬は、トイレに行つてくると嘘をついてクラスを離れることにした。

ふらつとクラスの輪から外れた有馬だが、どこも行く当てがなく、取りあえず水分補給をしようと冷水機に向かった。その途中、何人もの生徒がすれ違い様に有馬の顔を見て、小さな声で友人とささやきながら歩いていく。誰も有馬には声をかけない、ただパンダとなつて話題を与えるだけの存在。有馬はなんとなくその存在の虚しさに気付いた。

「おい、おいって」

またすれ違つた生徒が声を上げる。友人にあれが有馬だと伝えようとしているのだろう。

「おいって。聞いてんのか有田」

「俺は有馬だ。名前が有田ってなんだよそれ」

名前を間違われ、つい振り返る有馬。そこには中々体格のいい男子が二人立っていた。体操着の色が有馬と同じなので三年の生徒だと気付き、顔を見た瞬間誰なのかを把握した。

元陸上部の副キャプテンと野球部だ。彼らは憎たらしい笑みを浮かべ、しかし眼だけは笑っておらず、有馬をきつく睨みつけている。「ちよつと調子いいからって調子に乗るなよ。しょせん五組の奴らに走るのが速い奴なんて一人か二人で、しかもそいつらも大したことはないんだからな。まあ男子リレーでお前に恥をかかせてやるよ」

唯賀の言っていたことは本当だった。出る杭を打つ者は性別関係なくいた。

有馬は言葉を返すのも面倒なので、何も言わず背中を向け冷水機に向かった。その態度が気に食わなかったのか、「調子に乗りやがって」という声が背中が届いた。

モヤモヤする気持ちを抱きつつも来賓席のテント裏を通り、教師のテント裏を通り過ぎようとテントの中央辺りまできたところで有馬は足を止めた。いや、正確には止めざるを得なかった。

目の前のテントが舞ったのだ。

上空に舞い上がり海老反りをしたような形になって、砂埃を散らしながら勢い良く有馬に向かって落下する。ほぼ無風状態なのに。自分が命を狙われている存在だと完全に忘れ、有馬は油断していた。

突然の出来事でどう避ければいいのかわからず、有馬はその場にしゃがみ込んだ。どうか屋根の布部分が当たるようにと祈りながらパイプが地面とぶつかり、金属音を鳴らし、時に鈍い音を出してテントは崩れ落ちた。

有馬がゆっくりと眼を開くと何故か崩れたテントの外にいた。が、視線を下げるとその理由がハッキリとした。

「リラさん！ 大丈夫ですか？」

そこには腰を抑えうずくまるリラの姿があった。

「また助けてくれたんですか？ ど、どこか痛むんですか？」

周りの生徒も教師も崩れたテントの方に集まってくる。幸い上空に舞ったテントの中にいた教師達は無事だったが、あまりの摩訶不思議な現象に戸惑い、呆然としている。

「有馬、怪我はないか？ 高等部の人、保健室行くぞ。おい、誰か手を貸せ」

教師は的確な指示を出し、リラを保健室に連れていく。

「いや、あたしは大丈夫」とリラは連れていかれることを拒否したが、パイプで腰を打った部分が痛むのか、両脇を抱える教師を引き

はがすことができず、ゆつくりと引きずられていった。その姿を眼で追う有馬に数人の生徒が駆け寄ってきた。どうやらクラスメイトが、遠くから有馬の状況を見ていたようだ。

「有馬くん大丈夫だった？ 怪我はない？」

「ああ、なんとか大丈夫だった」

いきなり大勢で押し掛けられた有馬はしどろもどろに答えた。クラスメイトは有馬の体に外傷がないことを確認すると安堵の表情を浮かべる。

「よかったー。これで優勝の可能性が残るね」

「ほんと。有馬が怪我したらうちのクラス終わりだもん」

それは当然の反応だった。クラスメイトにとって、特に仲良くもない一男子が、運動会で活躍を見せても、しよせんはその程度の存在なのだ。

有馬は一緒になって笑い声を上げた。もう笑うしかなかった。

そして時間は過ぎ、テントの件は急な突風と言うことで解決され、応急処置としてテントにはロープが巻かれ、競技は続けられた。

そしていよいよ混合リレーの次に点数が高い男子リレーが始まった。その前に行われた女子リレーでは有馬のクラスは一〇クラス中七位に終わり、総合点の順位は入れ替わり二位となってしまうている。ここは負けた女子の為に、と気合いを入れるクラスメイトだが、有馬にそんな感情を抱く余裕はなかった。

リラがいないのだから。

クラスメイトは最後で追い上げを見せて欲しいと有馬をアンカーにしたが、リラがいない素の状態の有馬では差は縮まることなく離されること確定だ。一体今までは何だったんだと学校中がポカーンとする姿が目に見えが。

そう考えると有馬は身震いしかなかった。

「おっ、ぶるってるな有馬。武者震いか？」

第二走者の持木はそんなことを言って有馬に笑いかける。しかし

残念ながら有馬の震えはマジビビリだ。

「おい有田。ここで一発屋ってわからせてやるよ」

自信満々に笑いながら、テント突風事件の前にあった元陸上部の副キャプテンが嫌味を言ってくるが、緊張がピークに達した有馬の耳には届かず、結果無視する形となり、「調子乗りやがって」と再び毒づかれてしまう。

そうこうしているうちに安物の銃声が運動場に響き渡り、第一走者がスタートした。

有馬のクラスは一〇人中七位、トップグループに早くも差を付けられている。第二走者の持木にバトンが渡されるが上手くいかず、その間にスムーズにバトンタッチを終えた六組が抜かしていく。持木はなんとか頑張り二クラスを抜かしたが、第三走者は中の上の走力しか持たない奴なので、走力自慢が集まる男子リレーでは完全にお荷物。結果持木が抜いた二クラスに抜かれ、プラマイゼロ。そしてついに有馬にバトンが渡った。

「いけー、有馬！」

クラスの待機席から大きな声が上がる。しかし、ろくに助走もつけずにバトンを受けた有馬は一人抜かれてしまう。現在八位。トップはもう半周先を走っている。

これじゃ、運動会のヒーローになることも……唯賀を勇気づけることも失敗に終わってしまう。有馬は走りながらそんなことを思っていた。

徐々にスピードは上がってきたが、それは男子リレーのアンカーにとつては役不足なスピードであった。カーブにさしかかった所でもっと加速しろ、そう願う有馬は腕を大きく振ったが、左手が何故か前に振ったまま戻ってこなくなった。ならば右手だけでも、と更に大きく振るが、またも前で止まってしまう。

いったいどうしたんだ？ 緊張で体がおかしくなったのか？ そう思った有馬だが、手首辺りの暖かさを感じ、なぜ両手が戻ってこないのかやっとなつてきた。

「リラさん」

「ちよつとスピード上げるな。ほい、舌噛むで！」

有馬はコクリと頷き、精一杯足を動かした。

買い物カートを押すような変な体勢だが、ぐんぐんとスピードが上がっていき、一人、二人と抜いていく。アンカーまではグラウンド半周の一〇〇メートルだが、アンカーはグラウンド一周の二〇〇メートルなのでまだ一位の可能性はある。残すは約八〇メートル。やっとトップグループの最後尾に位置する。

まるで一人だけ足にローラーが付いているような別次元の速度で有馬とリラは他の走者抜いていき、後は陸上部副キャプテンと練習熱心な六組を抜けは一着だ。

そして残り三〇メートルと言うところで六組を抜き、そのままの勢いで副キャプテンを抜き、白いテープをリラは切った。

有馬はゴールと同時に足がつり、また転がっていた。

仰向けになつて有馬はつた足の痛みで涙を浮かべながらも隣にいてと思われるリラに声をかけた。

「そこにいますよね、リラさん」

「おるよ、もう姿見せていける？」

「だめですよ、みんな見てるのに。それよりありがとうございました、怪我してるのに来てくれて」

ふふつとリラは照れくさそうに笑う。

「約束やからね。ずっと近くでおったけど話しかけるタイミングなくつて。ごめんな、あたしももっと早く引つ張つてあげたら良かったんやけど、リレー？　って人がいっぱいトラックにおるからどのタイミングで行ったええかわからなくて」

そういえば第一カーブから加速したことを思い出す。

「だからカーブのところで待ってたんですね」

「そうそう。でも、これでホンマにゆいかのライバルが有馬を好きになるのかな？」

「それはどうでしょうね？　でも唯賀に勇気を与えられればとはお

もいま——」

と格好良く締めようとした有馬だったが、いきなり飛びかかってきた持木に驚き、言葉を飲み込む。

「すごかったな、有馬。さすがだ！」

「そんなことより足、治してくれ」

有馬は伸びきったふくらはぎを慌てて指差す。

「おっ、ピーンとなってるな。わかった！」

持木は有馬のかかちを持ち、伸びきった筋肉を緩めようとしたが、第一走者と第三走者が有馬に飛びかかり、それどころじゃなくなってしまう。

「ちよい、足！」

悲鳴を上げる有馬。コートでは副キャプテンが悔しそうに顔を歪ませ、グラウンドを蹴って土ぼこりを巻き上げていた。三着に終わった六組は、どこかやわらかな光を放っているように有馬の眼には映った。悔しそうではあったが満足そうでもある不思議な顔つきをして、混合リレーもこの調子で、と気合いを入れる声が耳に届いた。あれが本来の運動会を行う者のあるべき姿なのではないか、有馬はふくらはぎを押さえて思った。

ついに最後の競技、混合リレーが始まるうとしていたのだが、有馬は直前にトイレに行くと言ってクラスの待機場所から離れ、三年棟の裏にいた。リラと共に。

「そういえば昼休みに保健室行きましたよねリラさん。和勝と会いませんでした？」

「有馬に似た器の子？ 会ってへんよ。女の子はおったけど男子はおれへんかったで」

そうですか、と有馬は呟き、余計な話しをしている時間はあまりないから本題に入ろうと、気持ちを入れ、ぐっと強い目でリラを見つめ、頭を下げた。

「今日はありがとうございました。もう……一緒に走るのはよしま

しょう」

「えっ？　なんでよ。あたしの腰ならいけるで。それとも嫌いになった？」

そう言っただけで、腰痛はしないと腰の辺りを叩きアピールする。そんなリラを笑顔で見つめ、有馬は自分の気持ちを整理した。

テントの件が起こった時、有馬はクラスメイトを軽蔑したが、同時に自分も同類じゃないかと気付かされた。リラがいないとこれからの競技はどうするんだ？　彼女の心配よりも先に自分の保身が脳内を渦巻いた。けれどその感情は本来必要のない物だ。有馬は唯賀を勇気づける為に、何もできない眼鏡野郎のがんばりを見せることで、唯賀の心が良いように揺れればと、リラと共に運動会で活躍しようとした。けれどその感情だけならきつと競技で負ければどうしよう、なんて気持ちは沸き上らないはずだ。

それを一生懸命練習し、結果より心の繋がりを確かめ合う六組を見ていて有馬は気付かされた。

だから最後は自分の力で一生懸命走り、唯賀を勇気づける。有馬はそう決めた。

無理するなと言ったときの唯賀の顔が思い浮かぶ。

その気持ちを長々とリラに説明しようと思った有馬だが、結局言わずに、ただ一言、リラが見た中で最も強い眼力をして有馬は言った。

「リラさんのお陰で速く走るコツが掴めました。だから大丈夫です」
そんなわけがない、とリラは思ったが言葉にせず、優しく見つめ微笑んだ。

「そう？　ほながんばってな」

結果、有馬は一〇人中九位でゴールした。有馬がバトンを受けた時点で六位だったが、ここから追い上げを見せるだろうと皆は有馬を見つめていた。しかし彼の必死の形相と速度は比例せず、次々と抜かれ、最後の最後、最下位のクラスに抜かれそうになったが胸を

精一杯はつて九位を手にした。ちなみに一位は六組だった。

クラスメイトはがっかりした様子だったが、男子リレーの時に足をつった有馬の姿を思い出し、責めることはせず、逆に有馬を働かせすぎた自分達を責めた。

待機席に戻り、有馬はまたリラに話しかけた。周りには独り言を言っているように思われるが、有馬はかまわず口を開く。

「リラさん、唯賀は登校拒否しちやいますかね」

有馬の耳元にリラの呟く小さな声が届く。

「それなんやけど……ゆいか、混合リレーのあとすぐ帰ってもうたから確認できへんねん」

それはどういう意味なのだろうか、と有馬は考えた。

そして答えが思いついた途端涙があふれてきた。

「仕方ないです。俺のしたことなんてその程度だったんですから」
たった一度の頑張りで報われるほど世界は優しくない。

やわらかなオレンジの夕陽と汗ばむ体をほどよく包む風。有馬はそれらを肌を受け、声をあげて泣いた。そっと肩によりそう温もりを感じながら。

季節は夏の皮を脱ぎ、木々が枯れ木に染まり始めた一〇月の中頃。有馬は中間テストを終え、返却されたテストの点数を見て肩を落としていた。

帰りのホームルームになると各教科の平均点と点数と総合点、それにクラスと学年の順位が書かれた紙が担任から渡され、肩を落とすどころではなく机に顔をつけ頂垂れていた。

「どうした有馬？ 点数が悪かったのか」

隣の席のクラスメイトが心配そうに有馬の表情を見た後、点数を確認する。そこにはクラス順位三位、学年二〇位と書かれている。

「おい！ 嫌味か。俺なんて一生懸命やってクラスで一〇位だぞ」

そう言つてクラスメイトは頭を小突く。けれど有馬は大した反応はせず、小さくすまないな、と言っただけであつた。

有馬は自分の瞳を恨んでいた。

ことの始まりはテスト期間中。和勝の自宅で勉強を行っていると、きだつた。

「そつといえはまだ異世界の話、聞いてなかったよな」

運動会から今日まで一週間以上経っていたが、和勝が体調不良のため早退や欠席が多く有馬は訊く機会を失っていた。

「ええ、まとまった情報はですね、異世界には超能力を持たない人もいることがわかりました」

それはこの間リラがちらつと言っていた。人口の半数ほどが超能力者で、残りはそうでないと。

「で、その超能力者ではない人達は何をしているかと言うと、超能力者の能力を引き出す為のアシスタントや、農業的なことを主にやっているようです」

「ふーん。なんだかこつちの世界とそんなに変わりがない気がする

きた」

「そうですね。向こうの世界は食物を除いてですが、こっちの世界で行うことを超能力者に行ってもらう、というだけでほとんど変わらないかもしれないですね」

有馬は指先でペンをくるりと回し、気になっていたことを訊ねた。
「差別的なことってないのかな？ こっちの世界だと超能力者は少数だから変人扱いが見世物か研究対象になるだろ」

それに対し、和勝は答えを用意していたようですぐさま答える。

「若干ですがあるようです。やはり超能力者は通常の人間よりも能力が高いので、下に見る方もいるそうです。しかしほとんどの超能力者が同じ人間だと表向きには差別を行っていません。それは能力を持ってない人にも言えることですね」

「表向きに？」

「ええ、表向きに。それが気に食わなく思っている能力を持たない人達もいます。そういう方達はこちらの世界の科学などの知識を生きかし、様々な研究を行っているようです。彼らの手を借りずに生きる方法を探しているのでしょう」

「様々？ 例えばどんな研究をしてるんだ？」

「……わからないです。僕もまた調べてみますよ」

和勝は変に間を空け答え、有馬はそれを不信に思ったが特に問い詰めなかった。色々なところから情報を収集していただければまとめる作業が難しくなる。そのため和勝はためらったのだらう。曖昧な情報を有馬に報告しない為に。

「テストが終わってからでいいから。ありがと」

有馬はそう言って近代史のプリントを二枚取り出した。ざっと黙読し、二回ほど読み返すと問題集を取り出し答えを埋めていく。それを見ていた和勝は感嘆の声をあげた。

「すごい記憶力ですね、有馬さん。まるで共感覚者のようです」

「きょうかんかくしゃ？」

ぶんぶんと何度も首を立てに動かす和勝。

「そうです。絶対音感はご存知ですか？」

「ああ、聞いたことがある、ってお前にな。確かどんな音でもドレミに聴こえるんだっけ？」

「ええ、それが共感覚です。他にも種類がありまして、多いのは文字に色を感じる感覚者や音に色を感じる方ですね。そういう人達って五感の一部が突出しているの、例えば絶対音感の方は音の記憶力がいい場合が多いです。だから黙読で抜群の記憶力を発揮する有馬さんは、もしかすると視覚の共感覚者かもしれないです」

明るく言う和勝とは対照的に有馬の表情はどんどん青白いものに変わっていった。

有馬は自分の視覚異常が見つかったから絵を描くことをやめた。それは自分の努力ではなく、遺伝という偶然の産物が与えた力だからだ。絵を描くことはそれに頼っていることになる。だから他人から評価されても良い気分はしなかった。むしろ嫌気がした。努力もせずに成功を手にするに。その気持ちは運動会以降さらに強くなっていた。

「大丈夫ですか有馬さん？ 顔色悪いです」

「いや、大丈夫……とは言えないな。すまんが今日はもう帰るわ」
「わかりました。あの、お大事に」

和勝に悪気はなかったが、有馬は寒気すら感じていた。

もう自分は普通の人間でなく、異常な人間なのか？ 見る物全てが通常の人と違って映っているのではないか？ その疑問が頭から離れなかった。

テスト結果の用紙が配られた後のホームルーム終了間際、担任は文化祭が来週の金曜日に行われることを告げ、それからこやかな表情で有馬の名を呼んだ。いつもは見せない表情に有馬の二の腕に鳥肌が立つ。

「すまないが有馬。お前にはクラス委員の補助を頼みたい」
「はい？」

一体どういう意味なのかわからず有馬はキョトンとする。

「いや、中学最後の文化祭だからな。学校に来ていない奴も来てさ、みんなでやりたいと思う。この間の運動会の盛り上がりを見てその気持ちが強くなったんだよ。で、その気持ちを熱くさせる立役者となった有馬。お前ならそいつらをどうにかできるんじゃないかって思ったんだ」

「そんなの生徒がやってどうにかなるんですか？」

「お前らだからだよ。こういうのは教師が行っても意味ないんだ。学校で一緒に過ごすのは生徒であって教師じゃない。それに俺たちが行ってもそれは仕事って認識されるけど、生徒が行けばそうじゃなくなる。どっちの方が学校に来て欲しいという気持ちが伝わる？」

「そりゃボランティアの方だけど……」

力なく有馬はそう答えると、担任は任せたと大きく声を張った。

「有馬なら大丈夫、俺たちに手伝えることがあつたら言えよ」

「運動会もテストも大活躍だもんね、きっとできるよ、がんばれ」

と、クラスメイト達の無責任かつ応援する声が教室に響き、終いに拍手までやり始める始末。とてもじゃないが断れる雰囲気ではなく、有馬は溜め息をつきわかりましたよ、と泣く泣く承諾した。

耳元からする拍手がやけに大きかったけれど文句は言えなかった。

放課後、有馬はリラと肩を並べて通学路、から逸れた道で下校中。

「なんだよリラさんまで一緒になって拍手してさ」

「なんでって最近有馬元気なさそうやから。なんか元気になるきっかけがあつたらええかなって」

リラに悪気がなさそうなので、有馬はこれ以上責めることはしなかった。それにこうなったのは運動会やテストでいい成績を残し、クラスメイトの信頼感を高めた自分の責任でもあるのだから。

「まあしょうがないか。それよりなんで教室に入って来てたんですか？　もしかしていつもあの距離にいたとか？」

「それはないよ。廊下から見るとときもあるし、木の上に登ってみる

こともあるで。でも最近有馬に危険が多いからな、特に学校で。だから近づくことにしたねん。近かつたらすぐ対応できるやん」

いきなり語られる衝撃の事実には有馬は冷や汗をかく。それと同時にリラの体に生傷が日に日に増えていたことを思い出す。その際、有馬は絆創膏を渡すだけであつたが、傷の理由も訊いておけばよかったと頭を抱える。

「知らない間に何度も危険な目に遭つてたんですか？」

「いちいち言うてられへんやろ？ 有馬も不安でストレス貯まるやろっし」

運動会のテント事件から何事もなく日常が過ぎていたので、有馬はてつきり異世界人が命を狙うことを諦めたのかと思つていた。

「あつちの人が諦めるのつて、あと何日くらいですか？」

「えつと確か金曜日にこつちきたから」

リラは指を折つて日を数える。

「あと一〇日かな？ 再来週の水曜日」

その日は文化祭と同日。だからその日までに登校拒否をしている生徒を登校させなければならぬ。

「色々と面倒ごとが多いですけど、お互い乗り切りましょう」

「うん。がんばるな。……で、有馬が元氣のない理由ってなんなん？」

「そ、それは」

簡単に人に相談できる話なら有馬もここまで思い悩んではいない。だが相手は異世界人のリラだ。有馬の持つ能力は彼女に比べれば微力だが、超能力を持つ者同士、悩みを共有できるかもしれないと思ひ有馬は口にした。

「実は俺つてちょっとした超能力を持つてるんです」

「ほんまに？ どんなんどんなん？」

リラは有馬に共通点があることを素直に喜び、興味津々に訊ねる。「リラさんに比べれば全然ですけど、人の感情を象徴的に見る事ができる能力を持っています」

「へえ、あつちの世界でも珍しい能力や。初めて聞いたで」

その言葉は有馬の心にまた一つ傷をつけたが、かまわず話を続ける。

「その副作用と言っては何ですが、目で見た物の記憶力も良くなってしまうんですね。でもそれはみんなには無くて特別の力じゃないですか。なのに同じ土俵の上で戦うのっておかしいかな、と思いまして」

その言葉を聞いた途端、リラは表情を変えた。陽から隠にスイッチが押されたように。

「こっちのきみはそんなこと言うんやね」

今にも泣き出しそうなリラに有馬は戸惑い、どうしていいかわからず、ただ自分の言葉のどこがいけなかったのか、それを探すことしかできなかった。

「ごめんやで、ちょっと思い出してな」

そう言うとしらは足から腰にかけて、うつすらと霧のようになって姿を消していく。

「どうしたんですか？」

「どうもないよ、ちよつと姿を消したくなっただけ。悩み解決できなくてごめん」

言い切る前に、リラは姿を消していた。

弱々しい声が少し肌寒い秋風に溶けていった。

次の日の放課後、有馬はクラス委員である統と共に、同じクラスの登校拒否をしている生徒の自宅に向かっていた。

「今日はダメな気がするな」

おもむろにやる気をそぐ言葉を吐く統。

「行く前からそんなことを言うな、バカ」

「今朝の占いで最下位だった」

男のくせにそんなことを気にするのかよ、と鼻で笑う有馬。

「いつも見ているのに初めて目についたのだが、その占い師の名前に有馬の苗字が含まれていたが、知り合いとかではないか？ お前の苗字は珍しいから気になってな」

「知るかよ。そんなこと。それよりなんで俺がこんな責任重大なことをしなくちゃいけないのか教えてくれ」

「責任の重さは能力に比例する。だから有馬はそれだけ能力があると言うことだ」

「へいへい」

この言葉を統が頭をひねって考えたのなら少しは心を動かされるのだが、自己啓発本の引用だと有馬は知っているので全く効果はない。むしろ嫌気すら感じる。

「まあ拒否ってる奴に会って説得するだけなら別にいいんだけどさ、あの担任、ホームルームで俺に目を合わせて嫌なコト言ってたんだよな」

帰りのホームルーム、担任はさり気なく有馬に目を合わせ、

「文化祭の出し物なんだが、まだ一つ空きがあつてな。なにかやりたいことがあつたら言ってきてくれ」

その視線と物言い。完全に有馬に文化祭の出し物の一枠を任せようとしている。

「ああ、あれって僕に言っていたのではないのか？ 少し運動会で

活躍したからと言って自意識が過剰すぎるぞ」

自らが勘違いをしているにも関わらず、統は大きく笑い、有馬の背中を三回ほど叩いた。あまりの自意識過剰っぷりに、有馬は突っ込む気すら起きない。

しばらくすると閑静な住宅街に入り、八階建てオートロック式のマンションの前で統は足を止めた。

「ここか？ まあまあなマンションだな」

築十年経っているかいないかの綺麗なマンション。周りを彩る木々は丁寧に刈り揃えられているところから、しっかりと管理がされていることが伺える。

統は一息もつかず、マンションの玄関口まで行き、オートロックのキーをダイヤルし始めた。

「おいおい、お前何て言うつもりだ？」

「こういつつもりだ」

「どちら様でしょうか？」

インターホンから母親らしき声がして、有馬は緊張で肩がビクンと震える。

「こんにちは。僕は立石くんのクラスでクラス委員を務めている統と申します」

「ああ、統くん。いつも悪いわね」

母親の反応からすると、統は何度かこの生徒の自宅を訊ねているようだ。

「来てくれてありがたいんだけど、まだ学校に行きたくないみたいなの」

「そうですか、会うことはできますか？」

「ごめんなさいね」

立石の母親は心底申し訳なさそうに言ってインターホンを切った。

「おいおい、ダメだったじゃないか」

「そんな簡単に話を聞いてくれるなら引きこもったりしない。数を打てばいつか当たるものだ」

「訪問販売の営業かよ」

二人は早々にその場を後にし、次の目的地を目指す。

統の話によると、有馬のクラスには登校拒否の生徒が四人いる。そのうち一人は女子で一年の三学期から来ていないらしく、あとの三人は三年になってから拒否しているという。しかもほとんど同時期に。

「二ヶ月で三人も学校に来なくなるなんて、ちょっとおかしくないか？」

「どうだろうな？ 夏休み前だったから、受験のことやらがあつて学校が嫌になった可能性もあるぞ」

統の言うことも一理あるが、五月の終わりから七月までに三人が来なくなるのは少し異常のように思える。

次に統が足を止めたのは、言つては悪いがボロいアパートだった。一人暮らしではないのか？ と疑いたくなるような狭い住まいだが、統によれば拒否生徒と母親と姉の三人暮らしらしい。ちなみにここに住む四ツ木が有馬のクラスで三年に入つて最初に登校拒否を始めた生徒だ。

家の前に着くと同時に先ほどと同じように早速チャームを押そうとする統。伸びる手を有馬は掴み、俺にやらせろと平坦な口調で言つた。

「お前はいつも来てるから慣れられてるんだよ。ここは俺にやらせてくれ。違う奴が来たとなると対応も変わるかもしれない」

そうだな、と統はすんなり納得し腕を下げ、有馬の提案を受け入れた。

有馬は震える指先をチャームに向ける。

このたった一回の出会いで四ツ木が学校に来られるようになるかもしれない。

しかしその逆の場合もある。下手な対応をとると、余計に傷が広がり、引きこもり純度があがる可能性もある。

彼の人生を変えてしまふかもしれない。その責任の重圧で有馬は

額にうつすら汗を滲ませる。しかし唯賀のことを思い出し、有馬はやっと指先をチャイムに触れた。あの悔しさは二度と味わいたくない。

「ぴんぽーん」とおもちゃのようなチャイム音が響く。けれど反応はない。

もう一度有馬は押すが、またしても反応がない。

するとガタン、と扉の向こうから物音がした。これは扉を開けに来たのかもしれないと、有馬は緊張の面持ちで扉を見つめるが、開く気配がしない。

「きつと居留守だ。そして四ツ木はドアの穴から俺たちを確認したんだろうな」

「へっ、そうなの？」

緊張が解けると同時に、有馬の怒りが降るように湧いてきた。

「ふざけやがって。わざわざ来たんだから声くらいかけやがれ」

「そういう感情はだめだ有馬。来てやつてるんじゃない。来させてもらっている。それくらいの気持ちでいないと」

お前は聖人君子かつ、と統に吐き捨て、有馬はイライラ感丸出しの足取りでオンボロアパートを後にした。

陽が落ち、月が顔を覗かせる頃、二人は三人目の自宅である、古き良き日本家屋に着き、その玄関前で有馬は二件目と同じように緊張の面持ちでチャイムを押そうとしていた。

「大丈夫だ。失敗を恐れるな。二度あることは三度ある」

「励ましてるつもりかよ」

言って溜め息をついた拍子に有馬はチャイムを押してしまった。やってしまったと、辺りを見渡し隠れようとしたが、統の手が肩をつかんでいるので身動きが取れない。

「はい青戸です」

有馬は背中につららがするりと抜けるような寒気を感じた。声質からするにインターホンの向こうには登校拒否の生徒がいる。黙っているとしたのいたずらになってしまうので、有馬は慌てて口を開

く。

「あの、ありやまと申しまして青戸八弘さんですか？ 同じクラスの有馬だけど知ってる」

「……………」

予想通りと言っては何だが返事はない。かまわず有馬は言葉を続ける。

「なんで学校こないんだ？ 三年に入ってから拒否るなんて勿体ないだろ」

「うつさいよ！ お前にカンケーないよ」

インターホンから怒声が響く。カチンときた有馬だが、返事をしてくれたということは一歩進めたんだと、無理矢理ポジティブに考え、怒りを抑える。

「関係なくはないだろ。こうやって家まで来てるんだ。せめて来なくなつた理由くらい聞かせてくれよ」

「話すことなんてないよ。自分の意志でこうやってんだ、放っておいてくれよ」

その言葉を最後に、有馬がどんな嫌味を言おうとインターホンから青戸の声は聞こえてこなかった。

「あの野郎、逃げやがって」

三件連続の無駄足に、有馬のストレスはピークに達し、それをぶつけるため、大きく息を吸った。

「逃げるなよ、バカ！」

腹から出した声は周辺に響き渡り、近所迷惑もいいところ。統は有馬の行動に溜め息をつき、頭の天辺を小突いた。

「バカか。あいつらはこういうことをされるのが一番嫌いなんだ」

「へっ、知るか。あいつらとか言っつて、引きこもりとそうじゃない奴を分けてるお前みたいな奴の方が嫌われるんじゃないのか？」

荒々しく鼻息を鳴らし、有馬は先を歩いていく。

「あと一人だろ？ 登校拒否してる奴。早く行って終わらせようぜ」
「いや、こいつはいいんだ。先生から行くなと言われている」

「じゃあ、今日は時間の無駄だったってことだよな」

「そう思うな、塵も積もれば山となる、だ」

積もるか！ と有馬は怒鳴り、登校拒否の生徒の自分勝手さによる苛立を鞘に込め、コンクリートに叩き付けた。

「ただいま」

有馬が家の扉を開くと、カレーの匂いがした。有馬の母は何か良いことがあるとカレーライスを作る傾向がある。

有馬家のカレーライスは市販のカレールーを使わず、様々な香辛料を組み合わせ作る手間暇がかかった一品で、有馬が最も好きな料理のひとつである。それが食卓に並ぶと考えると放課後の出来事などに苛々していた自分が馬鹿らしく思え、自然と階段を登る足取りも軽くなる。

自分の部屋に入ると有馬はまずリラの名を呼んだ。

登校拒否をしている生徒をどうやって登校できるようにするか、そのアドバイスをもらうために。リラの能力を使えば解決の糸口が見つかるとかもしれない、そう思ったのだが……。

「リラ、おい。いるんだろ？」

名を呼んでもダメなら、以前決めたリラを呼ぶ合図である咳を三度してみたのだが、これも反応がない。

有馬の命を守るため、呼べばすぐに現れるはずのリラの気配がない。そういえば昨日の放課後から一度も姿を見ていないことに気が付く。

だとするとまだ機嫌が治っていない可能性が高い。リラの機嫌を損ねた理由がわからない限り、リラに謝ることもできない。しかたなくこの件は一旦保留にし、有馬はダイニングに向かった。

何が悪かったのだろうか、と頭をかきながら階段を下り、ダイニングの扉を開くと、香辛料の香ばしさと果物の甘みのするカレーの匂いが鼻を通り、その悩みを一気に脳内から忘れさせた。

「お母さん。今日はどんないいことがあったの？ 父さんが部長になったとか？」

母親は興奮気味に話す有馬に対し穏やかな笑みをうかべる。

「ふふつ、残念だけど外れ。その父さんだけど今日は飲んで帰って連絡があつたから、今日は二人で夕食よ」

「ってことはお母さんにいいことがあつた？」

「そうと言えばそうね。さあ立ってないで座って。いただきますしゅう？」

机の上にはカレーの他にコーンポタージュスープとトマトやレタス、コーンなど彩り豊かな野菜が皿に盛りつけ、その中心にマヨネーズで和えたマカロニが置かれたサラダも並べられている。

「いただきます」

「はい。いただきます」

有馬は勢い良くカレーを掻き込む。好きなものなら味わって食べると言いたくなるほどの勢いだ。ものの数分で皿を平らげ、二杯目をおかわりし、それも平らげ、サラダに手を付けたところで有馬はやつと母親と会話を始めた。ちなみに母親はまだ一皿目。

「教えてよ。一体何があつたんだよ。いつもより肉も柔らかいし、よつぽどいいことあつたんでしょ」

そうね、と言って母親はスプーンを一旦置き、有馬を見据えた。

「今日ね、先生から電話があつたの。有馬は登校拒否をしている生徒に声かけをしてるんでしょ」

余計なことを言いやがって、と有馬は心の中で担任を恨む。人の為に何かを行うことが少し恥ずかしい年頃なのだ。

「運動会の結果も有馬はまあまああって言っていたけど、大活躍だったそうじゃない」

「あれはたまたま調子が良かっただけ」

褒められるのも恥ずかしい年頃だ。

「それでもいいのよ。あなたはあまり友達が多い方じゃないでしょ？ いいのよ、それは人それぞれだから。でもこの間、視覚異常が見つかったじゃない？ それがきっかけでますます人と接しようとしないうんじゃないかってちょっと不安だったの。実は言うとお母さんはそうだったのよ」

母親は一旦間を置き、グラスの水に口をつける。

「でも有馬は違ってたわ。それがきつかけかはわからないけど変わったわ。積極的に運動会でがんばって、クラスの人達から信用されて、登校拒否の生徒の声かけまでしてる」

「登校拒否の奴らは先生に無理矢理やれって言われたんだよ」

「いいのよ、それでも。以前のあなたなら押し付けられても無視していたはず」

「それは……」

反論しようとしたがその通りなので言葉が出てこない。

確かに有馬は変わったのかもしれない、母親の言った通り。

有馬はそれが誰のお陰かはわかっていた。

もしも視覚異常が見つかったから、彼女に出会ってなければ学校に行かなくなっていたかもしれない。運動会で活躍するという目標もなく、ただ人の感情の変化ばかりを見ている日常を送っていたら、人に会いたいという感情は薄れていっただろう。

引きこもり。その一歩手間にいたという事実を有馬は思い知る。

それと同時に彼らを救いたいと思った。

「実は、今日クラス委員と一緒に、登校拒否をしている奴の家に行っただけで、全部門前払いされて……。お母さんは経験あるんでしょう？ 登校拒否の。少しアドバイスしてくれない」

「そうね。ひとつだけ言えることは、有馬が最もその子達を救える可能性があるってことかしら」

そう言っただけで母親は有馬の瞳に指先を向けた。有馬は思わず目をそらす。

「あつ、ごめんなさい。先端恐怖症だったのよね」

「そうだよ、怖い」

「じゃあ、お母さんの言いたいことはわかったかしら？」

意味が分からないと有馬は首を傾げる。

「見えるんなら見てしまえばいいのよ」

母親のその言葉に有馬は動揺する。

「でもこれは特別な力で、普通の人にはない——」

「なら有馬は一生、その力に背を向けて生きていくの？ 無理よ。

無意識に見えるのだから。だったら甘えちゃえばいいのよ、この能力に。だってその分、有馬は先端恐怖症とかテレビを長時間見れなかったりすぐ眠たくなったりって悪い部分もあるでしょ。視覚異常が良いか悪いかは置いといて、それを上手に使って幸せになった方が、お母さんは嬉しいし、きっと有馬も楽しいはず。お母さんのお母さんもそのまたお母さんもそうやって生きてきたわ」

有馬はなにも言わずにゆっくりと頷いた。そして昨日、リラに言った言葉を思い出す。

「？？同じ土俵の上で戦うのっておかしいかな、と思ひまして。

同じ世界に生きるなんて間違っている。昨日の言葉はそういう意味に取られても文句は言えない。」

「お母さん、ごちそうさま。ちょっとカレー持ってくよ」

食器棚から新しい皿を取り出し、ご飯を盛り、ルーをかける有馬。さらにラップをかける。

「あら、ここで食べればいいのに」

「どうしても食べさせたい友達がいるんだ……それにありがとう、母さん」

「いいえ、こちらこそありがとう。有馬」

その言葉を背に受けながら、有馬は扉を開き、カレーを持って外に飛び出した。そして近くの児童公園に着いてから咳を三回ほどする。

けれど、またしても反応はない。それでも有馬は話すことにした。「リラさん。これが会ってくれない理由かどうかわかんないけど話します。俺の眼は特別だけど、それを使わない行為は能力を持たない人をバカにしている。俺の考え方は差別を生んでいたんだ。それが嫌だったんでしょ？」

言い終ると、有馬の目の前に砂埃のようなものが巻き上がり、次第にそれはリラを形作っていった。

「リラさん」

姿を見せてくれたことで、有馬の顔は綻ぶ。

「ごめんな、有馬。……でも気付いてくれて嬉しい。でもな、それだけやないんよ」

リラの瞳は弱々しく、今にも溶け出してしまいそうだ。

「向こうの有馬は、能力を持ってなかったねん。けど、いきなり能力使えるようになってん。そこであいつは躊躇せんと能力を使った。すぐに受け入れたねん、自分を。でもこっちの有馬は悩んだ。それで気付いたねん。やっぱりあいつは……おらんやなって」

瞳から雫がポタリと落ちる。

「有馬とおると楽しくて、器もあいつと一緒にやし、あいつがおれへんなったこと、あたし忘れれたねん。けど、昨日の有馬の言葉で、あいつは……あいつにもう会われへんやって気付いてしまった。でも感謝してる。それに気付けたし……だからこっちこそごめん」

リラは笑みを有馬に向けながらも涙を流していた。

「リラさん……無理しなくていいです。笑わなくていいですよ、俺のことなんて気にしないで」

「で、でも人が泣いてるのん見たら悲しくなるやろ？ それに有馬は感情も見える、余計苦しいんちゃうの」

有馬は優しく微笑んだ。その表情は、今日の母親と似ていた。

「見えるから言ってるんですよ。今は泣いた方がいって顔に出ます」

「そうなん？ じゃ、お言葉に甘えて」

リラは声を出さず、ただ涙を流し続けた。小さく肩を奮わせて。

「リラさん、泣いてる最中ですけど、お腹がすいていたらこれを食べて下さい」

涙を拭いながらリラは有馬の持つ皿を不思議そうな目で見つめた。

「これ？ おいしいの？」

「失礼な。俺がこの世界で一番好きな食べ物です」

リラは震える手で有馬に手渡されるスプーンを持つとするが、

持つことができない。

「仕方ないです。口を開けて下さい」

「……？」

有馬の言葉の意味を理解していないリラだが、言われた通り口を開いた。有馬はその口にカレーライスを含ませる。

こういう意味だったのか、とリラは納得しながら味わい、何度も咀嚼する。

「めっちゃおいしいわ」

「それはよかったです」

カレーを食べてもリラの涙は止まることがなかったけれど、瞳に若干明りが灯ったような気が有馬にはした。

「なんでご飯ごちそうしてくれたん？」

自分でしたことなのに理由がわからない有馬は一瞬考え、答えが出るという声で答えた。

「今日はいいいことがあったからですよ」

その翌日有馬はリラを連れて登校拒否者の家を昨日と同じように訪問していた。

そして昨日と同じように立石家は母親に断られ、四ツ木家は居留守。なので二人の足は青戸の家に向かっている。ちなみにクラス委員の統は文化祭の会議があるので来れていない。だからリラが姿を見せて歩いているわけだが。

「ここだな」

統から借りた地図を片手に、昨日と同じ日本家屋の前に立ち止まる。表札には青戸と書かれているため間違いはない。

「あのリラさん、ちょっと俺が言うこと繰り返してもらえますか？」

「ええけど何で？」

「いや、昨日こいつに腹を立たせられたので軽く仕返しです」

有馬はリラに中年男性の声質に変えるように命じ、チャイムを連続で二回押した。

「はい、青戸ですが」

インターホンからは昨日と同じ声が届く。それを聞いて有馬はリラの耳元でささやき、それをリラは復唱する。

「こんばんは、八島急便ですが荷物の配達に参りました」

「はい」

有馬とリラはぐり門の横に隠れ、青戸が現れるのを待つ。

するとすぐに、寝間着姿の青戸が現れ、ゆつくりと庭を歩き、門を開いて配達員の姿を確認しようと辺りを見渡した、瞬間絶句する。
「騙してすまない。昨日来た有馬だ。こっちは友達のリラ」

「……」

にこやかにリラが微笑みかけるも青戸は全くの無反応。ただ顔だけは徐々に強張っているのがわかる。

「こうでもないしと出て来てくれないだろ？」

青戸は勢い良く首を振りもう一度辺りを確認する。

「宅急便は！」

「あ、あれね。リラさん」

「こんばんは、八島宅急便？　だっけ」

先ほどの中年の声質で話すも内容は覚えておらず途中で途切れるが、それだけでも十分リラが宅急便のフリをした証明になる。

「くっそう。なんだよお前はよっ」

「だから昨日言っただろ？　有馬だ。同じクラスの。そしてお前を騙すのに一役買ってくれた方が隣にいるリラさんだ。制服を見ればわかるようにうちの高等部」

「そんなことを訊いてるんじゃないよ！」

青戸は昨日と同じように怒鳴り声をあげる。インターホンからでないので苛立が直に伝わり、その分有馬の感情も昂る。

「うっさい奴だな。じゃあいい。理由だけでも訊かせてくれ。学校にこなくなった理由。どうせいじめだろうけど」

「うるさい、悪いかよ！」

肩で息をし、荒い息をする青戸。相当なストレスを蓄えているのだろう。いまにも感情が破裂しそうだ。

しかし有馬がそうはさせない。『いじめ』と言う言葉を有馬が吐いた瞬間、有馬の眼には青戸の顔の周りが黒く滲んでいくのが見えた。予想通りの返答で有馬はほっとする。これが家庭問題の場合だと手を出せなくなるからだ。

「言ってくれ。別に先生にチクってそれで相手から仕返しされても、お前はひきこもりだ。家から出ないならそいつらから攻撃はされないだろ？」

「話してどうなる」

不貞腐れ、唇を尖らせながら青戸は訊ねる。

「リラさんは高等部の不良と繋がりがあ。それに彼女は腕も立つんだ、見かけによらず。だからその問題を立ち所に解決できる。青戸、学校に行こう」

青戸はそれを聞くと迷った表情でうつむき、指遊びをした。少し間を置き伏し目がちのまま言葉を返す。

「八弘が告げ口したって言わなきゃ教えてもいいよ」

その言葉に有馬の表情が緩む。

「言わない。だから教えてくれ。頼む」

先ほどまで有馬の眼には青戸の顔が黒い幕を覆いながらもうつすらと見えていた。けれど今はただ黒い幕だけが見え、その向こうに映る青戸の顔は映らない。これは感情の変化の本質に近づいているからだと有馬は見解し、話してくれと口にした。

「四組の不良に金をとられたんだよ」

「それって脅し？」

青戸は違うと言いながら小さく首を振る。

「でもそれに近いかな？ 賭けをしようって言われてね、無理矢理よ。で、賭けに負けると掛け金を払わないといけない。そうやっているうちにお金がなくなつて、払えなくなると殴られたり——」

「って、恐喝じゃないかよ！」

「でも微妙じゃない？ 勝つこともできるんだよ。まあ、勝てなかったけど」

ややこしい話だな、と有馬は頭をかく。するとリラが口を開いた。

「じゃあ、勝てばええんやろ？」

すかさず有馬もその意見に乗っかる。

「そうだ、勝てばいい。簡単な話だ。ところでどんな賭けをしたんだ？」

「えっと、例えばだけどコインを投げて右手に持ってるか左に持ってるか？ とか、双六を投げて半か長か、とか。あと手品っぽいこともするんだけど、それが成功するかしないかってのもあったよ。とにかく魔法みたいですすごいんだよ」

「魔法みたい？」

有馬はその言葉が引っかった。

リラが学校で有馬の命が狙われることが多くなったと言っていた。

なら、もしかするとこの件は異世界人が一枚噛んでいる可能性がある。

異世界人は校内の誰かかもしれないと有馬は推測した。

「ようはそいつらの魔法に打ち勝てばいいんだな。わかった。名前を教えてくれ、勝負を挑む。やったらやり返すまでだ」

有馬とリラは青戸の家に向かったその足で恐喝まがいを起こした奴の元に向かった。

青戸からそいつの名前を聞いただけで、有馬は大体の居場所の見当がついた。

普段なら関わり合いたくもない四組の不良。唯賀と出会った日、有馬が乗ろうと思っていた車両にいた不良達の核の存在。中学の番的存在、押上。

思っていたより面倒なことになったと、有馬は苦虫を噛み潰すような表情をして歩く。

着いた先は喫茶プッシュアップ。有馬の通う中学の不良達のためり場だ。

「リラさん、行きますよ？」

「うん？ いつでもええで」

これから不良の巣窟に足を踏み入れるとなると、ドアノブを持つ手が震え、引くことができない。そんな有馬を不思議そうな目で見つめるリラ。

「どうしたん。もしかして開けにくいとか？」

有馬の心情を理解していないリラは、有馬の手を上から抑えるようにつかみ、ドアノブを引く。

「あっ、ちょい心の準備が」

と、言っている間にドアが開き、ドアに付いた鐘の音が心地よい音色を奏でる。それがまた少し不気味だ。

有馬が恐る恐る店内に視線を向けると、キツい視線が矢のように突き刺さる。店内にいる不良達が、誰だこいつ？ という目で見て

いる。

店内の右側には四人掛けのテーブルが三つと左側には七席置かれたカウンター。床から天井まで木の板で被っていて、時計や飾られた小物も古く、昔ながらの喫茶店の雰囲気が漂う。

「いらっしやい。カウンター空いてるよ」

土方で働いた方がいいんじゃないのか？　と思えるような筋肉質な中年男性が、ジーンズにシャツというラフな服装をしてエプロンを巻き、カウンター内から有馬達を案内する。

「あつ、どうも」

小さく遠慮がちに有馬は返事をして、案内された席に腰を降ろした。

するとテーブル席に座っていた不良（有馬は名前を知らない）が馴れ馴れしく声をかけてきた。

「おい、お前って有馬じゃね？　運動会じゃすごかったじゃないか」
喧嘩を売ってきたようではないらしく、ほっと安心して息を吐く有馬。

「あ、ありがとう。偶然だよ、あれは」

「まあそいうなつて。ここ空いてるから座れよ。お前の武勇伝を聞かせてくれ」

そう言つて不良は同席していた後輩と思しき不良を別の席へ移動させ、有馬とリラを座らせた。

「にいちやんとねえちゃん。飲み物はどうする？」

やっと席に落ち着いた二人を見て店主はオーダーを訊ねる。

有馬は挙動不審にメニューを手に取り眺める。喫茶店など来たことのない有馬は何を頼めばいいかわからず、さらに落ち着きを失う。すると隣にいたリラが手を挙げてオーダーを告げた。ろくにメニューを見てもいなくせに。

「あたしカレー。カレーがいい」

「おつ、喫茶店に来てカレーを食べるつて、姉ちゃんツウだね」

リラは言葉の意味を理解していないが、なんとなく褒められた気

がしたので、へへつと微笑む。

「にいちゃんは何にすんだい？」

「えっと」

言葉を濁しながら有馬は考える。時刻は六時半を過ぎた辺り。文化祭の作業で遅くなると母親に告げてはいるが、晩ご飯の用意はしてもらっている。なのでリラと同じ、というわけにはいかない。

中々メニユーを決めない有馬に苛立ちを感じたのか、有馬の前に座る不良が睨みつける。

「早く決めろよ、おっちゃんも忙しいんだよ。コーヒーでいいだろ？」

「あつ、そ、そだね。コーヒーひとつ」

不良の威圧に負け、コーヒーなど飲めもしないのに頼んでしまう有馬。

「ホットとアイスあるけどどっちだい？」

「えっと」

「ホットでいいよおっちゃん」

苛々した口調で不良が有馬のオーダーを勝手に決め、それでいいのかい？と目で合図する店主に有馬は首を振る。

歓迎ムードが一気に解散ムード。帰りたくて仕方のない有馬だが、ここで帰ってしまうとこの苦しみが無駄になってしまう。思い切つて有馬は彼の名を口にした。

「えっと押上っているかな？ ちょっと用があつて来たんだけど」

有馬のあまりの鈍くさに呆れていた不良だったが、その名を聞いて表情が変わる。

「なんだ押上さんの客か。いるよ、この上に」

「うえ？」

有馬が訊ねると不良はそうだ、と偉そうに答えた。

「ここは押上さんのおっちゃんの店だからな。二階が家になってんだよ。用があるんなら呼んできてやるけど？」

「あつ、お願い」

不良はやれやれ、と面倒そうに立ち上げり、店の奥のカーテンを開けて、階段を上っていった。

しばらくすると二階からドスンと言う鈍い物音がし、それからゆっくりと階段を降りる音と、寝てる時は放っておけて言ってるんだろクソが、という苛々した声が店内に届く。押上が降りてくると勘づき、ここからが勝負だと有馬は気合いを入れカーテンを見つめる。

「誰だ。俺に用があるって奴は？」

「俺だ、押上」

押上と有馬の視線が合う。威圧感のある三白眼に思わず眼を背けなくなるが、ここで逸らせば弱気になっていることがバレてしまう。

「んだテメ？ 確か運動会で目立ってた奴じゃねえか。メンチ切りやがって、喧嘩売ってんのか？」

そんなつもりではないのだが、そうとられても仕方がない。有馬の表情は強張っているのだから。

「そうやで、勝負や勝負」

「ちよつ、リラさん！」

言い換えれば確かに二人は押上に喧嘩を売りにきたことになるのだろうが、ストレートに言うべき相手ではない。不良に短気はステータスだから。

「ああ？ ちよい店でろ」

「おい！ 静かにしろ、それにこいつは客だ」

父である店主に注意を受けると舌打ちをし、不機嫌そうに有馬の前の席に座った。

「喧嘩を売りにきたって言うのは違うくて、ちよつと噂を聞いたんだ」

「噂？」

有馬は親の前だと気使い、声を潜めて言う。

「賭けだよ。押上の手品がどうのこうのって聞いてさ。俺もやってみたくて」

それを聞くと同時に押上は立ち上がった。殴られるのか？ と一

瞬ビクツとした有馬だが、押上の顔はにやけていたので取り越し苦労だったことに気付く。

「おい、親父。こいつは俺の客でもあったみたいだ。ちょっと二階に連れてくぜ。おい、お前らも来たい奴は来い、見世物の時間だ」
にわかにざわめき出す店内。待つてましたという声も上がる。

これから何が始まるのか不安で仕方のない有馬と、好奇心をかき立てられわくわくしているリラは二階の押上の部屋に案内された。
畳が敷かれた六畳ほどの部屋。そこにちゃぶ台と洋服ダンスにCDコンポが置かれている。それと部屋の隅にノビた不良が一人。
不良が引き出しから座布団を取り出しちゃぶ台に三枚置き、ここに座れと促す。

押上と有馬とリラがちゃぶ台を囲い、その周りを一階にいた不良達が囲う。何とも言えない異様な雰囲気。それに狭い部屋に十人程いるので少し息苦しさもある。

押上はにやけながら人差し指を立てた。

「で、いくらだ」

ルールを理解していない有馬だが、成り行きで押上と同じように人差し指を立てることにした。

周りの不良達も賭博を行っているのか、どっちに賭ける？ などとささやき合っている。

「まあ最初はそんなもんか。じゃあ見とけよ？」

右手を広げ一〇円玉があることを示し、コイントスの要領で、親指で弾くと高く上に飛ばし、くるくる回転しながら落下する、その途中、コインを両手で拾うように被う。そして両手を握って前に差し出した。

「さあ、左右どっちだ？」

自信満々な表情で伺う押上。よほど上手くいったのか、口元が少し吊り上がっている。

「リラさんわかります？」

有馬には眼で見た物を常人よりも記憶することができが、それ

は見えた場合の話した。動体視力までは上がっていない有馬には、落下するコインをキャッチする手の動きまではわからない。

しかしリラならば。そう期待し、声をかけたのだが、

「？」

ニコニコと笑みをこぼしながら有馬と押上を交互に見ている。この様子だと押上の行為を全く理解していなかったのだろう。初めてだし仕方ないか、と有馬は溜め息をつく。

「リラさん。今、押上が一〇円を投げましたよね」

「うん、それで？」

「それがどっちの手にあるか当てるんです。そしたら勝利です」

「おー、なるほどなあ」

コクリと頷き納得のリラ。

「じゃあ、もう一回やってくれるかな？」

有馬は押上に提案したのだが、

「ああ？ 勝負にやり直しなんてあるかバカ。さあ、右か左、どっちだ！」

そんなに甘くはないかと有馬は嘆息し、仕方なく勘で右手を指差すが、

「ハズレだ」

開いた手には一〇円玉がない。

「くそっ、左だったか」

押上は座布団をつかみ座り直すと、手の平をひよいひよいと動かし金銭を要求する。

「負けは負けだもんな」

有馬は財布から百円玉を取り出し、ちゃぶ台に置いた。

すかさず押上の怒声が室内に響く。同時に周りから笑い声がした。「バカかお前。そんなしょっぱい金なんているか。一桁ちげえよ」「マジで！」

有馬は押上との金銭感覚の違いに絶句する。有馬の月の小遣いは二千元。財布にあるのは二三〇〇円。賭けに負けたので残り一三〇

〇円となる。

泣く泣く手渡す有馬だが、ここで負けては意味がないので、もう一勝負要求することにした。負ければ喫茶店の食事代を払えなくなるので、背水の陣だ。

「さっきと同じ金額でもう一勝負頼む」

「いいぜ、何度でもな」

さっきと同じ要領でコインは宙を舞い、落下する最中に押上の両手がこちらから一〇円玉を隠すようにキャッチする。が、やはり有馬にはどちらの手にあるのかわからない。それほど押上は一〇円玉をこちらから見えないよう、上手に掴んでいる。硬貨を握る仕草をとるタイミングもほぼ同時。有馬からすれば完全な運任せだ。

「リラさん、見えましたか？」

口元を手で覆い、しばらく考えるリラ。ただ左右の手のどちらに硬貨があるか示せばいいだけなのに戸惑っている。

「あんな、有馬。……どっちもない場合ってどうしたいいん？」

「へっ？」

思ってもいない事態に驚き、奇妙な声が出てしまう有馬。

「どっちもないって……超能力かなにかで消したってことですか？」

「そんなアホな」

「おい、早く答えやがれ」

ささやきあう二人にやきもきした押上は荒んだ眼で睨みつける。

「えっと、じゃありラさん。一〇円のあるところを見て下さい」

リラは頷くとすーっと押上のあぐらを掻いた股の間を見つめた。

有馬はその視線の先を丁寧になぞり指差す。

するとみるみるうちに押上の顔が赤くなっていき、周りもざわめき出す。有馬も自分がいかに馬鹿な所を指差しているのかに気付き、顔が紅潮する。

「リラさん、下ネタかよ！ 真剣にやって下さい」

「だーから、あっこにあるって」

リラはそういうと立ち上がり、押上の横に膝を立てて座り、押上

の股の方に手をやって……一〇円玉を拾い有馬に見せた。

「えっ？ どういうこと」

「取るフリしてただけやで」

その答えを聞き、有馬はこの賭けの仕組みを理解した。

もし本当に硬貨を投げ、左右どちらにあるかを当てる賭けであれば、勝率は五〇％。そうなると押上が負ける可能性もある。いくら硬貨を上手に取る技術があっても、勘で答えられては意味がない。しかし青戸は一度も勝ったことがないと言っていた。つまり両方の手に硬貨は握られていなかったのだ。

座布団を敷き直したのは、硬貨を拾うためのフェイク。

股に手をやられた恥ずかしさではもちろんなく、タネがバレた悔しさと恥ずかしさで顔を赤く染める押上は、次、と声を荒げた。

「次こそは真正銘の勝負をしてやる」

そう言いながら有馬に千円札を返すと、すかさずコインを指で弾いた。

その瞬間だった。部屋のドアが開き、同時に怒声が響く。

「テメー、また賭け何かしやがって、いいかげんにしやがれ！」

「お、親父！」

押上は硬貨を慌てて掴みポケットに隠すが時すでに遅し。

「おら、説教してやる。お前らも帰りやがれ。んとに、にいちやんとねえちゃんも真面目そうな顔してやることやってんだな、今の子供はわからん。お代はいいから帰ってくれ」

有馬とリラは頷き、逃げるように部屋を出て行く不良達と一緒に店を出た。振り返り押上を呼びにいつてくれたノビている不良に軽く頭を下げた。

これで任務完了と、有馬は満足げに笑う。

きつとこの賭けでの押上の勝率はかなり高い、でないと金銭を貪り尽くされ登校拒否をする生徒が出るまでの事態にまで陥らないはずだ。それに勝ったのだから一緒に見ていた不良達に相当なインパクトを与えたに違いない。

情報を広めるのが速い不良のことだ。明日にはきつと校内中に噂が広がっているだろう。

有馬が押上の賭けに勝ったと。

有馬の思惑通り、たった一日で噂はある程度広まり、特に不良達の間では完全にと云っていい程まで広がっていた。おかげで制服を着崩した生徒から有馬はよく声をかけられる。

押上には隣のクラスなので廊下でたまにすれ違うが、不満そうな顔で睨むだけ。今すぐ勝負を仕掛けたいと思っているのだろうけど、おそらく父親から賭け事を禁止されていて手が出せないでいる、といった感じだ。

その日の昼休み、有馬は隣のクラスに向かった。押上与交渉する為に。

扉を開くと教室の窓側の一番奥で機嫌悪そうに見かけによらず小さくファンシーな弁当を口に運ぶ押上を見つけた。押上もすぐに有馬が来たことに気付き、睨みをきかせる。

「なんだよ、用があるならさっさとすませろ」

完全なる拒絶。少しでも話を逸らしたなら変わりに拳が飛ぶ、それほどの威圧感。

「賭けをしないか」

箸を置き、勢い良く立ち上がる押上。その行動にクラスの連中が一斉に目をやる。喧嘩でも始まるんじゃないかという危機感が教室中に広がる。

「喧嘩売ってんのか有馬。俺は昨日のせいですっげ怒られたんだ、親父に。だから遅刻しないで学校に来た、賭けもするなって言われた。そんな俺に向かって言う言葉か？」

唾を目一杯まき散らしながら顔を赤くして押上は怒りをぶつける。
「この賭けはお前の現金が減ることはないし他言はしない。それでもしないのか？」

「どついう意味だよ、そんなの賭けじゃねえだろ」

「俺のクラスでお前の賭けに負けた奴がいただろ、金を払えなくな

って学校に来てない奴らだ」

押上はその言葉を聞くと椅子に座り直し、有馬に座れと前の席を指差した。

「そいつらがなんだ？」

「負けて払えていない金額はいくらだ？」

未払分か、と押上は呟くと携帯電話を取り出し、メモ登録されている金額を口にした。

「えっと、青戸が二〇万」

その金額に有馬は表情を強張らせる。それに気付いた押上はふつと小さく笑った。

「青戸なんて普通だ。立石なんか四〇万だ」

「ば、バカかあいつ」

「だろ？ で、四ツ木は一〇万。俺が知ってる五組で金が払えなくなつて消えた奴はこの三人だけ間違いないか？」

有馬は小さく頷く。気持ちでは大きく力強く頷きたかったのだが、彼らの負け金額多すぎ、思い切ることができない。これでは思っていた以上にリスクが大きくなってしまふ。

しかしここで引いては何も進まない。有馬は決心し、賭けの内容を伝えた。

「賭け金だけど、俺が勝てば三人の借金をチャラにしてくれ」

「はあ？ ふざけてるとぶっ倒すぞ」

「話を最後まで聞いてくれ。で、押上が勝てば……」

有馬は大きく息を吸う。いざ言うとなるとためらってしまう。

「その三人の借金の合計、七〇万の倍を俺が払う。これでどうだ？」
普通ならおいしい話したと食いついてくるのだろうけど、押上は違った。冷静にこの賭けの裏を見抜こうとしている。

「良い話すぎるつても怖いんだよ。お前のことだ、あの姉ちゃんと手を組んで何かされそうで怖い」

「いや、それはしない。その代わりと言ってはなんだけど、あの三人を使わせてもらふ」

「あの三人？」

誰のことだ、と押上は首を傾げる。

「青戸、四ツ木、立石」

力強く有馬が言うつと、押上は逆に顔を緩め、腹を抱えて笑い始めた。

「勝手に使えよ、あんな鈍臭い奴ら。親の金パクってまで賭けして泥沼ハマるバカだぜ？ そんな奴らが助っ人でいいのかよ」

「いい、むしろあいづらがいいんだよ」

「それはどういう意味だ？」

押上は笑うのを止め、その理由を問う。なぜ登校拒否のような落ちこばれ以下でなければダメなのか。

「登校拒否してるような奴らが不良のリーダーに勝つてのは中々痛快だからだ。その見せ場は文化祭のステージ。そこで押上対俺とその三人で勝負をする。確か押上はマジックが得意なんだよな？」

「ふっ、マジックなんて大それたもんじゃねえよ。で、それがどうした？」

「押上がマジックを行って、それを俺たちができたら勝ちつてのはどうだ？ 一週間ちよつとで押上と同じことをできるようになるのがいかに難しいか、本人ならわかるだろ」

そうでもないんだよな、と意外なことを言うつと、押上は二つ折りの財布を手に取り、十円玉と千円札それぞれ机の上に置いた。

「これから折った千円札の中心に十円玉を置く」

押上の説明で理解できない有馬はまずじつくり見ることにした。

有馬の眼を用いた記憶力は早業でなければ活かせられる。千円札の上に十円を置くことに大した動体視力は求められない。

押上は千円札を横にきっちり折り、机の上に置いた。千円札が横長の三角形になる。

「このとき、緩く折ったらダメだから。それだと簡単に置けるから。で、この透かしの部分があるだろ？ 丁度札の中心だ。ここに十円玉を置く」

鋭利な角度の上に平たい物を置く。それは相当なバランス感覚が必要ではないかと思い、有馬は押上の十円玉の持ち方、それにお札と小銭の置く位置をしっかりと見据える。

しかし押上は思ったよりも雑に置き、手を離れた。

「あつ、乗った」

三角形の頂角の部分に十円玉があつさりと置かれた。

意外と簡単なものかもしれない、と有馬は長財布から千円札を取り出し、横で二つ折りをして押上と同じように置いたが、乗る気配がない。机に小銭が落ち、銅の安っぽい音がするだけだ。

「まあ、練習しろや。で、思ったんだけど両方成功した時ってどうすんだ？ 上手い下手って判断は難しいだろ。だから回数で勝負ってのはどうだ？ 先に一回でもミスすれば負け」

有馬は少し考え、それでいい、と静かに答えた。

「じゃ全員同じ種目じゃつまないだろ。俺たちは文化祭でショーをやるんだから」

「それはそうだ、一応出し物だから」

「だからあと二種類やるから見とけよ」

「ちょ、ちょい待ってくれ。さすがに覚えられないからケータイで録画してもいいか？」

手品をカメラで録画されると種明かしされる可能性が高まる。それを危惧したのか押上は少し嫌そうな顔をしたが、それもそうかと有馬の言うことに納得し、撮影を許可した。

「いちいちあいつらに見せるのも面倒だしな。でも一回しかやらない」

有馬はケータイをしっかりと構え、押上のマジックらしき物を捉える。が、その前に気になることがあったので押上が集中する前に訊ねた。

「なんで勝負は押上対四人なのに、三種目だけだ？ 四種目じゃないのか？」

すると押上はわかってないなという風に顔をしかめる。

「お前とはきつちり勝負をつけたいからだ。全種目やってどっちが上かみんなにわからせるんだよ」

そう言って、後ろのロッカーに手を伸ばしジュースの瓶を二本取り出し机の上に置いた。学校の売店では瓶ジュースは売られていないので、駄菓子屋が何かで手に入れたのだろう。

「じゃあ、やるからな」

最初の手品めいた物は、瓶の口同士を合わせ立たせた状態にし、口の間に挟んだ千円札を抜くというものだった。千円札をピンと張り、張った部分を指では素早く下に弾く。するとキレイに千円札が抜けた。

「これがまずひとつ。次が最後だけど、これがムズイんだ」

そう言々と瓶を一本持ち、机の上に百円玉を置いて、その上に斜めに立たせた。

「うお、すごい」

どういうトリックがあるのかわからないが、百円玉の上に瓶が立つ光景は、異様であり、なんとなく凄い技のように思わせる。

「この三種類で勝負だからな……で、ちょっと聞きたいんだけどよ」

「ありがとう押上。聞きたいこと？　なんだ？」

もしかしてリラのことを気に入ったから紹介しろ、と言われるのではないかとビクツとする有馬。

「あの連中を学校に連れて来れるのか？　来れなかった場合は俺の不戦勝でいいだろ、もちろん」

確かにそれは問題だ。連れてくることも難しいが、あの手品めいたことまで習得させなくてはならない。そう考えればかなり勝率は低いように思える。

「ああ、大丈夫」

それでも有馬は力強く頷く。元からその気持ちでこの賭けをしたのだから。

「あつ、お兄いた！　ちよつと弁当間違えてるでしょー！」

背後から女子の声がしたので有馬は振り向く。

そこには……忘れもしない、自販機前で唯賀に嫌味を言っていた……唯賀をいじめた張本人がいた。

好きな人が同じだけで、クラブの皆を巻き込み、他のクラスにまでやりたいようにできる力を持つ理由。それは学校一の不良の妹だから。反抗すれば兄が出てくる、それがネックとなり反抗できる者がいなかったのだろう。

「もう食ったよ。だからお前が食べ」

「うそ、サイテー」

じゃれる兄妹を背中にして有馬は教室を出た。つい出そうになった右手を左手で押さえながら。

有馬はその後、担任に文化祭のステージで登校拒否者三人と押上でマジックショーをやることを伝え、了承を得た。

「ところで先生。なぜもう一人の拒否者は呼ばなくていいんですか？」

「はあ？ 俺はそんなこと言ってないぞ、誰が言っていた？」

「えっ、それは……」

統と言おうと思ったが、彼が嘘をつくことが珍しく、個人の重要な何かを隠していそうな雰囲気だったので有馬は誤摩化すことにした。

「聞き間違えかな。すみません俺のドジです」

そう言つて有馬はそそくさと職員室を後にした。

次は教室にいる統を説得しなくてはならない。が、彼が果たして許してくれるかが一番の問題だ。

担任には賭け事を行うことを伏せても問題はないが、統に黙っておくことは難しい。彼も有馬と同じく登校拒否者を登校させる任務が課せられているのだから。

協力しあった方がコソコソとする必要もないし後腐れもない。けれど、根っからの真面目な統がこのようなことを引き受けてくれるのかはかなり不安だ。

それに加え、一年の終わりから登校拒否者している女子生徒の自宅を訪問しないといいと嘘をついた理由も気になる。

そして放課後の通学路。

有馬と統は並んで歩いていて、教室を出てからずっと二人の間には沈黙が続いている。

有馬は話を切り出したかったが、説得できなかったどうしようと言う弱気が働き、中々一言を出せない。そんな有馬を察してか、統は口を開いた。

「何か言いたいことがあるのか？ 貯めておくと体に毒だ。言ってみろ。お前が僕を誘って帰るなんて稀だからな」

そう言われるともう逃げ場ない。有馬は弱気を吹っ切る為に少し強い口調で言った。

「あいつらが学校に来ない理由がわかったんだ」

「うん？ どうせ押上と何かあったんじゃないのか」

「ど、どうしてそれを？」

有馬は眼を丸くする。

「いつもは付き合いがないのに、いきなり接するようになっていたからな。不審に思っただけ色々声掛けしたんだが、何も無いの一点張りだった。それからしばらくして登校拒否をし始めた。なら押上が一枚噛んでいると簡単に想像はつく」

「どうして押上にそれを言わない？ 俺はお前ほど正義感が強い奴を見たことがないぞ。なのにいじめは無視か？」

タバコの持ち込みや頭髪や服装には口を出さくせにもっと重要なことには背を向ける統を理解できず、怒りをぶつける。そんな有馬を統は冷めた眼で見る。

「いじめというものは複雑だ。無理矢理引っ張ってもダメで、押しでもダメだ。ただ、彼らの心の傷を理解するしか方法はない、と僕は思う。しかし彼らの気持ちを理解することなんて無理だ」

「どうして断言できる？ もしかして登校拒否をしている女子が関係してるのか」

その言葉と同時に統の顔の周りに大きなシャボン玉のような物が被い、表情を見えづらくした。またこの現象か、と有馬は小さく溜め息をつく。

口を開かない統に、有馬はおおよその予想を口にした。

「その女子を学校に来さそうとして失敗したとか……じゃないのか？」

統は口を開かない。しかし、被っているシャボン玉のような物は心臓の収縮運動のように動き始めた。正解なのか、と有馬は苦笑いを浮かべる。

熱血漢の統が何故、必死に登校拒否者の呼びかけを行わなかったのか気になっていたのだが、これではつきりした。統は恐れているのだ、過去の過ちを繰り返すことを。しかし根っからの真面目で人を放っておけない性格をしているから、訪問はするが説得を試みようとはしない。助けたいが助けられないジレンマを彼は抱えている。

それは彼のチャームポイントでもありマイナスでもある、自己啓発男のあだ名からも伺える。いつかインターフォンから登校拒否者の声が聞こえたら、自己啓発の言葉で勇気づけようとしているのだろう。それをいつでもできるよう、彼はそれを口癖にした。

同時に自分を勇気づける為に。

同じ傷を抱えているであろう統に有馬は落ち着いた声で話しかけた。

「統。俺も実はいじめられている子を助けることができなかった。つい最近だ。そいつは理不尽ないじめに心底疲れきってたみたいでさ、立ち向かうこともやめたんだ。でも今回の件はどうにかできる気がしないか？ 自業自得だから。いじめられた原因はあいつらにある。で、押上に立ち向かわせる場を用意できたんだ」

「用意？ それはどういうことだ」

シャボン玉のような物に被われた統からやっとな声がした。

「登校拒否三人組は押上与賭けをして負けたんだ。そして多額の借金を作って払えなくなっただからこなくなった。それは知ってるか？」

「いや、詳しくは知らなかったがそういう話だろうと予想はしていた」

「あいつらの場合金さえ払えばすむ問題だ。で、今日の昼休み押上に賭け話を持ちかけたんだ。押上と登校拒否三人と俺が手品を行って、先にミスした方が負け。勝てば借金はチャラ。それを文化祭のステージで行う。名目上文化祭のステージでは手品ショーってことになってるけど」

「ちよつと待て、負けた場合はどうなる。あいつのことだ、無茶を言っただに違いない」

「無茶を言ったのはこっちだ。負ければ青戸達が負けた金額の倍を払う」

倍、と統が確かめるように呟いた。

「金額は幾らだ？」

「言わなくちゃダメか？」

「……いや、いい。恐らく想像以上の額なのだろうから……」

統は大きく息を吸い、その後溜め息をつき、仕方ないと言って有馬を見据えた。

「それで彼らの将来がいい方向に進むなら万々歳だ。大成にリスクはつきものだ。だが、有馬。もし負けた場合、僕も負け金額を払わせてもらう」

「やる前から負けることを考えてどうする？」

それもそうだな、と統が笑みをこぼし、つられて有馬も笑った。

二人が向かった先は青戸の自宅だった。

有馬は青戸に立石と四ツ木を招集するように命じていたのだ。

この三人はクラスでも仲が良かったらしく、登校拒否を行い自宅にひきこもってからパソコンのチャットで連絡を取り合っているのだという。そこで有馬は青戸にチャットで呼びかけるように言ったのだけど……はたしてひきこもりが友人の呼びかけひとつで簡単に外出するのか、というところが不安だ。

チャームを押し、青戸が出てくるのを待つが反応がない。

「もしかして引きこもりスイッチをまた押してしまったか？」

「いや、そうではない」

統が指差す方向には二台の自転車。

「つてことはここには来てるんだな」

「間違いないだろう。確かめてみるか？」

頷くと同時に有馬は門を開き玄関へと進んだ。

鍵がかかっていると思われる扉は施錠されておらず、右にスライドさせると開き、脱ぎ散らかった靴が二足目につく。

「やっぱりいるな。でもどこの部屋だろな？」

このまま入っていいものかと佇んでいると、上の方から笑い声と物音がした。

「行ってみるか統？」

「ああ、クラスメイトだからそう問題にはならないだろう、それに来ると連絡していたのだから」

有馬は靴を綺麗に脱ぎ、統は散らかった二足と自分の靴を揃えてから玄関正面にある二階に続く階段を上った。

上につれ笑い声と騒ぐ声が大きくなっていく。ひきこもりのわりに随分楽しそうな様子だ。その声が一番漏れる部屋の襖を有馬は開いた。

「よう、青戸。呼び鈴鳴らしてもこないから勝手におじゃまさせてもらったぞ」

.....。

反応がなく、テレビゲームをしている三人はさっきまでの和やかな空気を氷結させ、表情もそのままで振り返った。ゲームの派手な爆発音が耳につく。

立石と四ツ木は顔を合わせ、どうということだとアイコンタクトをとり、この状況を互いに理解していないことを理解し、ならば青戸か、と顔を向けた。

「ごめん、言ってなかったよね」

笑って誤摩化そうとする青戸。二人は立ち上がり、猛然と襲いかかった。

「どういうことだよ！ お前が新作のゲーム買ったって言うから来たのに！」

叫ぶ立石。

「なんで委員長と……」

四ツ木は言いかけて有馬の顔を見つめる。それに気付いた有馬は口を開く。

「有馬だ」

「有馬がいるんだよ！ 騙したのか青戸！」

「そ、そういうわけじゃないんだけど」

「……どういうわけだ！」

動揺する青戸を捲し立てる二人。止めないといつまで経っても話が進まないと思い、統が青戸と二人の間に割って入る。

「少しは落ち着け。僕たちが来ただけで、まだ何をしようともしてないではないか」

いつも通りの真剣な表情で説得する統に、二人はそれもそうかと納得し座り直した。

「では有馬から僕たちがここに来た理由を説明してもらおう」

有馬は襖から一歩進み、三人の前であぐらを掻いた。

「よろしく、ちゃんと知らないようだから名乗っておく、有馬だ。で、なんで俺たちがお前らと呼んだのかというと——」

賭けで負ければ有馬が負債の倍を払う。という部分を除き、押上との勝負内容を有馬は告げた。三人は何も言わず話を聞いていたが、みるみるうちに顔色が青白く変わっていくのがわかった。恐らく口を開けないのだろう。唐突な出来事に。

「な、いい話したろ？　これでお前らの借金はなくなるし、学校にも行ける」

三人の表情を柔らかくしようと気遣い有馬は明るく声をかけたのだが、

「バカか！　ネットサーフィンしかできない俺になんてことを」と自虐して言い返すのは立石。

「器用な真似なんてできないぞ？。まつり縫いもできないのに！」とわけのわからぬ例えを出したのは四ツ木。

「文化祭のステージで……そんな目立ちすぎだよ」と行う前から緊張する青戸。

口々に文句を言い、初めから諦めにかかっている三人を見てため息をつく有馬。幸先不安どころの話じゃない。すると隣にいた統が手を二、三度たたき、三人を黙らせた。

「まだ手品を行ったこともないのに諦めてどうする。もしかするとお前達には新しい可能性が秘められているのかもしれないではないか。がんばれ。諦めたらその時点で——」

「その先は言わせない」

漫画の名台詞を吐こうとした統を有馬が割って入り止めた。理由は鬱陶しいからだ。

「まあ、こんなありきたりなことを統は言ってるけど、それが重要だと思う。これがその手品だ。一度見てくれ。それで納得いかなかったら断ってくれ」

三人は顔を見合わせゆつくりと頷いた。

「じゃあ、まずはこの技だ」

有馬は押上の手品もどきの動画を再生し、三人の中央に携帯を置いた。三人は食い入るように画面を見つめる。

録画をした順に動画を再生していく。

二本の瓶の口部分を合わせて立て、その間に入れた千円札を抜く技。そして百円玉の上に瓶を斜めに立てる技。と、ここまで再生して有馬は思い出した。

「この動画は後で青戸に送るから、青戸は二人に送ってくれ。で、あと一種類だけど……撮るの忘れた」

最初に見せてくれた技を録画し忘れたのだ。

有馬は口で説明するより実践した方が早いと判断し、財布から千円札と十円玉を取り出した。

「すまないが見ていてくれ。成功はできないけど要領はこんな感じだから。この千円札を横で真ん中を折って置いて、この透かし部分に十円玉を置く」

口で言いながら手を動かすが、その通りにはならない。十円玉は音を立てて転がる。

「どういうことをするかはわかった。でも誰がどれを担当するかって結構問題じゃね？ 得意不得意ってあるだろ」

立石の言う通り人選が問題だ。たった十日で押上より上手にできるようにならないとなると、適正が重要だ。

「そうだな、俺は全部やるから問題ないけど……こういうのはどうだ？ 一応全部練習して、明後日またここで見せ合うんだ。そして誰がどの種目に適しているか判断する。それでいいか？」

「そうだな、同じ練習ばかりしていると飽きがくるだろうから」
有馬の提案を統も受け入れる。三人もそれなりにやる気になったように顔つきが若干凛々しくなったように思える。

「ではまた明後日、青戸の自宅に集合。がんばって練習しよう。何ができるかではなく、何をすべきなのか、そういう意識が必要だ」
力強く統が自己啓発本の受け売りを口にし、その場をキレイにまとめた。

そして一日が経ち、有馬と統は一昨日と同じ青戸家への道のりを歩いていた。

「大丈夫か統？ 顔色悪いけど」

有馬が心配するのも無理はない。眼の回りには濃い紫のくまができている。いつもは真面目に授業に取り組む姿勢もこの二日間には総崩れで、先生に注意されない程度にノートをとり、それ以外はボーッと黒板を眺めている。なんだか自分の姿を見せられているような気分になり、有馬は授業中に何度もため息をついた。

そんな統だが、いつもの空元気な声はどこへやら、ボソツと大丈夫と聞こえるか聞こえないかギリギリの音量で答える。

「おいおい、まさか学校以外は不眠不休で手品の練習してたんじゃないだろうな？」

統は小さく頷く。冗談で言ったことが事実だとは。有馬の二の腕に鳥肌が立つ。

「僕は賭けに参加できない。だからせめてコツでも掴んで教えてやるつかと思って」

有馬は彼の真面目さに驚き、感銘を受けた。いつもは人の為に何かをしようとする彼を小馬鹿にしていたところがあつたが、ここまですで真剣だと笑えない。逆に尊敬してしまう。

「大丈夫か？ 風邪でもひいてあいつらに感染したら元も子もないからなあ」

「ああ、大丈夫。それより僕はお前の方が心配だ」

唐突に意味深なことを言う統。有馬の体調は一昨日と何も変わらず至って良好。なぜそんなことを言うのかと不思議そうな目で有馬は統を見る。

すると統は親指で後ろを指した。

「有馬、ずっと尾行されてるぞ。ストーカーか？ 一昨日もちらちらと見かけたのだが、今日はずっと堂々と後ろを着いて来ている」
もしかして。悪い予感しかない有馬はゆっくりとその指先を辿

った。すると延長線上で彼女と眼が合い、笑いかけられる。

「ちよつと先に行つてくれ。すぐ戻る」

「それはいいが、彼女は誰だ？」

「俺の友人だ」

適当な嘘をついてゆつたりと歩くりラに有馬は駆け寄り、すぐさま声を荒げる。

「何してんですかりラさん！ 俺に付きまとう時はちゃんと姿を消して下さい。周りから怪しまれるのはりラさんですよ」

「あつれ？ 消えてへんかったん？ ごめんごめん、ミスったわ」
いつもよりへらへら感が三割増しなのでわざとじゃないか、と怪しむ有馬だが、もしかすると青戸のことが気がかりだったから姿を現したのではないかと勘ぐり、青戸の家にりラを誘うことにした。
「いきなり行つてもええのかな？」

ひきこもりと言ふ連中は人見知りをする可能性が高い。しかし今日は鍛えた技を見せ合ふ日だ。本番は何百人の視線を集めた中で披露するのだから、知らない人が一人見ているだけで失敗しているようではダメだ。そう有馬は判断し、りラを同行させることにした。

青戸の家に着きチャイムを鳴らすが、二日前と同じように返事がない。

先に統が向かっているのだから家に上がってもかまわないだろうと、有馬はりラを連れ、門をくぐつた。玄関の扉を開くと統の靴がキレイにそろつて並べられていたので、おじゃましますと一言、りラも続けて言つて二階に向かう。

階段を上り終え、二階に着いた瞬間、統の声が聞こえた。それは談笑の感じではなく、強い怒り。

「どうしたんかな？」

心配そうにりラは有馬に訊ねるが、答えている場合ではないと有馬は駆け足で部屋に向かい、襖を開いた。

そこにはゲーム機のコンセントを引き抜き、叩き付ける統の姿が

あつた。

「おい、統。何してんだよ」

たまらず有馬も怒声を浴びせる。瞬間、ビクツと肩が震えた。

「有馬。すまん」

正氣に戻ったのか、統は暗い顔をして部屋を出て行こうと有馬の横をすれ違う。

「ちよつと待て。何があつた？」

「すまない、今は説明したい気分ではない」

肩に伸びる有馬の手を統は弾き、足早に階段を降りて行く。

熱血漢の統だが、人に対し怒りをぶつけることは少ない。その彼が尋常じゃない感情の昂りを見せている。

「お前ら、統に何した？ リラさんは統を見失わない程度に距離を保って追いかけて」

「ほいよ」

有馬の指示に従いリラは部屋を出て行く。そして有馬は三人を左から順に見据えた。

有馬の瞳からはまだ変化は伺えない。けれど三人は酷くおびえた表情をしている。

「説明してくれ。あいつがあんなに怒るところは初めて見た」

「い、息抜きに……ゲーム……してたんだよ。ただ、それだけだよ」
恐怖しているのか、とぎれとぎれに説明をする青戸。

「なるほどね」

有馬はそう言つて背中を向ける。

「また明日来るから、そんなときまでに成果見せれるようにがんばれ」
文句のひとつくらい言つてやりたい有馬だったが適当に挨拶をすませる。今は彼らよりも統が心配なので後を追う。

家を出ると、有馬の右手に静電気が走った。もしかしてリラが誘導しているのかも知れないと思い、有馬は右に曲がった。そして曲がり角に出るたび、額、左手、右手のどれかに静電気が伝った。額に静電気が伝った場合、どこを行けばいいのか少し迷ったが、正面

だろうと判断し、十字路を突っ切る。

一五分程駆け足で進むと、河川敷に辿り着いた。左右を見渡し、リラが統がいはいか確認する。

緑の芝生が広がる広場は橙の夕陽に色づき、吹く風は夜を運び少し冷たい。川沿いの道路ではランニングするおじいさんや犬の散歩をする子供。帰路を指し自転車漕ぐサラリーマンや学生。色々な人達が行き交う。

それらを眼で追う有馬は少し先にある誰もいない野球のグラウンドのベンチに座る統らしき人を見かけた。その近くではバックネットに隠れながら統の様子を伺い、有馬の方に手を振るリラの姿が見える。器用な奴だな、と有馬は笑みを浮かべながらリラに駆け寄る。「有馬、あそこにおるで」

そう言つてリラはベンチを指差す。

「ええ、リラさんのお陰です。ところで力のコントロールが上手ですね。静電気なんて微力を上手に使うなんて」

「あたしは大か小しか調整できへんからね」

苦笑いを浮かべ、舌を出すリラ。

「それより早く行つてあげて。見た感じ落ち込んでるから」

「ええ、そうですね。結構やばい状態かも」

有馬の眼には特殊な瞳にはまた映っていた。統の顔の周りにシャボン玉のような物が被い、しかも今回は三重にも四重にもされている。

「このままじゃダークサイドに落ちるかもな」

「どういう意味？」

リラの質問を笑つてごまかし、有馬は統の元に向かい、ベンチの空いた部分に腰を降ろした。

「どうした？ 統らしくないじゃないか。感情的になるなんて」

頂垂れた統は頭を抱え、大きく息をついてから口を開いた。

「すまない、また過ちを犯してしまった。しかしあいつらもあいつらだ」

そう言つて統は右手をぐつと握る。

「再び学校に行ける可能性があるというのに、ろくに努力もせず、諦めよつて。あいつら、僕が来たときテレビゲームをしていたんだぞつ。練習は？」と訊いたらあんなのできるわけないと言つて、更に頑張るくらいならこうやつて遊んでる方がいいと言つたんだ。あの馬鹿共」

「落ち着け、統」

怒りで体を震わせる統は、その声を聞いて徐々に振動を抑えていく。

「悪い。ただ可能性が残つていふと言ふのにそれを無下にするのが許せなくて」

「あいつらにはあいつらなりの生き方というか考えがあるんだよ、良い悪い関係なく。それを变えるのは難しいさ。でも变えるのに一週間とちよつとしかないんだから、俺たちがあいつらを理解しようとしないと駄目だろ？」

統は大きく息を吐き、川の方に視線を向けた。

「わかつているが……わかつてないんだよ」

「もしかしてもう一人の登校拒否の子がそうさせてるのか？」

瞬間、統を被つていたシャボン玉のような物が、すーつと幕を下ろすように上から下にひとつ消えていった。

「そうだろうな。有馬にはいつか事情を説明しなくてはと思つていたのだが、今の僕の問題では残念ながら無理だ。また……明日にでも話す、すまないな」

そう言つと統はゆっくりと立ち上がった。

「帰るのか？ なら一緒に」

「考え事したいんだ。一人で帰らしてくれ」

優しい口調に似合わない重く切ない背中を見て、有馬はそれ以上声をかけることができなかった。いつもの有り余る自信をこの日の為に貯めておけよ、と有馬はため息をつき、夕陽を眺めた。視線の端に映る川が橙にきらめく。

この問題がまだ始まっていないことに有馬は気付き、更に深くため息をつく。すると後ろから幸せが逃げるで、とありきたりなアドバースをする声が聞こえたので、再び深いため息をついた。

それから一日が経ったの昼休み。有馬は二年棟に向かっていた。二日ぶりに登校したと和勝からメールが入ったからだ。いつもこちらの教室まで来てもらっているから、たまには迎えに行こうと有馬は気遣ったのだ。

しかしそんな気遣いも虚しく、教室に入り和勝の机を見ると姿が見えない。教室内を見渡してもいない。行き違ったのかな？ と思いつつも有馬は近くにいた男子生徒に声をかけた。

「和勝ってどこに行ったか知ってる？」

白ご飯を口に運ぼうとしていたその生徒は、弁当にご飯を戻し、少し面倒そうな顔で答えた。

「あいつなら多分自販機ですよ。休憩時間には絶対寄りますから」

「そうなのか？ ありがとう」

昼休みに絶対に寄るのならまだ理解できるのだが、休憩時間ごとに自販機に寄るなんて暇の遊び方を間違えているだろうと、首を傾げながら有馬は二年棟の自販機に向かった。

自販機を見ると、和勝の姿が見えた。それが有馬の瞳に映った瞬間、運動会の全体練習日の休憩時間、自販機の横にもたれて膨れっ面を浮かべていた唯賀の姿を思い出した。

もしかすると唯賀は休憩時間になると和勝が自販機に来ると知っていたのかもしれない。そこで時間があれば和勝を待ち、声もかけられずそつぱを向く唯賀の姿を有馬は簡単に想像でき、少し表情が緩む。

有馬は自販機のおつり取出口に手を伸ばす和勝に声をかけた。

「よう、和勝」

突然声をかけられ驚いたのか、和勝は素早く有馬の方を向き、目を大きく見開く。

「有馬さんですか。いつもこちらから向かっていたので、そちらか

ら来ると思つてませんでした。少し驚きです」

「いつも来てもらつて悪いと思つたから」

「そんな気遣いはいらないですよ」

やんわりと断る和勝の手にはジューズが持たれていない。おつりの取出し口に手を入れていたのだから、購入したと思つたのだが違つたようだ。

「ジューズ買わなかったのか？ 何か買つたと思つたんだけど」

「ええ、相変わらず良い物がありませんから、結局入れたお金を戻しました」

「じゃあなんで休み時間ごとに自販機にくるんだ？ お前のクラスの奴が言つてたけど」

「そんなの暇つぶしに決まつてるじゃないですか。さあ、早く中庭に行きましょう」

和勝は明るい表情をして、二年棟の出入り口へと駆けて行つた。

中庭の木陰で芝生の上に座り、弁当箱を広げる有馬と和勝のいつもと変わらない昼休みの光景。しかし今日はその光景に一人足りない。

「あれ？ 統さんはどうしたんですか」

コンビ二弁当のからあげをつまみながら和勝は訊ねた。

有馬が呼ばなくても時間が経てばこの場所に姿を現すはずの統の姿が見えないことを気にしたのである。

「あいつは風邪をひいて休んでるよ」

「へえ、統さんでも風邪をひくんですね」

和勝の言葉からは嫌味は感じられず、ただ本当にびっくりしたという感じが伝わる。

有馬は弁当を平らげお茶を飲みのを潤してから、和勝に声をかけた。

「他に異世界の情報つて手に入つた？」

まだ食べている途中だった和勝だが、箸を置き、瞳を輝かせ有馬

を見つめた。

「待ってましたよ、その言葉」

そう言ってポケットからメモ帳を取り出し、書かれた内容を読み上げ始めた。

「これは結構重大なポイントですよ。なんと異世界人は四九日連続でこの世界にいることが不可能だそうです」

四九日。それは異世界人がこちらの世界の人間の命を狙う期間と同じだ。

「どうして無理なんだ？」

「簡単なことです。異世界とこの世界とは存在が違います。異世界には超能力があり、こちらの世界にもあると言えはありますが、異世界と比べれば微少で微力です。なぜ異世界人は異世界と同じようにこちらの世界で能力を供給できないのかという理由は宇宙にあります。原子を造り、数多輝く星達を創造した宇宙が、異世界の能力を受け入れないのです。同一の世界にしない為に」

「えっ、宇宙って神様なの？」

その質問に和勝は笑って答える。

「いえ、これは書物に書いてあった異世界の話ですから、僕らの世界と同じにはいきませんよ。確かに有馬さんの言う通り、異世界人は宇宙が存在する全てを創造したと考えていますので、僕らの世界で言う神様と同じように捉えていると言っても間違いじゃないでしょうね」

そう言って和勝は次のページをめくる。

「簡単に言えば、あちらの世界が陸で、こちらの世界が海だと認識すればいいですね。あちらの世界の人は肺呼吸しかできないので、息が続くまでしか水中にしかいられない。そう考えて下さい」

「おお、なるほどね。その息ができる期間が四九日と言うわけか」「そうです。でも多少前後します。能力を使ったか使っていないかで。それは水中で泳ぐか潜るだけかの違いと同じですね」

水中で体力を使えば使う程、息は続かなくなる。それと同様、異

世界人がこちらで能力を使えば使う程こちらの世界にいらなくなる、そういう理論だ。

「能力が使えるうちに異世界人は異世界に帰らないと帰れなくなります」

「どうしてだ？ 時空の穴的な物が空いているんだからそこに入れればいいだけだろ？」

「なら有馬さんはそこに入れると思いますか？」

「そうなると大問題だよな」

その通り、と和勝は頷く。

「なので、穴をあけた人がこちらの世界の人間を入れないようにフィルターをかけるのです。そのフィルターを通る基準が超能力を持つかどうか。なのでこちらの世界で能力を使いきってしまった方は、異世界に戻って能力の補充をすることもできない、永久に無能力者」

「ただの人間ってことか」

「ええ、ただの人間があちらの世界に行くことなどできませんので、一生こちらの世界の住人になります」

その言葉に有馬の背筋が凍った。

リラはこちらの世界にきてそろそろ四〇日が経過する。その間に様々な能力を使ってきたのでかなり消費されているはずだ。そうすると能力を微弱になり有馬の命を救うことが難しくなる。それだけではなく、リラ自身も故郷へ帰れなくなる可能性だってある。

有馬は自分の為にリラが犠牲になるのではないかと不安になり、必死な思いでどこか抜け道がないかと考えた。

「フィルターがかかっていない場合ってのはないのか、密入国者の的な感じで」

「密入国、つまり密入界者がいることは書物に書いていました。が、こちらの世界に行くには異世界の偉い方の許可が必要となるのです。その許可を得ないで、穴をあけた方だけに承諾を得てこちらの世界にくる、と言う方法しか書物には書かれていないので、おそらく穴は厳重に管理されているでしょう。なのでフィルターがない場所

はないかと思われます」

「そ、そうか」

有馬は力なく答え、青空を見つめた。

自分が死ぬかりらが帰れなくなるか。その選択肢は酷く虚しい物で、どちらも選びたくはないが、有馬は何があっても自分の命は選択しないでいようと誓った。

俺が死んでも立石と四ツ木と青戸の借金をリラなら、別の方法でどうにかしてくれるだろうから。

放課後、有馬とリラは昨日の約束通り、青戸の部屋にいた。

しかし部屋の空気はどんよりし、さあやるぞ、という活気が微塵も感じられない。

中だるみならまだ理解はできるが、今日是有馬を含めた四人の合同練習初日だ。緊張をしているというのならまだわかるが、彼らは明らかにそうではない。表情が物語っている。

「なあ、どうしてそんな不貞腐れてるんだ、一昨日は結構やる気だったろ？」

彼らが何故不機嫌なのかある程度の察しはついていたが、コミュニケーションをとることも必要だと有馬は思い、わざと訊ねる。

立石と四ツ木はムスツとしたまま答えなかったが、青戸は有馬とここ数日の関わりがあるからか口を開いた。

「僕らはちゃんと練習してたんだ。でも中々上達しなくて……だから息抜きにゲームをすることにしたんだけど、そこでタイミング良く委員長がきて文句言っただよ。あいつ自分は参加しないからこの手品がどれだけ難しいかわかんないんだよ」

「そうそう、あいつは熱血教育実習生だよ」

四ツ木はわけのわからぬ例えをして話を続ける。

「俺たちのことなんにも考えてないんだよ委員長は。自分の手柄だけ考えて。じゃないとあんな頭ごなしに怒ったりしねー」

その言葉を聞いて有馬はつい笑ってしまう。それが気に食わない

立石は有馬をキツく睨みつけた。

「何だよ笑いやがって。こっちはマジム力ついてんだぞ。しかも委員長来てないしさ、気まずいから逃げたのか」

「いやいや、あまりにもお前らが上辺だけしか見れてないからさ。笑ってしまっただ」

「どういう意味だ？」

「青戸はさっき、統は手品をしないから気持ちが悪かんないと言っただ。四ツ木は自分のことしか考えてないと言っただ。立石は統が昨日のことを気にして来ていないと言っただ。それがわかってないって言うてんだよ」

笑みを消し、冷めた目で有馬は三人を見回した。

「確かにあいつが怒鳴ったのは間違いだっと思う。でもさ、わかってやってくれよ。統はステージに出れない。ならどうやってお前らのためになるうかって考えて、その結果寝ないで手品の練習をしてたんだ。少しでもコツを掴んでそれをお前に伝えれたらって……そんなこと自分の利益しか考えてない奴ができるわけないだろ。そのお陰で今日は寝込んだんだ、滅多に風邪なんてひかないのに。これでもあいつの怒りを理解できないか？ ゲームをできる元氣があるなら、練習しろ。本当に疲れてるのなら体を休めればいいんだ。違うか？」

黙る三人を見渡し、感情を抑えきれなかったことを若干後悔したが、そのマイナス分を取り戻そうと有馬は明るく声をかけた。

「黙ってるってことは反省したんだよな。ならあいつが風邪を治らせて、次来たときに成功できるよう練習しよう。今日は助っ人も呼んだんだからさ」

「そや、あたしも手伝うからがんばろっ」

中々すぐに空気が変わることはなかったが、青戸と立石と四ツ木は携帯の動画を観つつ指先を動かすことで、徐々に良い方向に変わっていった。

しかし、それでも時間が経てばテンションは下がる。

「気合いや、気合い。今が九九回目で、次の百回目には成功するかもせえへんやろ」

リラが皆の気持ちを高めようと元気づけるが、立石が百円の上に瓶を乗せようとして倒れる所を見て、あーっと残念そうな声を上げる。

「リラさん、いちいちうるさい。集中切れちゃいますよ」

「もう切れてるやん」

あっさりと言ってはならないことを言うリラ。確かにその通りだが、口に出されると休憩時間を求める空気になってしまう。空は月明りを照らし始めたので尚更だ。

これ以上集中を切らした状態でだらだら手を動かしても疲れるだけだと有馬は判断し、手を止め誰がどの手品を担当するか決めることにした。

「もう今日はこの辺でいいだろ。じゃあ立石、四ツ木、青戸。どの手品をしたい？」

ジュースの瓶を手から離し、立石は困った表情で答える。

「どれって言われてもな、成功したのはお札の上に十円玉置くやつくらいだ」

「俺はそれができなかったな。どれも成功できてないけど、強いて言えば瓶にお札を抜く奴はできそうな気がする」

四ツ木がそう言うと言わねば青戸も声を上げる。

「僕もそれできるよ。でも……四ツ木くんは百円の上に瓶を載せるのは無理だよな」

「ああ、何もしてなくても手が震えるからな」

「じゃあ決まったな。これでしばらく練習しよう。あまりに無理なら交代もアリで」

目的がハッキリした為か、三人はまた瞳に光が灯されたように思える。すると立石が口を開いた。

「思っただけど、これってコツとか技術もあるんだろうけど、なにが事前に準備とか成功する秘訣みたいなのがあるんじゃない？ ちょ

つと検索してみるわ」

立石は青戸のデスクトップ型のパソコンの電源を入れ、インターネットを開いた。

有馬達はパソコンを囲うようにして画面を見つめる。

「なんて検索すればいいかな？ まあ小技、千円札、十円玉で検索してみよ」

ブラインドタッチで言葉と同時に入力する立石。しかし表示されるのは表計算ソフトの便利な扱い方ばかり。違うか、と呟き、次は小技の部分を手品に変える。

すると最初の項目に『千円札の上にのる十円玉』とそれらしきものが表示された。素早くマウスを扱いダブルクリック。

「なーんだ、これもハズレかよ」

表示されたのは押上がやっていた横に折って、中央に乗せる方法ではなく、縦で中央に折り、徐々に開いて千円札を立たせた状態で十円玉を乗せる方法だった。たしかにこの方法も凄いが、問題はお札の両端を指で握られているところから、これは手品の類ではなく、科学の類なのだろうと思わせる。

技が似ているだけに、中々ウィンドウを戻すことはせずに、何かヒントはないか皆画面を見つめる。

すると有馬はある点に気付いた。

「二つ折り……。お前らの財布で二つ折りの奴っている？」

「あつ、俺だ」

返事をしたのは立石だった。そして有馬は確信した。

「やっぱりな。押上も二つ折りで、この中で比較的成功率が高い立石も二つ折りの財布だった」

そこまで言えばわかるだろう、と有馬は立石に目をやる。

「もしかして札を二つ折りにすることが成功の秘訣？」

有馬が頷くと四ツ木がなるほど、と声をあげた。

「支える物が一八〇度だと乗せることは難しいけど、少しでも角度がズレれば乗せやすい」

「ああ、その通りだ。極端だけど九〇度の方が乗せやすいだろう？
このことに気付かせないでさり気なく二つ折りの財布から、きつちり中央で折ったお札を取り出した押上のテクニクもあるんだけどな」

「やつぱりコツよりもやり方なんだな。じゃあ瓶に挟んだ千円札の抜き取り方も探そうぜ」

キーボードの軽快な音を響かせ、立石は様々なワードの組み合わせで検索する。しかし中々めばしい検索結果が表示されない。

「なあなあ、押上の店の名前ってなんだっけ？」

思いつくキーワードが底をついたのか、新たなワードを求め立石は有馬に訊ねる。

「たしか、喫茶プッシュアップだ」

「ネーミングが安直だな」

軽く笑って立石は『喫茶プッシュアップ 東京』と入力した。

「おっ、でたでた」

検索結果には喫茶プッシュアップについての情報がたくさん表示された。店の評価やブログでの感想などなど。

「これでどうやって探すんだ？」

「まず押上のやっていることがどういう技なのか調べなきゃ駄目だろ？ でも手品じゃないからどんなジャンルかわからない。だからこの日記やら評価を見て、もし客の中で押上がやっていた手品もどきについて詳しい人がいれば色々書いてくれるはずだ。それを探す」

一〇分程ブログなどを見て回ったが、めばしい内容は見つからず、仕方なく店のホームページをクリックすることにした。

「店のサイトなんてメニューと定休日くらいだろうな」

立石は嘆息しながらも表示されたページを眺める。

太ペンで書かれたような何のデザイン性もない店名がページの真ん中にあり、その周りを黄色い楕円状の物がいくつか置かれ、その中に文字が書かれている。ニュース、メニュー、営業時間、アクセス、問い合わせとここまでは普通のサイトメニューだ。しかし最後

の項目が普通の喫茶店と違っていた。

「スナック芸？」

喫茶店なのにスナック？ その矛盾に一同は（リラを除く）首を傾げる。

興味が惹かれ、クリックしてみると、

「おお、ビンゴ！ あの瓶の千円札抜く技のつてるぞ」

そこには数々のスナック芸と呼ばれる物が絵や動画で紹介されていた。その中には押上から教えられた全ての技が載っていた。そしてやり方も。

瓶から千円札を抜き取る方法は、瓶が倒れない程度に垂れた千円札を指で持ち張ることが大切。百円玉の上に瓶を乗せる方法は、練習あるのみだが、感覚として置ける位置を掴めるはずなので、その感覚を研ぎすませることが大切。とある。そして、

「なになに、スナック芸とは小道具を用いて披露する芸。ただし手品とは違いタネも仕掛けもない。だってさ」

さらにサイトを見ていくと、あの店はどうやら七時以降はスナックに変わるようだ。そしてその時間になると、押上の父であるマスターが、お客にこのスナック芸を披露するらしい。だから押上は様々なスナック芸を覚えていたのだ。

「なるほどね、携帯じゃ画面が小さいからわかりにくかったけど、パソコンだとわかりやすい」

立石がそう言うのと二人は頷き、URLをチャット先に送るように言った。

「これでどうにかなりそうだな、もしつまずいてもお前らの得意なネットでやり方を探して反復練習を行えば大丈夫だろうし。じゃあそろそろ帰るわ、また明日来るから」

三人は適当に手を振り有馬とリラを見送った。リラもまたね、と手を振る。

部屋を出るとリラが強く有馬の手を握った。その行為に驚き、とっさに離せよと口に出そうになったが、リラの不安そうな表情を見

ると、言える訳がなかった。

「どうしたんですか、リラさん？」

「うん、最近ホンマにギリギリで、近くにおれる時はなるべくこうやっておきたくて」

有馬の命を救えるか救えないかの狭間の状況はリラを不安にさせる。傷跡が付く度にその思いは強まっていく。

もしあの三人に見つかったらどう対処すればいいかわからない有馬は、廊下を早歩きで進み家を出た。

「いきなりですけど、リラさんはここに正式な手続きを踏んできたんですか？」

「全然。あつちとこつちの穴を空ける人が知り合いやったから手伝ってもらったねん」

ということは、リラは和勝が言っていた密入界者のような存在に当たるわけだ。

「他にはそういう人いないんですか？」

「おるみたいやで、組織で。噂にしか聞いたことないけど、その人らはあつちとこつちをつなぐ人に組織ってわからせる為に、こつちの世界にしかない物を見せるらしい」

話すうちに少しずつリラの表情はいつものように明るく和らいでいく。

「それって何か知ってます？」

「知らん。ありすぎてわかりません。でもなんでそんなこと訊くん？」

有馬はうつむき、少しだけリラの手を強く握った。

「リラさん最近また傷が増えてるから、密入界してる人達に手伝ってもらってもいいんじゃないかって思いました」

本当は言いたかった。力が消耗されているから、もう僕のことを放っておいて下さい。今ならまだ間に合うと。しかし有馬にそこまでの勇気はなかった。

「あたしやったら大丈夫。まだ元気やし、あと一週間くらいやる？」

安心して有馬」

健気に微笑むリラを見ると、本当に大丈夫そうな気がしてくるから不思議だ。

「すなつく芸？ あたしの能力でちよちよいのちよいやのに」

本当ですか？ と疑うような目をして笑いかける有馬。

「ホンマよ、ほーんーまっ」

言いながらリラは有馬の手を握りながら大きく前後に振る。

「あんまり無理しないで下さいよ」

楽しげなりラとは対照的に、悲しげな表情で、秋の夜風に吹かれて消えそうなくらい小さな声で有馬は言った。

順調に練習を重ね、有馬もリラのお陰で命の危険に陥ることなく日が経ち、月曜日。

統の風邪が治り、放課後は有馬とリラと統の三人で青戸の家に向かうことにした。家の前に来ると母親がいたので取り合ってもらい、三人は家の中に入り、青戸の部屋に向かう。

階段を上りながら、不安そうな声で統は呟いた。

「僕は嫌われていないだろうか。あんなことを言ってしまったて……」

「心配するな。あいつらは結構お前にありがたみを感じていたぞ。週に何度か顔を見せてくれたこともうれしがっていたし」

「それならいいのだが」

先頭を行くリラがトントントンと跳ねるように階段を上り、青戸の部屋の前まで行く。

扉に手をかけようとした瞬間、統が小さな声で待ってくれと、リラを制止させた。

「どうしたん？」

「いや、僕の名前が聞こえた」

耳を澄ます三人。しかし、澄ますまでもなく、扉の向こうから騒がしいひきこもり三人の声が聞こえてきた。

「委員長つておせっかいだよな」

「ふんだガムみたいにしつけないな」

「温かいって言うより暑苦しいよ」

楽しそうに統を貶す声が飛び交う。どういふことだと驚くリラと有馬。その後ろにいた統は素早く階段を下りこの場から逃げ出した。「ちよつと、リラさん、あいつ追うから待ってて」

「えっ、有馬。ちよつと離れたら危ないって！」

リラの呼びかけに応じず、有馬は必死に階段を下り、統を追って行く。

これはどういうことかと腹が立ったリラは襖を勢い良く開けた。
瞬間三人の和やかな声が重なって耳に届いた。

「でもいい奴だよな」

何とタイミングの悪いことか。リラは頭を抱え、すぐさま踵を返し有馬と統を追った。

「ちょっと待ってくれ統！ あいつらはそんなこと言う奴じゃない、本当に感謝してるんだって」

二〇メートル程先を走る統をなんとか引き止めようと走りながら有馬は呼びかける。

「あいつらはお前らが来るのを待ってたんだよ！」

その言葉でやっと統は立ち止まった。息を切らしながら有馬は統の肩に触れる。瞬間頬に強い衝撃が走り、道の端に有馬は吹っ飛んだ。

「いきなり殴るなよ」

頬を抑えながら、統を睨みつける有馬。

「もうお前の優しさなんていらない。やめてくれ。どうせ有馬も皆と同じように馬鹿にしてるんだろ？」

「落ち着けて。だか……」

有馬は思わず息を止めてしまった。

統の周りを被うシャボン玉のようなものが瞬間的に大きくなり、周囲を、有馬を被う。だがこれは幻だと意識し直し、有馬は肺に空気を入れる。

この状況はまずい、統の感情が抑えきれず暴発しそうになっている。けれど有馬は統にかける言葉など見つからなかった。いい加減なことを言つと余計に傷が広がる。

戸惑う有馬にかまわず、うつむきながら涙を流す統はゆっくりと言葉を紡ぎ始めた。

「うつとうつしい、おせっかい、暑苦しい。何度も言われてきた。でも消極的だと、迷っていると手遅れになるんだ。彼女のように。殻

に閉じこもるともう自分で開くこともできない、彼女の姿を見ることなんてできない。なら傷が浅いうちに手を伸ばさなければならぬ。それを僕は……何が悪い？」

その問いかけに有馬は冷たい声で答えた。

「お前の生き方はお前で決める、悪いも良いもないだろ？　いつもそうやってきたんじゃないのか？」

返事はなく、統は駅の方に駆けて行った。有馬は追うをせずその背中を目で追った。

「ありまー。有馬っ！」

後ろから声がしたので振り返ると、かなりのスピードでリラが近づいていた。

ぴたつと有馬の前で止まり、よかったー、と言漏らす。

「あんまりあたしから離れらんといてっつて」

「すみません、ちよつと状況が状況なだけに」

「で、あの三人やけど、別に統の文句やなかったみたい」

「やっぱりそうですか」

それを聞いて再び有馬は駅の方に視線をやる。

「どうしたん有馬？」

「いや、ひきこもりより厄介かも、と思ひまして」

その日から有馬は毎晩統に一通のメールを送った。

『何をするかじゃない、何ができるのか』

けれど返信はなかった。もちろん電話もない。さすがに文化祭があるため登校はしたが、有馬が声をかけても返事もせず視線すら向けない有様だった。そんな最悪の状態の統に文化祭前日、有馬は最後の望みを賭けてメールを送った。

『明日が本番だ。あいつらに一言でいいから何か言っちゃってくれ』

文化祭当日。中学校三年生は昼休憩を終え、体育館に集合した。有馬の通う中学校の文化祭は、飲食物の出店や創作物の展示とい

った類の物はなく、演劇や合唱、吹奏楽といった文化発表会と言った方が似つかわしい、少し堅苦しい文化祭となっている。それは私立だからという理由もあるのだろう。

午前中に一年と二年の文化祭を終わらせ、午後の二時間を使って三年生の一〇クラスの芸を観賞する。そこに二回の休憩が入り、休憩時間に参加者自由の枠が設けられる。

今回有馬が担当したのはその枠の後の方。つまり最後の休憩中に押上との対決が行われる。

父兄や保護者が見守る中、緊張し普段の力を出せない者、成功し涙を浮かべる者、それぞれが芸術を表現し、ついに最後の休憩時間がきた。

有馬は文化委員に呼び出され準備室に案内される。

扉を開くと薄明かりの中、青戸と立石と四ツ木が緊張の面持ちでそれぞれのスナック芸の練習を行っていた。

「調子はどうだ？」

有馬も緊張しているが、なるべく声を平坦に抑え明るく言った。

「ああ、いつも通り。ところで有馬。委員長は？ 今日までに連れて来るって言っただろ？」

立石が丁寧にお札を折りながら訊ねる。

「すまないな、学校には来てるんだけど……」

目すら合わせてもらえない、と正直に言えずしどろもどろな有馬の背中に薄らと光が当たる。

「おつまたせー。連れてきたでっ」

視線を扉に向けると、そこには有馬と初めて出会った時の服装（青のワンピース）のリラと、その後ろに隠れるようにして統が立っていた。

「統、リラさん……ってなんで私服？」

「高校生は授業中やなかった？」

ついつい有馬はリラの設定を忘れてしまっていた。この中学の高等部の生徒ということになっているのだから、制服を着てここに

れば注意されるのは明らかだ。

統はどこにいたんですか？ 体育館の周りをうろちよろしてたから連れてきたねん。そんな有馬とリラのやりとりを無視し、統がリラの前に立った。肩にはトートバックを提げている。

「すまないが、僕はお前達にどんな言葉をかけていいかわからない。しかし、こうすることで緊張が解けるなら、そう思って練習してきた。見てくれないか？」

立石、四ツ木、青戸は目を見合わせ、頷いた。

「ではいくぞ」

統はトートバックからジューズ瓶を二本と財布から千円札と十円玉と百円玉を取り出し、横に置いてあつた長机に並べた。

緊張で指先を震わせながら統は千円札を横に折り曲げて置き、十円玉を透かし部分に置こうとする。その様子を見て有馬はリラに耳打ちした。

「リラさん、もしミスしそうだったら能力使って助けてあげて下さい」

「ええの？ 使って」

「いいですよ。ここでミスられたら幸先悪いどころじゃないですから。でも本番は、あの三人には使わないで下さい」

リラはオッケーと指を丸め、有馬に向ける。

統はお札の上に十円玉を置くことをぎこちなくも成功させ、次の芸に移るため瓶を立て、口元にお札を挟み、その上に口を下に向けた瓶を置く。大きく息を吸い、お札を指先で持ちピンと張らせ、張った部分を人差し指で下に弾く。瓶は倒れずお札が抜き取られる。そして最難関と思われる百円玉の上に瓶を斜めにして立たせる技も難なく成し遂げた。

瞬間、三人が拍手を送る。すっげーと感嘆し、ありがとうと統に寄っていく。

「委員長のがんばりを無駄にしないように僕も頑張るから……ありがとう」

青戸のその言葉に感情が揺らいだのか、統は制服の袖で目元を拭いた。

「リラさんありがとうございます」

「あたしはなんもしてないよ。ノーミスやで」

その言葉を聞いて有馬は小さく笑い、ありがとうございますと統に手を差し出した。統の手は震えていても熱く、汗ばんでいて、やっぱり有馬は笑いが止まらなかった。

緞帳が上がり、舞台を照明が照らす。

舞台の中央辺りに黒い布をかけた机が二つ置かれ、その後ろに長机も置いてあり、上にはジュース瓶が二〇本ほど並べられている。

上手には押上の友人が数人、下手には有馬とリラとひきこもり連中が舞台袖で息をひそめる。統はというと司会を買って出て、マイク片手に舞台上でスピーチのように堅苦しい挨拶を始め、それをうんざりとした表情で、これから戦う押上と立石が舞台上の机の前で見つめる。

統が両者にじゃんけんをさせ、有馬達のチームが先攻となった。

片方が成功し、もう片方が失敗した次点で負け。サッカーのペナルティキックの延長戦と同じ要領だ。

いざ勝負が始まると、さっきまでの表情を消し、引き締まった表情でお札を丁寧にきつちりと折り、慎重に透かし部分に十円玉が置く。その瞬間小さな声が上がる。押上も負けじとこなれた手つきで成功させる。

四ツ木と青戸は舞台袖ギリギリまで行き、力を送るような必死さで立石を見つめる。

その三步後ろ辺りでいたリラは有馬に小さな声で話しかけた。

「ごめんやで有馬。姿消した方がいいと思ったんやけど、あたしもおった方があの子らの不安なくなるかなと思って消さんかったんやけど……最後やからまけてくれる？」

そんなリラの言訳に有馬は笑みをこぼす。

「知ってますよ、リラさん」

何が？ と焦りと戸惑いを含んだ表情でリラは有馬を見つめる。

「もう能力はほとんど底をついているんですね。だから電力も弱いし、体も消せない、でしょ？ 意味もなく能力を使うことを嫌がったのはこのためですよ」

「何で知ってるん？ 誰にきいたん？」

リラの声と被って会場にわずかな歓声が上がる。舞台上で大きく手を上げる押上の様子からすると負けたようだ。舞台袖にいた二人は立石に励ましの言葉をかけ、タッチをすると入れ替わるようにして四ツ木が舞台に移動する。そして瓶を立て、準備に入る。

「和勝です。あいつが色々調べてくれました」

感情を込めず言う有馬とは対照的に、リラの目元は徐々に赤く腫れていく。

「ずっと思ってたけど、有馬ってあたしのこと……信用してないやろ。ここっというときに頼ってくれへんし、ただの便利屋さんとか思ってたへんのやろ。だからあたしにはあっちの世界のこと訊いてくれへんのよね。嘘つくかもせえへんと思ってるから」

「やっぱり馬鹿ですね、リラさんは」

震えるリラの肩に有馬はそつと手を添えた。

「こんなこと言うとおれですけど。あんまり関わると、さ、寂しくなるからですよ」

リラはハッとして有馬の顔を見る。その視線は舞台に向けられている。

「俺なんて見てないであいつらを見てやって下さい。ほら、勝ちました」

満面の笑みで何度もガッツポーズを取りながらこちらに戻ってくる四ツ木。喜びの表情で有馬を一瞥する。有馬はやったな、と四ツ木に一声かけ、舞台に向かう青戸の背中を見つめた。

その青戸は顔色が悪く、万全の状態とは言えないまま舞台上に上がる。額には秋だと言うのに汗が滲んでいる。となると手も濡れているだろう。百円玉の上に瓶を乗せる器用な作業にはとても不利だ。

「それとリラさん、もうそろそろお別れですが、恐らく俺が舞台上上がると何らかの事故が起これると思います」

「何でなん？」

「リラさんとの距離が離れるからです。約五メートルほどですかね。今まで事故があった時はこういう場面が多かった。そして俺の命を狙っている異世界人はこの学校に通っている。ならこのチャンスを逃すはずがありません」

「じゃあ、頑張つて有馬を助けたらええねんな」

そうですね、と有馬は頷き、もうひとつと人差し指を上げた。

「俺はずっと舞台上から変わった行動をする奴がいないか見ておきますので……もし無事だったら気持ちをそいつにぶつけましょう。並行世界をつなぐのは間違いだ」と

有馬がリラに右手を差し出す。リラはそれを力強く握った。

体育館にまた歓声が沸く。青戸はホツと息をつき、満足そうな表情で舞台裏にむかつて歩き、有馬の前で立ち止まった。

「あとは有馬が勝ったら終わりだよ」

「任せとけ。その前に、勝ったら俺の頼み事をきいて欲しい」

「どういうの？」

「ひきこもり連中がまだ学校にいるだろ。別に登校なんてさせなくていい。俺も学校に来る意味なんてわからないからな。でもひきこもりって一人だから寂しいだろ？ だからそういう奴らと遊んだり関わったりして欲しいんだ。お前ならひきこもりの気持ちもわかると思つて。……いいか？」

「いいよ、そのかわり勝つたらね」

青戸は悪戯な笑みを浮かべ、舞台の方を手で示した。

「ではラストマッチ！ 有馬と押上の三本勝負です」

張り切りすぎてうわずった声を出す統の声を聞きながら、有馬は舞台に向かう。

舞台上から生徒側を見ると、雑談や舞台に背を向ける者が多く、それほど注目されていないことがわかった。休憩時間中と言つこと

もあり、さらに遠くからでは何をしているのかわからない小技ばかり。これは文化祭のステージとしては失敗だな、と有馬は鼻で笑う。「何笑ってんだよ？ 真剣勝負だからな」

「もちろん」

二人のやり取りをよそに、統はルールの説明を始めた。先ほどと同じように失敗すれば負けだが、今回は芸が三種あるので、先に二勝した方が勝ちとなる。が、もし有馬が勝負に負けた場合、総合で二対二の同点となってしまう。その場合は有馬と押上の延長戦が行われる。といった内容を統がくどくどと説明し、観ている生徒達はだれ始める。これも客が減る理由か、と有馬は微笑する。じゃんけんは押上が勝ち、有馬は後攻となった。

押上は千円札の上に十円を乗せることが得意なようだったが、特異な瞳を持つ有馬も負けてはいない。何度も自分がスナック芸をしている動画を撮り、その瞳の持つ抜群の記憶力で修正に修正を重ねてきた。

一二回目でやっと押上がミス。有馬はそのプレッシャーに難なく打ち勝ち、綺麗にお札の中央に十円玉を置いた。

先勝、と心で呟くと同時に、まだ異世界人が攻撃を仕掛けてこないのかと不安になる。自分の思い違いか、と息をついたその時だった。

頭上から金属のすり切れる音がし、視線を上げると照明器具が不気味に揺れていた。有馬はすぐそばにいる押上が巻き込まれるかもしれないと思い、突き飛ばす。体が大きいからか、有馬が非力なのか、思ったよりも離せなかったが、ギリギリ被害が及ばない程度の距離を取れた瞬間だった。

大きな物音が有馬の頭上に響く。けれど視線を向けてはならない。この広い体育館を見渡し、異変を探さなくてはならないのだから。

更に大きな音がすると同時にリラが有馬に駆け寄った。

照明器具が有馬の頭上に落下する。

その時だった。有馬の瞳には体育館の一番隅で、この場にいるは

ずのない生徒が一点にこちらを見つめているのが見えた。

息をのむ有馬をリラが抱きかかえ、上手の方に突っ込んで行く。

有馬がいた位置には落下した照明器具が舞台の床に大きな傷をつけ、そこにもし人間がいたなと思うと絶句してしまう。観ていた生徒達は騒ぎ声を上げる。落下した照明器具のそばにいる押上はどうなっただと周りを見渡す。青戸と四ツ木と立石は驚きでその場から動けず、統はマイク越しに落ち着かせようと生徒を促す。

「ちよつと有馬、どこいくん？」

リラの腕の中から抜け出し、有馬は段上を飛び降り駆け出した。

その目線の延長線上には混乱に乗じて体育館を出て行こうとする彼の姿が映っていた。

一度は見失った彼の姿だが、有馬は慌てず、彼がいるであろう中庭に向かった。

そこにはいつものように木陰で佇む姿があった。有馬が来たことに気づき、彼は視線を上げる。

「有馬さん。どうしたんですか？ そんなに慌てて」

「どうしたも……お前だったのか、異世界人って」

息を切らしながら有馬が訊ねると、和勝はいつもと変わらない柔らかな笑みを浮かべる。

「へえ、気付いたんですね」

「舞台からお前がいることに気付いて全てに合点が付いた。学校に来ないのは病気じゃなくて人を殺しているからだ。休み時間に自販機に行くのは、密入界の証であるコインをなくし、それを探していたからだ。異世界に詳しくあったのは図書館で調べたからじゃない、和勝が異世界人だからだ」

一気に捲し立てる有馬。

「まあそんなことでしょ。でも密入界に必要な物が何かと気付いた点は称賛に値します。有馬さんが気付いたと言うことは、あの子を持つてるんでしょうけど」

「唯賀だろ？」

「あの子には少し関わりましたからね。能力を使わずに人間を使つて殺すために。そのときにコインを失うどころか殺すこともできなかったなんて大失敗です。こんなことなら押上さんとその妹や唯賀さんを巻き込まなければ良かった。ただ面倒なだけでしたよ」

有馬には和勝が言っていることが理解できなかった。あまりに唐突すぎて。

「じゃあ、あの電車の事故は和勝が起こしたのか？」

「起こしたんじゃない、起こさせたんですけどね。一番笑いそうに

なったのは、有馬さんが押上さんを避けてまんまと三号車に乗ってくれたことですかね。それがスイッチでしたから」

「俺を殺す為のか？」

「いいえ、有馬さんを殺すだなんてとんでもない」

そう言っていると和勝は視線を有馬の後ろに合わせた。振り返るところに駆けてくるリラの姿が見える。

「ちよい待て。どうしてリラさんを？ 和勝の仕事は俺を殺すことだろ？」

「それだと別に密入界なんて必要ないですよ、仕事をこなすだけなら」

言うと同時にリラの体が浮かび上がった。緩やかな風に流されるように。リラは手足を動かし逃れようとするが意味はない。

「僕はリラを殺したかったです。最初はこの世界を全て消そうと思いましたが、それは叶いませんでした。僕はあなたと同じ器ではなかったようです」

和勝は寂しげに言い、自分を侮蔑するように笑う。

「簡単に言えば、僕はあちらの世界で作られたクローンです、亡くなったあちらの有馬さんの器を持つ方の。そして作った方はリラの親です」

「話を聞くからリラを離してくれ！ 頼む」

五メートル程の高さを浮くリラを見つめ、有馬は声を荒げる。この高さから落ちれば骨折、打ち所が悪ければ死に至るかもしれない。「いえ、このまま聞いて下さい。有馬さんもここを動かないで下さい」

上空を漂うリラにキツイ視線を向けながら、和勝は淡々と話し始めた。

「リラの親はこちらの世界の科学とあちらの世界の超能力を融合させ、あらゆる実験していました。あちらの人間は通常ひとつしか超能力を持ってません。それを遺伝子組み換えし、多数の能力を持った能力者を作り――」

「それってリラさんのことか？」

問いかける有馬を鼻で笑い、和勝は続ける。

「さらに捨て子を引き取り、その子でクローンを作りました。そしてその捨て子は無能力者だったので、自分の娘と同じように後天的に能力を与えようと実験したのです」

その言葉を聞いてリラの涙が頬を伝う。

「リラさんは普段はぼけっとしてますが怒ると怖いんですよ。だから姉弟のように育って来た捨て子以外が様々な実験を受け、能力を与えられたことを知ると、彼女は研究施設をめちゃくちゃにしたんです。親も研究員も半殺しです、笑っちゃいますよね」

「やめてよ、思い出させんという」

嗚咽まじりの小さなリラの声が和勝に届くも、それを軽く笑って無視する。

「まあそれだけやればリラも無傷じゃすみませんよね。そこを実験で作られた唯一無二の能力……ヒーリングで捨て子は治したのですよ、自分の命を顧みず。治癒と言っても傷を己に移す能力ですけど……それで彼は命を落としました」

「それがどうしてリラさんを殺す理由になる」

「別にリラ自身にはそれほど恨みはありません。けれどその親には恨みがあります。僕を自分勝手に作ったにもかかわらず、思っていた能力を身につけなかったからと人身売買したのですからね。だから殺してやろうと思いましたが、先にリラが痛い目に合わせたのでそれならその娘を殺してさらなる苦痛を与えてやろうかと。なので仕事以外で能力を消費するため密入界し、リラを殺す為の能力を蓄えたのです。最初は刑を逃れるため、有馬さんを殺すように見せかけて、助けようとするリラを殺そうとしたのですが、彼女があまりにも粘るので。もう能力とイライラの限界で強行手段に出ました」

そう言つと和勝は首を左右に振った。するとリラも空中で左右に動き、周りに生える木々に体を打ち付けられる。

「僕は一体何なんでしょうね？ クローンで同一の生命のコピーな

ら有馬さんと同じ器を持つはずなのですが、あなたと出会っても宇宙は変化しませんでした。何か変化があればと思い何度か会ってみても何も変わらない」

自問自答しながら、和勝は更に強くリラの体を打ち付ける。リラの肌は木々の枝が突き刺さり、引つ掛けられ擦り傷だらけになっている。それでもリラは和勝を視線から外さない。

「その眼が嫌いです」

和勝は眼に力を入れ、睨みつける。これで最後だと力を瞳に込めて。

その尋常ではない眉間の皺に瞳の充血。そしてその視線。もしかして……。

有馬はそれに気付くと体が自然に動いた。

地面の堅い土を握りしめ、思い切り和勝に振りかぶる。

土が飛んでくることに和勝は気付かず、眼に土が入り咄嗟にリラから眼を離す。その瞬間だった。リラが落下する、が、木の上だったので枝がクッション代わりになりそれほど大事には至っていない。「くっそ、殺すんだ！」

すぐさま眼に入った土を取り除き、リラが落下した辺りに視線を向ける和勝だが、目の前には有馬がいた。

「こうすればリラさんに攻撃できないだろ？」

和勝の超能力は眼に捉えた物をサイコキネシスできる能力。だから対象物を瞳に映さなければ意味がない。

「そして俺を攻撃することもできない。俺を殺せばクローンのお前も始末されるからな。まあ、器が若干違うから両方殺されるかもしれないけど、俺が生きていれば可能性はないわけではない、だろ？」

くそ、と地面に這いつくばり手を叩き付ける和勝。悔しそうな横顔には涙が伝っている。

「リラさん眼は冷めました？ 和勝の体に電撃を当てて下さい。気絶させるくらいなら大丈夫ですよね」

リラは体を起こし、有馬の背後に隠れながら近づく。

「うん。でも、まだ気力ある？　この子」

「油断しては駄目です。まだこいつの感情の変化は治まっています、早く」

有馬の瞳には和勝を被う青黒い光が消えていない。

リラは小さくごめんと言いながら和勝に手を向け、電撃を当てる。小刻みに体が震えたうち回り和勝。悲痛なうめき声が漏れる。

「和勝。何事も眼を背けないでちゃんと見据えてくれ。リラさんはちゃんと見据えた。だからこの世界とあちらの世界をつなげない方法を探し、実行したんだ。成功かどうかはまだわからないけど。だから和勝。お前もお前の方法で見つけてくれ」

有馬が全てを言い終える前に和勝の意識は失っていた。その力が抜けた和勝の眼を隠すように有馬は自分の制服の上着を頭にかぶせた。

「じゃあ、リラさん。公園に行きましょうか、こいつをおぶって」

「うん、有馬……ありがとう」

ボロボロの体で心身疲れているにも関わらず、リラはいつもと同じ笑みを有馬に向ける。

「いいですよ。それより体が傷だらけですから早くあっちの世界に帰って治療してもらいましょう」

有馬はそう言って和勝を肩で抱き、持ち上げた。リラも慌てて有馬と逆の方を肩で抱く。有馬が持たなくてもいいと言っててもきかない。

そして二人は向かった。初めて出会った場所、中央公園へ。

夕闇に染まりつつある公園。その広場の外れの道路脇にある気味が悪いくらい綺麗な楕円状の石。そこに座りながら有馬とリラは五日がくるギリギリまで話し続けた。有馬が怪我をしているから早く帰れと言ってもかまわずリラは喋り続けた。

そして、およそ四九日終了三分前。

「そろそろ帰るな、有馬」

「やっつとですか？　ほんと擦り傷だからいいものの、これからは気をつけて下さい」

「うん、ありがとう。あたし有馬にはいっぱい感謝してる。最終的にはあたしが命を助けられたし——」

「たまたまですよ、止めはリラさんですし」

有馬がそう言うとりラは膨れっ面を浮かべた。

「最後まであたしの話し聞いて。有馬はあたしに前を向かしてくれ。有馬に会えへんかったら、あたしずっとアイツのことばかり考えてたと思う。ほんまにありがとう」

リラは笑って手を差し出す。有馬は照れ隠しにうつむく、が、これで最後なら眼を逸れしてはならないとすっかりリラの眼を見て口を開いた。

「俺の方こそ。この眼が異常だと知って絶望しました。リラさんと会っていなければ、俺は何を見るのも嫌になっただけです。リラさんは俺に見ることの大切さを教えてくれました。自分のことは他人を見ないとわからない。それから逃げていた俺を、俺を」

有馬はこらえきれない嗚咽に言葉がつまる。泣くことはできる、しかし有馬はそれを我慢した。そんな有馬の頭をリラはそっと抱える。

「ありがとうリラさん……俺、眼に映った世界を絵に描いてみます」

「うん。あとはため息つく癖も直したら完璧だな」

涙を拭き、視線を上げるとそこにはもう異世界人の姿は消えていた。

なんだかあつけないなと有馬は苦笑いしながら振り返ると、そこには見知らぬ青年が立っていた。彼が発する異様な雰囲気には有馬は察する。

「もしかして俺を殺しにきたんですか？」

男は低い声を響かせる。

「ああ、その通りだ四九日内に殺すと決めているからな」

それを聞いて有馬は小馬鹿にするように笑う。

「四九日はそっちの能力の都合でしょ？」

「その通りだ。しかし決まりは決まりだ」

「そっちの世界の都合をこっちに押し付けないでくれ。だいたい俺を殺せば和勝だって殺さなくてはいけないだろ。同じ器を持つ人間のクローンなんだから。せつかくのクローンをこんな無駄に殺していいのか？ そんな判断をお前一人ですべていいのか？」

「そ、それは……」

男は口ごもり困惑する。その様子を見て有馬は畳み掛けた。

「リラさんはこっちの世界とあっちの世界をつながないようにしたい。その結末が出るまで俺の命はとっておいてくれるか？ っ
なぐと決まった時点で殺してくれていいから。それと俺も仕事を手
伝うからさ」

「それはどういうことだ？」

男が有馬に仕事の内容を聞き、それはいい考えだ、と納得し姿を消した。

有馬は橙と青黒い空のグラデーションを見つめ呟いた。

「また始めきやな」

つきそうになったため息を有馬は飲み込み、代わりに笑ってみた。

エピソード

中学三年の冬休みを終えても忙しさは相変わらずだった。一週間を八日にしたいバンドの気持ちがかかるくらいに多忙だ。

マンネリ化した初夏を終え、俺の人生を良い意味でも悪い意味でも変えた少女と別れてからは得意の絵画に性を出す毎日。気が乗らなくても描けば意外とノってくるもので、友人からはマンネリ化してんじゃね？　と言われるがそんなことはない。だって眼に映る物はいいつも違い、新鮮そのものだからだ。

朝は七時五五分の普通電車の三両目に乗り、居合わせた押上と軽く談笑し、二駅先の大型駅につくまで統にメールでひきこもり少女との進展を訊ね、返信が来るまで多少見飽きた中学校を見つめてため息を飲み込む。

返信メールには「会えた」の三文字が表示されていた。

車内はいつもより少し熱く感じ、外気温がいつもより低いから、暖房が効きすぎているのかと思ったが違った。

周囲を見渡すと原因は明らか。二つ左隣にいるサラリーマンは顔から赤いモヤのような物を発していた。少々眼が痛むくらい明るい顔は見えないがどのような表情をしているのかは大体予想がつく。俺は仕事だと、眼を冷ますため自分の太ももを思い切りつねる。

そのサラリーマンは俺と同じ快速が来る駅で降り、その後を追う。そして隣の快速待ちのホームに列をなした。俺はモヤを発するサラリーマンの横に列をなす。

「特急列車が通過しますので黄色い線の内側にお下がりください」アナウンスがホームに響く。電車の姿は小さいが眼に捉えられるくらいの距離だ。

その時だった。サラリーマンは前の人達を押しわけ、線路内に駆けて行く。

俺は慌てて追い、その手を掴み制止させた、つもりだった。

所詮俺は中学生。大人の力に敵うわけがなく、振り切られ、ならばと体を掴んだが、俺の体ごとそのサラリーマンは線路に飛び降りた。こいつさては昔ラグビーやってたな、などと考えている場合ではなく、電車は容赦なくこちらに突っ込んでくる。あと十秒もすれば衝突するだろう。逃げられなくもないが、残念。落ちた拍子に足首を捻ったので思うように立てない。

線路に向かって手を組み懺悔するサラリーマンを、俺は手で力任せに押して隣の線路に押し込むことに成功したが、その俺が線路の真ん中にいては意味がない。死んでしまう。手は動くが足が動かないとは何という運命の悪戯。ならば匍匐前進しろよ、と言われそうだが咄嗟にできる物でもない。

電車はあと数秒すれば俺にブチ当たるだろう。眼を閉じ俺は祈りを捧げた。

その瞬間だった。俺の体はタツクルを決められ隣の線路に押し込まれた。

電車はスピードを落としながらも俺の元いた位置をそれなりの速度で通過して行く。電車が過ぎると同時に、その金属音と同じくらい大きな声が俺の耳元で響いた。

「バツカじゃない！ あんたはいつつもギリギリすぎるのよ」

「だって、自殺するなんて最後の最後までわからないから助けようないだろ……それに死にそうになればリラが来てくれるかもって思うんだよ、どうしても」

「はあ？ 最後聞こえないんだけど！」

制服姿の唯賀はそう言っただけで俺を貶しながらも手を差し伸べる。

「あんまりギヤーギヤー言わなきゃ、あとは良いのにな」

俺がちよつとした愚痴を言うと唯賀は顔を赤らめ俺の背中を強く叩いた。思わず咳き込んでしまう。そしてサラリーマンを確認すると、その顔に見覚えがあり、少々どきりとさせられた。しかし唯賀は気付いていないようで、胸を撫で下ろす。

「もう！ いい加減こんなことやめたら？」

こんなこととは自殺しようとしている人を見かけたら救うことだろうか。

「あの三人には恩があつて、あんたの手伝いしろって言われたからこうしてるけど。次、死にそうになっても助けないからね！ こっちも命がけなんだからっ！ それにあんたが死んだら誰があの変な絵を描くのよ。あたし好きなのよ、あのキュビズム？ な絵がさ」

「ああ、ありがとうな」

唯賀は俺の言葉を見無視し背を向けて、ホームに手を差し伸べ、周りにいた乗客たちに引き上げてもらう。

自殺者を救うこと。確かに危険かもしれないけど、あの異世界の男と約束したことだからやめるわけにはいかない。

それにこれがリラと……いや、並行世界をつなぐ方法だと信じているから。

エピローグ（後書き）

終わりです。

読んで頂いた方がとうございす&おつかれさまでした。

些細な感想でも頂ければ嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4731i/>

並行世界をつなぐまで

2010年10月8日15時26分発行